

わが八十年の歩み（年譜・補注）

所 功

(tokoroisao.jp)

本稿は、満八十歳を迎えるにあたり、生まれて以来の歩みを記録しておこうと思ひ立ち作成したものである。十年前に纏めた『古希随想 歴史と共に七十年』（総合出版社「歴史」、平成24年3月）には「略歴」を付載したが、ごく簡単なものにすぎない。

そこで、今回は私的なことも加えながら、なるべく詳しく年譜と補注を記すことにした。ただ、個人情報への配慮から省いたことも少なくない。

その典拠として用いたのは、母が結婚当初から晩年まで六十年近く付けていた日記、また私と妻が五十二年前に結婚するころから書いてきた手帳のメモなどである。それを補った縁者等からの伝聞や私自身の記憶には、不正確な部分が含まれているかもしれない。

参考までに、私の八十年余にわたる人生を仮に区切るならば、およそ次の四期に分けられる。

I期 西美濃と名古屋における修学期

※昭和16年12月出生〜同41年3月院修了、24年半

II期 皇學館と文部省における研鑽期

※昭和41年4月就職〜昭和56年3月退官、15年間

III期 京都産業大学を中心にした活動期

※昭和56年4月転職〜平成24年3月退職、31年間

IV期 モラロジー研究所における奉仕期

※平成24年4月就任〜令和3年12月在任、9年半
もちろん、程なく平均寿命を越える私は、準備中の『未刊論考デジタル集成』（補巻も含めて全十七冊）の完成すら見届けられるか判らない。それゆえ、コロナ禍の初めから準備して、既刊書以外の論考を集成しているのであるが、その背景理解の参考資料として、この年譜も御覧いただければありがたい。

尚、本稿のデータ化を担当された同学の野木邦夫氏（日本学協会研究員）に、心から感謝の意を表す。

（令和三年三月起稿・六月成稿／十二月補訂）

凡例 一 記事は、原則として年月（日）順に簡潔な

網文を記し、そのうちの主要な事項を※の部分で少し詳しく説明する。

二 年齢は、自分も他者も、誕生の年を1歳とする数え年ではなく、たとえば満一歳は翌年の正月から1歳として示す。

I期 修学期

昭和16年（一九四一） 〇歳

・ 12月12日、午後8時ころ、岐阜県の西美濃、揖斐郡小島村（現在揖斐川町小島）野中の自宅で元気に誕生する。父久雄（29歳）と母かなを（25歳）の長男。功（いさお）と命名される。

※揖斐郡小島村：揖斐郡は明治三十年（一八九七）

以降の郡制、昭和三十年（一九五五）の町村合併により、揖斐川町・池田町・大野町から成っている。平安時代（九三〇年ころ）の『倭名類聚抄』

にみえる「池田郡」と「大野郡」に相当するが、

その池田郡には額田・壬生・小島・伊福・春日・池田の六郷、また大野郡には檜斐（揖斐）以下の十三郷が属する。

この旧池田郡の小島郷は、小島山の麓に広がる扇状地であり、揖斐川と春日川の水利に恵まれて稲作農家が多い。中世の小島荘は、京都の青蓮院領となり、やがて土岐氏が支配していた。

その関係から正平八年（一二五二）、

後光厳天皇が土岐頼康を頼って小島へ来られ、瑞巖寺を頓宮として二ヶ月近く滞在された。そこへ訪ねてきた関白二条良基の紀行文「小島のすざび」古写本が、瑞巖寺（臨濟禪寺）に伝存する。

近世の小島村（中心が小島の四区）は、天領・尾張藩領・大垣藩領から成り、私の生まれ育った野中区は天領であった（拙著『野中の歩みと社寺の営み』参照）。

※自宅：父が祖父と弟（大工）の二人で協力して昭和十年に仕上げた二階建の木造家屋である。

※父久雄：明治45年Ⅱ大正元年（一九一三）11月27日生まれ。父金作と母きくの長男（姉二人・弟一人）。小島小学校高等科卒業後、小作農家を継ぎながら、青年学校に通う。昭和13年4月15日結婚。

同年3月24日祖父病死、また10月17日祖母病死。

※母かなを：大正5年（一九一六）8月23日、現在の池田町白鳥生まれ。父河本桑次郎と母みよのの長女（兄弟三人・妹二人）。隣の安八郡神戸小学校高等科卒業後に数年、岐阜市の成瀬家で手伝い奉公をしてから、遠縁の父と見合い結婚した。

※命名：同年12月8日に開戦、12日「大東亜戦争」と称されることになった戦時下のため、将来もし召集されたら「勲功」を立てるようになるというの気持ちをこめて、父が「功」と名づけたという。

昭和18年（一九四三） 2歳

・7月27日、父が南方ソロモン諸島ニュージョージア島ムンダで戦死する（31歳、満30歳8ヶ月）。

昭和23年（一九四八） 7歳

・4月から小島村立の小島小学校に入学する。二クラスで80数名（都会からの疎開児童が徐々に転校）。担任は小岩あや先生（二年間）。校長は河野大助先生。

入学直前、父の納骨に初めて京都へ行く。善徳寺の日曜学校に通う。春と秋のお彼岸に播隆山へ登る。

※小島小学校：日本の近代的な小学校は、明治五年（一八七二）八月の「学制」頒布に始まる。それを承けて当地では、早くも翌六年三月、二宮神社の祠官宅で開かれていた寺子屋「秉彝舎」を仮校舎にして「秉彝学校」と称した。ついで同九年、のち小島村となる十三村（東の大門・溝尻・野中・堀・東野、南の和田・黒田・岡・新宮、西の瑞岩寺・市場、北の白樫・上野）の中央（現在地）に建てられた新校舎に移転している。

さらに同三十四年（一九〇二）、白樫出身の宮大工内田仙司が棟梁として建てた立派な「小島尋常

※召集：父が昭和17年7月24日に出征し、岐阜市の原隊で訓練を受け、12月に広島島の宇品から出航するまで、母は私（1歳）を背負い好物を持って、何度も面会に向き、父を励ましたという。

※戦死：二二九連隊十二中隊の陣地壕で米軍の艦砲射撃を受けて即死したという。陸軍兵長。その戦死公報が母（27歳）のもとに届いたのは、同年11月21日、勅摺作業の最中であつた。

昭和20年（一九四五） 4歳

・8月18日、母方の祖母（55歳）が病死する。

※祖母：父の戦死後、超多忙な母の代りに私を育ててくれた外祖母の最期は、鮮明に覚えている。

その後も小学校に入るまで、母の里で従兄妹と遊ぶことが多かった。また野中の家では隣へ疎開中の高松金之助さん家族から親切にして頂いた。

さらに父の再従兄羽実静太郎さんが一家をあげて長らく農作業などを助けてくださった。

小学校」の木造校舎と、昭和十七年（一九四二）落成した大講堂（兼雨天体操場）が、戦後も昭和三十五年（一九六〇）ころまで使われてきた。

※担任：小岩先生が産休の間、隣組の中村峰子先生による絵本の読み聞かせで、本好きになる。

※河野大助校長：若いころ父の担任だった縁もあり、一年生冬に肺炎で休んだ私を見舞い「早く元気になって親孝行せいよ」と励まされた。

※父の納骨：小石入りの白木箱で帰還した父の遺骨納めに京都の大谷廟へ詣り、名所を見物した。

※日曜学校：毎月一回日曜日。野中区にある善徳寺（浄土真宗大谷派）で浅井徳賢住職から子供会の小學生に御経（正信偈など）の読み方を教えてもらい（ほとんど暗誦）、面白い説教を聴いた。

※お彼岸に播隆山へ：小学校の六年間、春と秋のお彼岸には、近所の友達と揖斐の播隆山へ駆け登り、一心寺の堂内で恐ろしい「地獄絵」の掛軸を見ながら怖い説教を聴いた。

昭和25年（一九五〇） 9歳

- ・4月から小島小学校三年生。担任杉田藤一先生（二年間）。級長に指名される。読書好き高まる。秋の遠足で横蔵寺へ詣り、初めてミイラを見る。

※級長：村内で有力者の令息や令嬢でなく、貧農の内気な私を指名された先生方の配慮に驚いた。

※読書：校内の図書室の本（偉人伝『野口英世』など）を毎週一冊読む。揖斐祭の露店で求めた子供向けの『源平盛衰記』なども愛読した。

また、高山市出身の手足が不自由な中村久子さんの自伝『無形の手足』を読み、揖斐小学校の講堂で直接お話を聴いて、頗る感銘を覚えた。

なお、母からのプレゼントで四年生の四月から「毎日」でも新聞」を二年間購読した。

※横蔵寺のミイラ：「美濃の正倉院」とも称される横蔵寺には、文化十四年（一一八一）富士山麓で一ヶ月断食して即身成仏した「妙心」法師（37歳）のミイラが安置されている。それを舍利堂で拝み、

こういう往生もあることにショックを受けた。

昭和27年（一九五二） 11歳

- ・4月から小島小学校五年生。担任中沢剛先生。六年次は国枝定一先生。級友阿波公一君らに推し出され六年生の候補と競って児童会の会長に選ばれた。

※児童会：講和独立（4月28日）直後に初めて国旗を掲げた講堂で立ち会い集会があり、「子供貯金」の推進などを呼びかけた。

- ・五年生の夏休みに霞ヶ浦の「臨海学校」に参加した。秋彼岸に「戦没者慰霊祭」参列。絵画教室に二年近く通う。六年生の秋に関西へ修学旅行。

※臨海学校：二クラスの男女生徒が四日市霞ヶ浦で臨海学校に参加し、初めて大きな海の彼方を眺め、地球が丸らしいことに驚いた。

※絵画教室：図工科の非常勤講師馬場（のち小倉）

重臣先生に勧められて揖斐町の絵画教室へ通い、写生大会の作品で県知事賞を頂いた。

※戦没者慰霊祭：日露戦争後、村役場前に建てられていた乃木希典大将揮毫の「忠魂」碑は、敗戦後占領下に撤去埋納されていた。それが講和独立を機に再建され、そこで仏式の慰霊祭が行われた。

※関西への修学旅行：電車を乗り継ぎ、奈良と京都を見学した。仏像に興味をもち、お小遣で仏像のミニチュアや絵葉書を求めた。

昭和29年（一九五四） 13歳

- ・4月から小島中学校に入学。担任は岩井亨乙先生。勧められて音楽部に入る。家の仕事だけでなく、村の仕事にも段々出るようになる。

※小島中学校：小学校と同じ敷地に校舎が増設され、久瀬村三倉の同級生も編入して二クラス約90名。

※岩井先生：学級担任で社会科担当のベテラン。その授業は、国語科担当の井口（のち林）徳子先生

と共に明快で面白く、歴史と国語が好きになる。

※音楽部：指導熱心な顧問の窪田上先生に勧められて入部し、二年次から部長を務めた。

※家の仕事：わが家の稲作農地は、小作の父が働いて買った自作地も、戦死したので大半を他人に借していたら、戦後の農地改革で不在地主として放棄を余儀なくされ、結局五段余しか残らなかった。それでも、牛を飼って営農することは、母にとって大変な重労働だったから、私も幼少時から可能な限り手伝いに励んだ。その比重が中学・高校・大学にかけて段々多くなった。

※村の仕事：村（野中地区）では、細長い区内が五組（各十数軒）に分けられている（私の家は一号組）。西の野中神社、中の善徳寺、東の火葬場と共同墓地、および揖斐川上流の入会山林を皆で維持するため、順番にみんなで取り持つ共同作業が、長らく（江戸時代から）行われてきた。

そのほとんどは成人男性が出るようになっていたので、母や私が出て半人前とされた。そんな

力仕事に父の戦死以後十年余り母が出てくれ、中学生になってからは私が出た。かなり辛かったが、そのおかげで、ひ弱な私が段々と丈夫になり、今なお健康でいられるのかもしれない。

- ・ 8月22日、靖国神社に遺児仲間と参拝する。

※靖国神社に遺児仲間と参拝：岐阜県遺族会の引率により、県下の遺児百数十名と8月21日に上京し、22日靖国神社に昇殿参拝した。

その際に、母から父の遺書（手紙と葉書）を見せられて驚いた。また靖国神社から配られた崇敬者総代小泉信三博士の冊子『遺児の皆さんへ』（のち『国を思ふ心』所収）を読み感銘を受けた。

昭和30年（一九五五） 14歳

- ・ 4月から町村合併により揖斐川町立となった小島中学校の二年生。男子組の担任は高橋忠一先生（二年間）。生徒会長に選ばれ、ビニール尺八で全校演奏を

実現する。夏休みに伊吹山へ初めて登る。

※ビニール尺八演奏：町村合併に伴い始まった水道の敷設工事により出来たビニールパイプの廃材を使って尺八を作り、全校生徒による演奏をさせてほしいと提案し実行したところ、NHK・各新聞のローカル版に放映・掲載された。

※伊吹登山：高橋担任の引率で男子生徒二十数名が、春日村の六合小学校で仮眠の後、歩いて山頂まで登り、日の出を拝んで再び歩いて下った。

昭和31年（一九五六） 15歳

- ・ 4月ごろ、高校入試の岐阜県内の小学区制が来年度から中学区制に変更予定と知らされ、秋の修学旅行後に進学を決心する。

※学区制の変更：昭和二十二年度に発足の新制公立高校は、10年近く小学区制であったから、小島中学校では揖斐（農林）高校しか受験できないため、

同級の五名は二年次に大垣の興文中学へ寄留した。私は暫く就職してから家業を継ぐ予定であったが、西濃一円で受験可能な学区拡大によって進学したくなり、夏休みから俄勉強した。

※関東への修学旅行：鎌倉・東京・日光の名所見学。お小遣い貯金で絵葉書などを買って尽くした。

秋の運動会で応援団長を務め、また冬の村内半周マラソンで初めて三位に入賞した。

昭和32年（一九五七） 16歳

- ・ 4月から岐阜県立大垣北高校に進学して長距離通学。その春休み中に谷汲村で全国植樹祭があり、昭和の両陛下を奉迎する。

高校は一学年約三五〇名で8クラス編成。1年C組の担任は若い田中（のち桜本）明子先生（名大出身、英語担当）。優秀な級友に助けられる。放送部に入る。

※長距離通学：片道一時間余の通学（自転車15分―近鉄電車40分―徒歩10分）、三年間ほぼ皆勤。

※全国植樹祭：昭和25年（一九五〇）度から開始された全国緑化推進の第8回大会が4月8日に岐阜県揖斐郡谷汲村（現揖斐川町谷汲）で開催された。そこで友だちに誘われて昭和天皇（56歳）と香淳皇后（54歳）を名鉄本揖斐駅の近くで奉迎に行き、不思議な感動を覚えた。

※大垣北高校：明治二十七年（一八九四）に開設され、同三十二年に改称された「大垣中学校」と、同三十三年に開設され、同三十六年に改称された「大垣高等女学校」とが、戦後統合されて昭和二十四年（一九四九）から「岐阜県立大垣北高等学校」と称されることになった。

※優秀な級友：たとえば超秀才の中西重忠君（のち京都大学医学部長など。日本学士院恩賜賞受賞・文化勲章受章）は、五十音順の席がすぐ後だから、英数理に弱い私が先生の質問に窮すると、小声で教えてくれた。ただ、春の一斉学力テストで何故か私が国語のみ一回だけ一位となり、少し自信を取り戻した。

※放送部：級友の松岡惣吉君に誘われて放送部へ入り、好きな名曲のレコードを選んで流した。

昭和33年（一九五八） 17歳

・4月から文理混淆の2年D組で、担任は桜本英二先生（数学担当）。理系の強い級友に助けられる。また「先輩」に説得されて生徒会の副会長を務める。

※理系の級友：安藤義則君（のち名城大学理学部長、瑞宝中綬章受章）など。一年以来の中西君は大垣市立図書館で司書の父君に私を引き合せて、いろいろ便宜もはかってくれた。

※生徒会：結核で留年し復学してきた同級のT先輩が、水泳で団体にも出た国枝一孝君（のち千代田生命役員）を会長に立て、Aさん（京大卒、薬剤師）と私を副会長に推し出した。

尚、国枝君が退職後、学習院大学で歴史と文学を熱心に聴講して書いた論文の出版を、癌で入院中に相談してこられたので、手伝って実現した。

・夏休みに歴史担当の稲川誠一先生の勧めで日本学協会主催の千早鍛錬会に初参加し、平泉澄博士の講義に感銘。二学期から「歴史同好会」を立ち上げる。

※稲川誠一先生：大垣北高へ私の入学した年に赴任（32歳）、歴史（世界史と日本史）を担当された。授業が頗る面白く、部活指導にも熱心であった。

※千早鍛錬会：大阪府（安井英二知事）により昭和十一年（一九三六）に設立された青少年研修施設「存道館」を会場として、戦後（昭和二十九年）再開された日本学協会主催の合宿研修会である。

私が初めて参加した高校生班の班長小谷恵造先生（30歳、古典〈源氏物語など〉研究者）と班付指導者の竹内道雄先生（38歳、禅宗史〈道元禅師など〉研究者）にも懇切な指導を賜わった。また班員の但野正弘氏（水戸一高二年、のち植草学園短大名誉教授）などから刺激を受けた。

※平泉澄博士の講義：戦前から「日本学」の重要性

を提唱して来られた平泉澄博士（明治28年〜昭和59年、当時63歳）は、千早鍛錬会で「先哲遺文」の講義（注釈と解説）をされた。

この年には、吉田松陰の「松下村塾記」を教本とされ、特に「君臣の義」（君主と臣下の秩序）と「華夷の弁」（自国と外国の区別）の重要性を認識することが必要と説かれた。

※歴史同好会：北高から一緒に千早鍛錬会へ参加した安井英明君（学習院大学卒後、大手銀行勤務）と相談して、稲川先生に顧問を頼み、同好の勉強会を始め、時々大垣近辺の史蹟を探访した。

卒業後も有志で「汗青会」を作り、同六十年（一九八五）の先生歿後も勉強会を続け、今に至っている（現在の幹事は従弟の橋本秀雄君。「汗青」は青史＝歴史を意味する）。

昭和34年（一九五九） 18歳

・4月から文系中心の3年C組で、担任は竹中照洗先生（国語担当）。4月5日深夜、納屋全焼し、また9

月26日來襲の伊勢湾台風で稲作被害も重なり、大学進学を躊躇したが、あらためて決意する。年末に稲川先生の用務を親友たちと手伝う。

※納屋の焼失：大雨で浸水し石灰が発火した。その焼け音で目覚めて近所に触れ回り、役場でサイレンを鳴らし、駆け付けた村人の懸命なバケツリレールで母屋への延焼を防ぎえた。

その五日後の皇太子殿下（26歳）・美智子妃殿下（25歳）の御成婚祝賀パレードは、母と共に小島小学校の宿直室へ行き、白黒テレビで拝見した。

※伊勢湾台風：東海三県を中心に明治以降では最大被害（死者五千人超）の大型台風。わが家では雨戸などが吹き飛び、収穫間近の稲が倒れて落胆。北高祭中止。修学旅行（高松〜広島方面）も延期。

※進学を躊躇：苦勞続きの母（43歳）を見かねて進学断念を考え、担任に相談したところ、「日本育英会など奨学金を受けアルバイトもすれば、何とかなるから頑張れ」と励まされ、進学を決意した。

※稲川先生の手伝い：稲川先生は当時全盛だった高教組（労働組合）を脱退し、有志と教育正常化の研究協議会を立ち上げるため、趣意書を数千通発送する準備に超多忙と知り、受験勉強を一週間中断して数名で宛名書き等を手伝った。

昭和35年（一九六〇） 19歳

・3月3日～5日、国立一期校の名古屋大学を受験し、18日合格発表。直ちに矢橋謝恩会の育英奨学金を申請する（入学式当日に採用通知届く）。

※受験合格：受験校は、授業料の安い国立で、自宅から通学できる所に限ると決め、一期校の名古屋大学と二期校の岐阜大学に受験した。

当時の国立大学では、英語（文法・作文）・国語（漢文・古文・現代文）・数学（幾何・代数）・理科（物理・化学・生物）・社会（日本史・世界史・地理・現代社会）の全テストを三日間受けた。
この時に合格した十七名（うち女子一名）は、

卒業後「大名（おうめい）会」という同級会を作り、毎年数名が集まっている（現在の世話人は英文科出身の桐山晃一氏）。

※矢橋謝恩会：大垣市赤坂にある矢橋大理石商店の創業者矢橋亮吉氏（慶応3年～昭和21年、80歳）が戦前から始められた育英事業の公益財団法人。その申請資格は長らく理系学生に限られていたが、理事（大垣北高齋藤清次郎校長）の提案によって、昭和35年度分から文系学生も申請可能となり、名大文学部では私が初めて採用され、学部卒業まで全額給付を受け、ひそかに将来「謝恩」できると励ますことを心に誓った。

それに対して日本育英会と岐阜県選奨生の奨学金は、原則貸与であったが、のち研究教育職に就けば減免され、私もその恩恵にあずかった。

・4月8日、和装の母（48歳）を伴って、高校以来の学生服・イガグリ頭で名大の入学式に出る。
15日から長距離通学も気にせず初登校したが、当時

昭和区の滝子にあった旧八高跡の校舎は、「安保反対闘争」中の学生自治会によるストが続いていた。その間に家庭教師のアルバイトを始める。

※長距離通学：平日順調でも、自宅から自転車です分、揖斐駅から近鉄電車で40分、乗り換え5分、大垣から国鉄列車で50分、乗り換え5分、名古屋駅から市電かバスで30～40分、滝子から校舎まで歩いて10分、合計片道2時間半余りを要した。

※「安保反対闘争」：米ソ冷戦下の昭和27年（一九五二）に発効した片務的な「日米安全保障条約」を改定しようとする岸信介内閣に絶対反対を唱える勢力の「民主青年同盟」（民青）が主導する学生自治会は、語学クラス教室や全学集会でアジ演説を行い、授業放棄のストを決議して街頭デモに出る煽動を繰り返した。それに時々敢て異を唱えると、オルグから罵詈雑言を浴びせられたので、やむなく学内図書館へ避難した。

※家庭教師：婦人会の役員をしていた母が頼まれて

きた揖斐川町内のIさんやAさんの息子（共に中学生）などの家庭教師を始めた（毎週土曜日）。
ついで矢橋謝恩会のKさんに紹介されて、大垣で会社重役の令息S君（小学生）や店主・開業医の令息O君・T君（共に高校生）などの家庭教師を毎週三日掛け持ちした。
尚、新入生歓迎会で聴いた男声合唱に魅了されて「名大グリークラブ」に入部した。しかし放課後の厳しい練習が名古屋城郭の第三師団跡にあった文学部校舎で行われ、その後には帰途、家庭教師をすることが難しくなり、夏休み前に退部した。

・6月15日、「安保反対闘争」で東大女子学生が圧死。まもなく名大校内のストもデモも少なくなり、教養部の授業がまともに行われ始める。

※女子学生の圧死：岸内閣の安保強行採決に抗議する勢力が国会周辺デモに結集し、共産主義者同盟書記局員の樺美智子さん（23歳）は、デモ隊に押

されて圧死した。その才嬢が東大国史学科で卒業論文作成中だったと知り、ショックを受けた。

※教養部の授業：当時の教養部では、人文・社会・自然の三分野で各12（合計36）単位、複数の外国語24単位、体育8単位を全部取得しなければ学部へ進めないことになっていた。

そのうち、人文分野の歴史学は、教養部所属の指導教官でもあった佐々木隆美教授の日本文化史、文学部におられた尾藤正英講師の近世思想史、また岸田達也助教授の西洋史学史などが面白かった。なお、体育にテニスをとったのは、当時いわゆるミッチーブームの余波で希望者が多く、出席さえすれば単位がもらえたからである。

・ 8月4日、矢橋謝恩会の夏季懇親会で矢橋会長から評伝『所郁太郎』を頂く。5日から千早鍛錬会に参加し、日本学生協会の有志と交流を始める。

※評伝『所郁太郎』：赤坂の矢橋家で生まれ、揖斐

に近い大野の所家へ婿入りした蘭方医の所郁太郎（天保6年〜慶応元年）の生涯（27歳）を、『美濃大正新聞』記者の青山松任氏が精査した名著である。それを会長の先代亮吉翁が自費出版されていたものを頂いた（のち新人物往来社から復刻）。

※日本学生協議会：市村真一先生（当時大阪大学助教授、のち京都大学名誉教授）などの指導される関西の有志学生たちが結成した組織。その研修会で、『中央公論』十二月号に掲載された深沢七郎氏の皇室愚弄小説『風流夢譚』を黙過せず「皇室の尊厳を護る」署名運動に協力する議論もあった。

昭和36年（一九六一） 20歳

・ 正月15日、揖斐川町公民館の町主催「成人式」に参列。栗野一雄町長の式辞に感銘を覚える。小島校区の同級生たちに飲めない酒を飲まされ、帰宅してから『土規七則』を毛筆で書写する。

※町長の式辞：栗野一雄氏は昭和30年（一九五五）

の町村合併以来の初代町長で、もの静かながら信念が強く、この時も「新成人は『国民の祝日』に示すとおり「大人になったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年」でなければならぬ。

国歌の「君が代」にたとえれば、小さなさざれ石が寄り集って大きな巖となるように、若い皆さんが一国民として心を合せ、しっかりと日本国を作り支え続けてほしい」と述べられた。

これは当時、春日川上流で小林宗閑氏が見つけた石灰質角礫岩「さざれ石」（岐阜県天然記念物）も念頭に置いての話であろうが、まだ「君が代」

反対論の強い中で、よくぞ言われたと感心した。
※『土規七則』：幕末の安政三年（一八五六）正月、吉田松陰（数え27歳）が従弟の玉木毅甫（数え15歳）に贈った「成人」の簡明な心得書である。

これを千早鍛錬会で学んで以来、折々に拝読して暗記したが、自らの成人式に際し、あらためて清書した。のち萩市の松陰神社で原文版本の複製刷を手に入れ、額装して机上に掲げた。

・ 5月28日、名大祭で語学クラスの演劇に出て入選。
6月6日、名大コンクールの問題作成会員に採用。

※語学クラス演劇：教養部の外国語学は、一年次から第一英語、第二ドイツ語、第三中国語を履習した。同級生の大半が学生自治会に入り、入らない私と言動を異にしていたが、語学のクラスメイトとしては仲が良く、名大祭では、神野清一氏（のち中京大学名誉教授）脚本・演出の創作劇を一緒に楽しんだ。

※名大コンクール：名大の学生が運営する大学受験の模擬テストと通信添削のアルバイト組織である。語学クラスの友人に誘われ、一年次から模擬監督や採点・添削に励み、二年次から問題作成委員（国語科委員）に選ばれた。ここで文武両道の優秀な田島毓堂先輩（のち国語学者・名古屋大学名誉教授）などに出会うことができた。

昭和37年（一九六二） 21歳

- ・ 4月から文学部の校舎で専門科目の授業が始まる。春休みから始めた近畿日本ツーリスト修学旅行センター添乗員のアルバイトは、以後も二年近く続ける。また5月から一宮市山下病院長の服部敏良博士から依頼され、医学史の研究を手伝う。

※文学部の授業：最後の帝国大学として昭和十四年（一九三九）設置された名古屋大学に「文学部」が開設されたのは、同二十三年度からで、仮校舎は名古屋城郭の旧三師団兵舎を使用していた。

当時国史学科で指導を受けたのは、主任教授の中村榮孝先生（61歳、日鮮関係史）、助教の彌永貞三先生（47歳、日本古代史）、非常勤講師の小島広次先生（古文書実習）、助手は重松明久氏後任の藤村道生先生（33歳、近代政治史）などであった。中村先生はヘビースモーカーで、講義の途中10分休憩をとり、おいしそうに「光」を吸われた。また彌永先生の『三代実録』講読や『令集解』演

習には、大学院の卒業生・在學生（古代史専攻の水野柳太郎・新井喜久夫・富田喜久子（中世史）・上村順道・福岡猛志・横田拓美・玉井力の各氏など）も時々参加して、我々を指導された。

※修学旅行の添乗員：愛知県下の小・中・高校で春か秋に行われる修学旅行を手伝うため、正社員と同様に実務を担当する責任の重い仕事であったが、関西・四国・中国地方の史蹟・名所などを何度も案内することは勉強になった。ただ、二泊三日か三泊四日の実施日と前後の説明・挨拶に行くため、大学を休むことが多くなり心苦しかった。

※服部敏良院長の医学史研究：一宮市から通学していた西洋史学科の徳田直宏先輩（のち南山大学名誉教授）から、珍しいアルバイトを紹介された。山下病院の服部敏良院長（当時57歳）は、内科の開業医であったが、戦時中から日本医学史の研究を独力で始め、これから中世・近世に取り組むために、史料（漢文・古文）の読める研究助手を求められたのである。

私は文学部・大学院の四年間（月二回）だけでなく、それ以後も二十数年間（原則月一回）手伝いを続けた。その特色は、各時代の重要な人物の性格・病状・死因などを診断することであり、それに必要な当代の史料を探索してほしいと依頼された。初仕事は『明月記』や『吾妻鏡』などから

広義の医学医療に関係のありそうな記事を書き抜くことであった。これにより、同じ史料でも関心の持ち方でいろいろ活用可能なことを学んだ。

- ・ 9月中旬の二週間、一宮高校で教育実習に努める。11月上旬、大須の真福寺で宝物曝涼を手伝う。

※教育実習：名大を卒業したら岐阜県の高校教諭になるため、教養部の時から名城校舎の教育学部へ通い教職単位を取った。その教育実習をするため、服部院長の所へ行く都合も考えて、愛知県下で有数の県立一宮高校で実習をさせて頂いた。社会科学日本史担当のK先生は相当に厳しく、進学クラス

の生徒はレベルが高くて、毎日苦勞したが、後で好評の感想文をもらった。

※真福寺の宝物曝涼：通称「大須観音」北野山真福寺宝生院は、鎌倉初頭に創建され、江戸初期に現在地（名古屋市中区大須）へ移築された真言宗の名刹であり、貴重な一万数千冊の古典籍等を宝蔵している。

毎秋の曝涼（虫干し）には手伝いの依頼が国史研究室にあり、中村教授の推薦を頂いて田辺裕君と参上し、国宝『古事記』や重要文化財『将門記』『尾張国解文』『本朝文粹』などを熟覧できた。

- ・ 10月、藤村助手から各自で卒業論文のテーマを考え指導希望の先生と相談するよう言われ、思案の末に「三善清行とその時代」を仮題として、彌永助教に指導をお願いする。

※卒業論文のテーマ：私は早くから仏教史に関心があり、初め虎関師鍊著『元亨釈書』（一三二二年撰

上)の文献的な研究を考えた。しかし既に詳しい先行研究があることを知って断念した。

ついで幼いころから興味をもっていた「天神さん」菅原道真の伝記的研究を考えた。けれども、指導教官の彌永先生自身が当時道真に関する研究論文を書いておられると判ったので、代りに同時期の文人官吏三善清行みよしよみに関する伝記的研究をテーマとして準備を始めたのである。

昭和38年(一九六三) 22歳

・6月下旬一週間、坂本太郎博士の集中講義「律令と六国史」を聴講する。

※坂本太郎博士の集中講義：博士(当時62歳)は、

浜松中学から第八高等学校を経て東大の文学部国史学科と大学院に学び、戦前・戦中・戦後も東大で実証史学を貫き幾多の後進を育てあげ、昭和37年(一九六二)3月に東大を退官して國學院大学教授に就任された。

その11月に人物叢書『菅原道真』を出版されたから、卒論に三善清行を選んだ私は、最新最良の先行文献として繰り返し精読中であつた。そんな懂れの先生が、東大で同期の中村教授と坂本門下の彌永助教授からの依頼に応えて来学され、「律令と六国史」のテーマで多年の研究成果を、午前も午後も明快に講述して下さつたのである。

尚、翌三十九年度には、東大文学部教授の下村富士男先生(明治外交史)、また翌四十年には、東大史料編纂所々長の竹内理三先生(『平安遺文』編著)の集中講義があつた。お二人とも講義は午前中だけで、午後は自由に院生などと懇談して下さり、いろいろな裏話も聴くことができた。

・8月8日、10日、岐阜市の養心会館を主会場として開催された日本教師会の教研大会雑務を、稲川先生から頼まれて手伝う。その直後、岐阜県公立高校の教員採用試験を受け、まもなく合格通知を頂く。

※日本教師会：戦後の占領下に結成された教職員組合は、教員も労働者として勤務評定闘争などごとくにストを打ちデモに動員を繰り返した。

それに対して、教員は公教育の専門家であり政治的に中立を守らなければならないと考える人々が、別に職能団体を発足させた。

その一つが昭和38年(一九六三)に結成された「日本教師会」である。その第一回教研大会は、稲川先生を実行委員長として岐阜で実施された。そのため「歴史同好会」出身の有志と、準備・広報・受付などを一週間余り手伝った。

※公立高校の教員採用試験：当時翌年の東京オリンピックに向けて好景気のため、文系学生も銀行や証券会社などの人気が高く、教員志望者は少なかった。そのおかげか、準備不足の私も合格できた。

・11月3日、千代田化工建設の奨学論文「私の大望―教師への道―」に入選し授賞式に出席する。

※奨学論文に入選：日本教師会の大会中に田中会長から進路について「これからは高校などの教師も大学院(修士)位は出て研究と教育を両立させることが望ましい」と懇切に言われたが、二年間の就職先延ばしは家の事情で難しいと申し上げた。

しかるに、不思議なことながら、8月20日すぎ、矢橋謝恩会のK幹事から「千代田化工建設で「私の大望」というテーマの奨学論文を募集し、入選すれば、大学院生にも奨学金を給付する、という新聞広告を見たから応募してみないか」との電話を頂いた。ただ、八月末の締切まで数日しかないため、急いで「教師への道」という副題の拙稿を書き送ったところ、幸い入選作に選ばれた。

千代田化工建設の研修センターで行われた奨学金の贈呈式(二年間、毎月給付)では、審査委員(評論家小汀利得氏・慶應塾長高村象平氏など)から過分な賛辞と激励を賜った。これによつて進学の決心がついたのである。

昭和39年（一九六四） 23歳

- ・ 1月16日、卒業論文提出。一ヶ月後の口頭試問のあと、主査の彌永先生から大学院進学を勧められる。3月の修士課程入学試験に合格する。

※卒業論文の口頭試問：主査彌永助教、副査中村教授、記録藤村助手。全体的に意外なほど好評を頂いたが、彌永先生から漢文の訳し方について、中村先生から敬称の使い方などについて、懇切な注意を受けた。同期10名（男性8名、女性2名）。最高点は近世史の田島暁氏（のち「中日新聞」論説委員長）といわれている。

※修士課程の入学試験：午前語学（英語）、午後専門の筆記と口述。英語（英文和訳）は不得意ながら、辞書の持ち込み自由で何とか訳せた。しかし専門の筆記は、それまで全く知らなかった平城宮跡から出土の木簡に関する難問で、それに続く口述も十分に答えられなかった。従って、おそらく不合格と思ひ込み、発表当日

は自宅で卒論を読み直していたが、正午すぎ藤村助手より「合格おめでとう」とお電話を頂いた。

- ・ 4月から伊勢に学生と下宿して皇學館高校の非常勤講師（週二日）、名大の大学院に通学（週三日）、休日には揖斐の自宅で雑用（家と村の仕事など）に励む。

※伊勢で学生と下宿：かねて私淑する田中卓先生から、皇學館大学の有志学生を特別育成する私塾を創るので、世話役として伊勢へ来るよう言われた。

思案の末に大学院修士課程を二年間で修了しよう名古屋へ通うスケジュールを組み、伊勢市桜木町の古民家に下宿した。当初の同宿学生は、皇大三年国史のG君とN君。毎週の『講孟節記』輪読会には塾外から十名前後が参加した。

※皇學館高校の非常勤講師：前年四月に開設された皇學館高校の初代校長西山徳先生から、社会科の非常勤講師を頼まれ、ありがたく引き受けたが、あとで担当は地理だと知らされて困った。

11月初めから三ヶ月間、田中先生などが米国と欧州の教育事情視察に出かけられ、留守を預る。

※伊勢青々塾の開塾式：田中先生が私費で新築された木造平屋（畳敷の大講義室・和室3・洋風食堂など）へ移った。当日、塾内外生など数十名が参列し、田中卓塾頭（41歳）が「青々塾記」を朗読された後、平泉澄先生（70歳）から根本通明博士の『読易私記（抄）』の御講義を承った。

この機会に三年国文のU君が入塾したので、四名により交替で朝と夕は自炊した。翌春から入塾したS君・Y君は料理がうまくて助かった。

※田中会長などの米欧視察：日本教師会の米欧教育視察団（団長田中会長、団員の稲川理事など数名）が出張中の三ヶ月間、前隣の荒川久壽男教授（46歳）が塾頭の代りを懇切に務めて下さり、私は塾頭代として発足まもない塾生活・輪読会などを塾内生・通塾生と一緒に続けた。

私は高校で地理を学び、大学の教養と院で地理の単位も取ったが、それを教えるほどの知識も自信もない。そこで、ほとんど日本歴史の話をしてきた（二年間）が、生徒には案外好評であった。

- ・ 10月10日、「一九六四東京オリンピック」開会式を自宅のテレビで母と共に視る。

※東京オリンピック開会式：この10日（土曜日）は正に日本晴れで、天皇陛下（63歳）が名誉総裁として開会宣言された。自衛隊のブルーインパルスが五色の五輪を描き、94か国七千余人の選手団が国旗を先頭に入場した光景に感動した。その中継を自宅で視た白黒テレビは、家庭教師先のO家から直前に頂いたもの（カラーテレビは一年半後に助手の初月給で購入した）。

- ・ 10月18日、「伊勢青々塾」の開塾式で平泉澄先生の特別講義を拝聴する。

昭和40年（一九六五） 24歳

- ・5月3日、服部博士が「中日文化賞」を受賞される。

※服部博士が「中日文化賞」：服部敏良氏著『鎌倉時代医学史の研究』が、昨年吉川弘文館から出版された。それらが評価されて第18回の「中日文化賞」を受賞されることになったのである。

しかも、服部院長は、数年後（昭和46年）に『室町安土時代医学史の研究』を出版され、前著と併せて駒澤大学から文学博士の学位を授与された（主査木代修一博士）。その雑用も手伝った。尚、平成四年（一九九二）六月十六日他界された博士（86歳）の葬儀委員長は、御令息外志之院長の指名により、私が過分な大役を務めた。

- ・5月30日、田中教授がNHK教育テレビで「神道のこころ」について座談会（一時間）に出演される。

※田中教授がNHK教育テレビ出演：教養部時代の

指導教官佐々木隆美教授（文化史）と國學院大学の戸田義雄教授（宗教学）と皇學館大学の田中教授（古代史）が、「神道のこころ」というテーマで「三種の神器」を中心に鼎談された。

大変充実した内容で、何より「神道」と「神器」がNHKの教育番組で取り上げられたこと自体、戦後二十年の世情好転を示すものといえよう。

- ・6月7日、先日投稿したNHKラジオ「私達の発言」謝礼（初めての原稿料千円）を受領。

※投書「私の発言」：そのころ「紀元節」復活をめぐる議論が盛んになり、私も新聞投書に力を入れ、NHK（ラジオ）にまで出していたのである。

- ・11月11日、皇學館大学の教授会で新設の助手として採用内定の電話を田中先生より頂く。

※助手採用内定：夏休み直前に再び岐阜県の高校教員採用試験を受ける意向を田中先生に申し上げたところ、皇學館大学で創立五年目に助手・副手を置くことになっているから、よい修士論文を仕上げ

る見込みがあれば、国史学科の助手に推薦する」と言われて驚いた。

そこで、9月末迄に修論の下書きを仕上げると、それを審査対象として採用が内定したのである。ただ、内定は未定にて修論が合格するまで口外すべきでないと考え黙っていたところ、田中教授が年末に名大の先生に割愛の挨拶へ出向かれ、同道して中村先生と彌永先生のお宅を訪ねた。

すると、意外なことに、彌永先生が「宮内庁の書院部編修課で、中央大学へ転出した飯田瑞穂さんの後任を探しており、所君が適任だと思ひ、修論を見てから推薦するつもりだった。けれども、田中さんが面倒みてくれるのなら安心して委せた」と話され、両先生の恩情に恐懼した。

- ・12月初めから翌年3月まで、田中卓博士著「高校用日本史教科書」の原稿筆録と図版選定などを手伝う。

※高校用日本史教科書：田中先生は高校生に必要な日本史の教養を培う教科書原稿を文部省に検定申請するため、米欧視察から帰国後に準備して膨大な参照資料とメモを作られた。しかし執筆の時間が厳しくなると、口述の原稿を録音テープに吹き込まれ、それを私と塾生二名で次々と筆録した。それに本文の理解を助ける図版を私が選んで盛り込み、何とか三月までに仕上げた。

しかるに、同四十一年度の教科書検定により、その冒頭で「神話の世界」を導入としたことなどが「学習指導要領」の基準に合わないもので、必ず修正するように、という意見を付けられた。

しかし、先生は初志を貫くため修正に応じず、それを一般図書『最新日本史』として同四十二年に育誠社（平成八年から『教養日本史』と改題し

て青々企画)より刊行された。

昭和41年(一九六六) 25歳

・正月10日、修士論文「令制国司の変質過程」提出。

3月1日、修論の口頭試問(主査彌永助教授、副査中村教授、記録藤村助手)。

3月25日、大学院修了式に母も参列する。

※修士論文と口頭試問：卒業論文で扱った三善清行が備中介を体験し「意見十二箇条」の過半で指摘した平安時代の国司制度について実態を具体的に検証するため、大宝元年(七〇二)から元暦二年(一一八五)までの「国司補任表」を作成し、とりわけ「官長」(受領)の実績解明に努めた。

決して満足できる出来ではないが、口頭試問の際、自身で「公卿補任表」を作られた彌永先生は、国司から公卿になった者も多いから大変いいものを作ってくれた、と過分に褒めて下さった。

※大学院修了式：豊田講堂での修了式に母を伴って

Ⅱ期 研 鑽 期

昭和41年(一九六六) 25歳

・4月より皇學館大学の助手として勤務する。

※助手の勤務：当時の皇學館大学は文学部のみで、

私は国史学科付の助手、粕谷興紀氏(皇大一期卒)は国文学科付の副手、村石凱彦氏(日大独文卒)は一般教育の助手として採用された。三人同室でお互いに協力しながら、先生方の手伝いや学生たちの相談事などに多忙を極めた。

・4月12日・13日、神宮の式年遷宮に向けて「御木曳初式」を拝見する。

※式年遷宮用の御木曳初式：昭和48年(一九七三)

10月の第六十回式年遷宮に向けて、同40年5月の「山口祭」から諸祭儀が行われ、それらを神道学の

出てから、文学部で指導を受けた三先生の研究室へ御礼の挨拶に行ったところ、ふだん厳しい中村先生が「お母さん長い間よく頑張つてこられましたね。」と心からねぎらつて下さった。

尚、母(50歳)は、四月から私が伊勢に居を移して野中で一人ずまいになれば、農作業以外に何をするか考えて、たまたま昨年末に町内のUさんから勧められた「日本生命」の外務員試験を受け、この春から正式社員として活動を始めた。

とはいえ、口下手な母に若いセールスレディのような真似はできず、近所や親戚などを訪れて世間話することも楽しみで続けるうちに、加入者がふえて、人並の成績をあげられるようになった。

ただ、母は芯の強い人で、私を幼いころから叱り励ます時、「お父さんのように死ぬ気でやれば出来ることはない」と言い、また日本生命に入社の時、「為せば成る為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」という上杉鷹山の遺訓を色紙に書き、台所の壁に貼っていた。

谷省吾教授に勧められ、全て見学した。

この4月の「御木曳初式」は、木曾から伐り出された御用材を神領民が神域内へ曳き入れる行事で、有志学生の奉仕団を近くで応援した。

・6月5日、神道史学会の学術大会で初めて研究発表。

※神道史学会で研究発表：神道史学会は講和独立により神道研究も自由になった昭和二十七年(一九五二)の十月に設立され、会誌『神道史研究』を発行し、毎年六月に学術大会を開催してきた。

その実質的な代表であった久保田収教授(当時文学部長)から、口頭発表するよう強く言われた。神道史は専門外ながら、修論の作成中より、伊勢国守で齋宮寮頭を兼任する者が少くないことから、齋宮寮に興味を覚えて、「齋宮寮の機能と構成」と題する発表にした。それは未熟すぎて論文にできなかつたが、齋宮への関心は持ち続けてきた。

尚、翌四十二年度から神道史学会「編集委員」

に加えられ、五十二年後の令和元年（二〇一九）から「顧問」を務めている。

- ・ 7月20日、「国民の祝日」法を改正して「建国記念の日」が制定され、12月8日「政令」によりその日が二月十一日と決定される。それに絶大な貢献をされた田中教授の資料準備などを手伝う。

※「建国記念の日」の制定：講和独立前後から高まった「紀元節復活運動」は、反対勢力に阻まれて難しかったため、代りに新しく「建国記念の日」として「国民の祝日」に加える方法がとられ、国会内外で激論の末、この夏ようやく制定された。

しかし、「建国をしのび、国を愛する心を養う」という趣旨の「祝日」を設ける合意に留まった。

※二月十一日に決定：そこで、具体的な日付は、審議会を設けて半年議論した答申により政令で決定された。その審議会に招かれ、歴史学の立場から「日本では『建国の日』が古すぎて記録を欠くけれ

ども、建国を記念する日であれば、明治以来の『紀元節』に基づく二月十一日が最もふさわしい」と明確に公述されたのが田中卓教授である。

それに先立ち、皇學館大学の教授会で決議された二月十一日賛成の建白書を、久保田文学部長が上京し政府に渡された。その案も起草された田中教授のもとで、雑用を手伝った。

- ・ 12月の初め、『論争ジャーナル』創刊（昭和42年1月付）の同誌に鼎談「平和を支える柱」が掲載される。

※『論争ジャーナル』創刊：田中教授から国史学の講義を受けていた在京有志学生（明治学院大学の

中辻和彦氏、早稲田大学のM氏など）が当時の保守的な言論人たちに協力をえて出した始めた月刊誌（育誠社刊）。巻頭言「蜂針録」は毎号田中先生が

匿名で執筆され、発行者とのやりとりを手伝った。※鼎談「平和を支える柱」：平和な国家を目指すにはそれを主体的に護る国民の覚悟と協力が必要な

ことを語り合った。その一人は福田恆存氏に師事

する国語問題協議会主事の土屋道雄氏（31歳）、もう一人は文芸評論家の西尾幹二氏（31歳）である。

本誌が三年足らずで廃刊後、伊勢青々塾で苦楽を共にした後藤節正氏（高校教諭）が編集長となり『高校生ジャーナル』を出すことにも協力した。

昭和42年（一九六七） 26歳

- ・ 正月15日、三重県芸濃町の「成人式」で講演する。

※成人式で講演：田中教授を介して依頼された芸濃町（現在津市内）主催の成人式で、初めての講演「成人の要件」を行った。その参照資料として、吉田松陰の「士規七則」と橋本景岳の「啓発録」の要点をガリ版印刷し、勢いこんで話すうちに時間切れとなり冷汗をかいた。

- ・ 3月、卒論を補訂した論文が『藝林』に、また「寛平の治」に関する論文が『紀要』に掲載される。

※『藝林』と『紀要』の論文：卒業論文「三善清行とその時代」を大中に書き直し、『藝林』と『皇學館大学紀要』に載せて頂いた。その抜刷を参考論者の先学数十名に送ったところ、坂本太郎先生が「三善清行の伝記は未だないから、人物叢書の一冊として出せるような努力を期待する」旨のお葉書を下さった。

- ・ 4月から伊勢の内宮に近い岡田家に下宿。春休みに『赤福二六〇年史』の執筆を頼まれる。

※岡田家に下宿：伊勢青々塾を出て、内宮近く（現在おかげ横丁）の岡田家（神札の間屋）土蔵二階に下宿し、大学にはバイク（50cc）で通った。

※『赤福二六〇年史』の執筆：赤福の本店から当時伊勢市長慶谷隆夫氏の仲介で大学に相談があり、久保田文学部長を介して打診され引き受けた。しかし赤福が「宝永四年（一七〇七）創業」と

称するのは、翌五年刊の浮世草子『美景蒔絵松』に「赤福とやらいふ餅屋」と伝える程度であり、江戸中後期の史料にほとんどみえない。

そこで、むしろ近世伊勢参宮史の中で誕生し発展したであろう背景を調べて描き始めるほかないと考へ、明治以降の膨大な資料は番頭格のKさんと共に調べ、何とか一年余で草稿を書きあげた。

しかし、私の草稿は読物として全然面白くないため、それを中央公論事業出版のライターに頼み、当時お元気だった浜田ますさんが家の歩みを語るという形に書き直してもらい『赤福のこと』の題で出版した。それが意外なほど好評で、同50年に「赤福のれん」と題するフジテレビの連続ドラマとなった。

- ・ 8月11日～21日、沖縄戦蹟を親友と巡拝慰霊する。

※沖縄戦蹟の巡拝慰霊：父の戦死した南方に少しでも近い沖縄の戦蹟を巡拝したいと思い立ち、親友

遺憾に思い、同37年4月に私立皇學館大学として再興の際、後援会会長と初代総長を引き受けていた。大学でも追悼の式典が行われた。

昭和43年（一九六八） 27歳

- ・ 4月中旬、『皇學館論叢』の創刊、および翌年3月出版の『皇学論集』の編集を手伝う。

※『皇學館論叢』の創刊：当時の学界・論壇では、「皇學」を名乗る大学への反発が著しく、その関係者が研究書・研究論文を出せる所は少なかった。そこで前年（同42年4月）「皇學館大学出版部」が設立され、まもなく「皇學館大学人文学会」名で隔月刊誌の『皇學館論叢』が今春創刊された。その雑務を他の助手・副手と一緒に手伝い、拙稿「意見封進制度の成立」を載せて頂いた。

※『皇學論集』の編刊：皇學館大学再興以来の学長高原美忠先生（明治25年～平成元年）の喜寿記念論文集を、全教員により献呈することになった。

二人（F氏・I氏）と計画を練り、まだ米軍の施政権下にあった沖縄へ船で出かけた。

現地では、本島を駆け巡り、伊江島にも渡ったが、とりわけ15日には沖縄遺族連合会の金城和信会長（69歳）のご好意で青年部有志らと一緒に、摩文仁一帯の都道府県慰霊碑周辺を清掃奉仕した。

- ・ 9月3日、母方の祖父（82歳）長逝。

10月31日、吉田茂元首相（89歳）の国葬が行われる。

※母方の祖父：外祖父の河本桑次郎は、稲作農業の合間に、白鳥神社の祭礼で里神楽を奉納したり、村芝居を上演する一座の世話役を務めていた。小学校へ入るまでその家に預けられることの多かった私は、祖父の得意な太鼓や芝居の台詞を聴き覚え、所作の真似をすることが好きになった。

※吉田茂元首相の国葬：吉田茂氏は第一次内閣の同21年3月当時、GHQの「神道指令」による国立神宮皇學館大学の廃学を阻止できなかったことを

その三十篇近い論文の編刊を他の助手・副手と協力して担当し、編集技術を覚えた。

- ・ 9月15日、法制史学会の関西支部研究例会で「国衙官長」の概念と実態」を研究発表する。

ここに来てくれた京都女子大学の菊池京子と初めて出会う。まもなく有志と「平安史学研究会」を作り京都で月例会を行う。

※法制史学会で研究発表：前年度に入会した法制史学会の関西支部月例研究会で発表するように京都大学の中沢巷一教授から依頼され、修士論文の一部を補訂して口頭発表した（京大の楽友会館）。その際、一ヶ月余り前「所」の成立と展開」と題する論文の抜刷を送ってくれた京都女子大学史学研究室員の菊池京子という女性が来てくれた。終了後に数人の若い研究者と喫茶店へ行き、隣り合った彼女に好感をもった。

※「平安史学研究会」の月例会：その直後、京大の

院生谷口昭氏（のち名城大学名誉教授）らと相談して「平安史学研究会」を作り、月例研究会に上落した。ここで、森田悌氏（のち群馬大学名誉教授）など同世代の優秀な研究者と知り合った。

- ・10月23日、「明治百年記念式典」中継をテレビで見る。
- 11月24日、大垣市教育委員会主催の明治百年記念講演会で「明治維新と大垣藩」について話す。

※「明治百年記念式典」：年号（元号）が「明治」と改元されたのは、旧暦の慶応4年9月8日であり、新暦の一八六八年10月23日にあたる。そこで政府（佐藤内閣）は、この日を「明治百年」記念日として、日本武道館で両陛下の臨席を仰ぎ式典を催した。皇學館大学でも記念式典を行った。

※大垣市での記念講演：主賓はこの春に『よみがえる日本の心―維新の靴音―』（日本教文社）を出版された文部省主任教科書調査官の村尾次郎博士（54歳）である。その前座として、幕末に大垣藩士

の井田謙（天保4年〜明治22年）が「大政奉還論」を提唱した史実と意義を話した。

- ・12月15日、神道学会・神道史学会・神道宗教学会の三学会合同「明治維新百年記念大会」を手伝う。

※三学会合同の記念大会：神道学会は主に出雲大社の支援をえて雑誌『神道学』（昭和29年〜）を出し、また神道史学会は主に八坂神社の支援をえて雑誌『神道史研究』（同28年〜）を出し、さらに神道宗教学会は國學院大学関係者を中心にして早くから雑誌『神道宗教』（同22年〜）を出してきた。その三学会が協力して「明治維新百年記念」に皇學館大学で合同学術大会を初めて開くことになり、会場校の事務局で雑用に奔走した。

昭和44年（一九六九） 28歳

- ・4月から国史学科の専任講師に昇任し、近鉄の駅に近い岡本町へ転居する。

※国史学科の専任講師：文学部の国史学科は、当時

各学年百余名（国文学科も同様）。専任の教員として、西山徳・田中卓（共に古代史）、久保田収（中世史）、三木正太郎（近世史）、荒川久壽男（近代史）、谷省吾・鎌田純一（共に神道史）の六教授（東洋史と西洋史は非常勤講師）がおられた。そこに私を専任講師として加えられたのである。

その研究室は久保田文学部長と相部屋であった。多忙な公務の合間を縫って研究も授業も几帳面に励行される先生の背中から多くのことを学んだ。

私の担当した科目は「国史概説」「社会経済史」と「史料講読」「史料演習」および卒業論文指導。他に新聞部・音楽部の顧問と日本文化研究会のアドバイザーも務めた。

ちなみに、『未刊論考デジタル集成』の分担校正協力者のうち、川北靖之・清水潔・堀井純二の三氏は、この初年度の受講生である。

※岡本町に転居：助手時代と同様、公務がなければ

毎週土・日は揖斐川町の自宅で家と村の仕事をする必要から、近鉄宇治山田駅に近い新居へ移った。ただ、安月給のため、「蓬萊荘」という風流な木造長屋の一室（四畳半と炊事場のみ。トイレは共用、風呂は近所の銭湯）で三年間我慢した。

- ・4月4日、菊池京子との結婚式と披露宴を行う。

※菊池京子との結婚式と披露宴：半年前の研究発表会で知り合った彼女と意気投合して結婚を決めた。京子は京都女子大学の大学院で村井康彦教授の指導を受け、修士論文「平安貴族の研究」（分割して『史林』『史窓』などに掲載）により研究者としての道を歩み始めていた。

ただ、京子は二人姉妹の姉であり（妹は先に結婚してアメリカへ移住）、私より五歳年上のため、親戚などが心配していた。けれども、私の母が早くから気に入り後押しをしてくれたので、新年度の初授業前に挙式・披露した方がよいと考えた。

その日取りを4月4日としたのは、式場の大垣護国神社も会場の大垣駅前レストランも空いていたからであるが、それには双方の親から「縁起が良くない」と渋い顔をされた。

しかし、仲人を頼んだ田中教授は全く気にされず、また披露宴で久保田文学部長も「昭和四十四年四月四日はすべてヨシヨシの佳き日ですね」と真面目な顔で挨拶されて安堵した。

尚、新婚旅行の代りに、4日夕方上京、5日前、靖国神社に正式参拝して「所久雄命」に奉告した。ついで正午すぎ平泉澄先生の研究室を訪ね、また夕方から在京の友人数名と会食。さらに6日、福島県棚倉町の菊池家菩提寺（日蓮宗）にある墓詣りをしてから帰省した。

・7月21日、小川三雄氏著『天皇の踏絵』出版祝賀会で祝辞を述べる。27日、亡父の二十七回忌を営む。

※小川三雄氏著『天皇の踏絵』：小川氏は揖斐川町

のことで、相当に厳しい注文を付けたところ、予期以上の論文を書き上げてくれた。

たとえば、井後政晏氏（のち皇學館大学名誉教授）は、私が修論で関心をもった伊勢国司と齋宮寮の関係について精査し、大学院に進んで『大神宮雑事記』の研究に成果をあげた。

また浪方賢一氏（のち商社員としてマレーシア連邦サラワク州赴任）は、空手の選手で在学中から東南アジア各地を飛び回り、卒論ゼミの登録も遅れたが、その提出直前まで一緒に頑張った。

※『三善清行』の草稿仕上げ：坂本太郎博士から推薦を賜り、日本歴史学会編「人物叢書」の一冊として『三善清行』を書き上げた。

それを校閲された吉川弘文館の黒板伸夫編集長（のち清泉女子大学教授）から写真・図版が必要といわれ、この夏休み中に卒論指導生で大学院へ進んだ山本昌治氏（社会人入学のため私より年長。のち大阪青山短期大学名誉教授）の自家用車により清行ゆかりの地（神戸の大輪田泊跡や岡山の備

内で洋装店を営みながら、稲川先生を応援して教育正常化にも尽力された。

その小川氏が自ら体験したシベリア抑留の実態を『天皇の踏絵』（サンケイ新聞社出版局）として刊行され、栗野町長らの呼びかけで出版祝賀会が催され、私も祝辞を申上げた。

※亡父の二十七回忌：父（久遠院釈功雄）の法事は二十三回忌までは母が一人で切り盛りしてきたが、今回から六年後の三十三回忌（仏式）も、平成五年（一九九三）の五十年祭（神式）も、実の親子のように仲の良い嫁の京子が切り盛りしてくれた。

昭和45年（一九七〇） 29歳

・1月～3月、初めての卒業論文学生指導に全力傾注。その傍ら初の著書『三善清行』の原稿を仕上げる。

※初の卒業論文学生指導：昨春から専任講師として卒論指導のゼミも担当できることになり、9名が応募してきた。各自よく努力したが、私も初めて

中総社・吉備津彦神社などを廻った。

出版奥付（10月26日）より前に届いた初めての拙著を、坂本・中村・彌永・田中・稲川の各先生宅などに参上して献呈した。

・5月21日、『日本書紀』撰上千二百五十年記念講演「経国の大業」拝聴。その講演記録出版を手伝う。

※記念講演「経国の大業」：皇學館大学学事顧問の平泉澄博士が、大学生・短大生・皇高生に「経国の大業」と題して講演された。

その録音テープを直ちに書き起こし七月に講演叢書として出版する手伝いのため、博士から田中教授に贈られた大判ノートの講演要旨メモを借覧することができた。

尚、大阪住吉大社の高松忠清宮司（皇學館大学の常務理事）から田中卓教授に依頼された論文集『神功皇后』の編集実務も任せられ、平泉博士の巻頭論文などを校正しながら多くのことを学んだ。

・ 8月20日～21日、母・妻と京都の母・伯父も連れて大阪の日本万国博覧会を見物する。

※大阪の日本万国博覧会を見物：「人類の進歩と調和」をテーマに掲げて大阪の千里丘陵で開催された日本万国博覧会（EXPO'70、名誉総裁皇太子明仁親王）を家族ぐるみで見物した。

妻の母菊池春野は早く父と離婚してから会社に通勤、実兄の協力をえて京子を育て上げた。その二人も私の母も一緒に会場をゆっくり巡った。

・ 9月6日、母・妻と共に「楠公回天祭」に参拝する。

※楠公回天社の祭に参拝：大東亜戦争の末期に敗色の濃い形勢逆転のため人間魚雷「回天」を創案して、昭和19年（一九四四）9月7日、山口県の徳山湾で訓練中に殉職された黒木博司少佐（23歳）は、岐阜県下呂町（市）の出身である。その二十年祭（同39年9月）に回天の英霊一四五柱を祀る

に続き町公民館で新成人に講演。知り合いの多い地元での講演は気恥しいが、揖斐川町出身の先賢（広木忠信と棚橋天籟）について話した。

・ 3月末、伊勢市楠部町の分譲地を購入する。

※楠部町の分譲地購入：皇學館大学に勤めて五年、いざ伊勢に家を建てることを考え、とりあえず楠部町奥の分譲地を貯金と母の援助で購入した。

・ 4月に入学した国史学科十期生のクラス担任になる。

※国史学科十期生のクラス担任：当時の皇學館大学では、十数名ごとの指導教員制と学科全体の学年担任制を設けていた。そのうち前者は三年前から担当してきたが、後者は国史学科十期生の担任が初めてである。

この皇十史生（約百名）とは、毎月クラス会を開き、三年次まで春と秋の学外研修を引率したり、

「楠公回天社」が下呂の信貴山上に創建された。

その第七回例祭に母と妻を連れて参列し、平泉澄先生（76歳）の講話を拝聴すると共に、少佐の慈母黒木わか様（喜寿。翌年一月逝去）と親しく御話することもできた。

・ 11月25日、三島由紀夫氏（45歳）らの事件をテレビ中継により観てショックを受ける。

※三島由紀夫氏の事件：天才的な作家の三島由紀夫氏が「楯の会」を作り、早大出身の学生隊長森田必勝氏（25歳）を連れて自衛隊の市ヶ谷駐屯地に突入し自決を遂げた。その純粋で激烈な檄文に共鳴を覚えながらも、決起には違和感を覚えた。

昭和46年（一九七二） 30歳

・ 正月15日、揖斐川町主催の成人式で再び講演する。

※成人式で講演：栗野一雄町長の依頼により、昨年

個人的にも色々相談に乗って苦楽を共にした。そんな関係から卒業後も数年ごとに同級会を開いている（現在の世話人代表は武田直樹君）。

・ 4月18日、野中神明神社の改築奉祝祭を手伝う。

※野中神明神社の改築奉祝会：野中の拙宅前にある神明神社の社殿改築が完成し、その奉祝祭に神主接待の宿を務め、組当番として雑用に走り廻った。

昭和47年（一九七二） 31歳

・ 2月14日、NHK特集番組「横井庄一さん帰る」を視て、父のソロモン戦蹟慰霊を決意し、徐々に準備。3月～4月、ソロモン関係者を訪ね歩く。

※「横井庄一さん帰る」：昨年12月で満30歳となった私は、満30歳で戦死した父の戦蹟を訪ねたい、という決意を新年早々に強めていた。その矢先、名古屋市出身の横井庄一氏（57歳、元陸軍伍長）

が、敗戦後も27年間グアム島のジャングルに潜伏し、今年1月24日発見された。

帰還後の2月14日、NHK総合テレビで放映された特集番組を視たり、地元「中日新聞」の詳細を読んだ。その中で「自分は必ず友軍が救出に来てくれると信じながら洞穴に隠れていた」という述懐に、ショックを受けた。

そうであれば、既に戦死した英霊たちも、戦友や遺族が迎えに来るのを待っているにちがいないと受けとめ、何とか一日も早くソロモンへ行く決心を決めて、その準備を始めたのである。

※ソロモン関係者を歴訪：3月から5月まで休日を活用して、名古屋市で『ソロモン群島探査記』の著者足立英雄氏、東京で元海軍八連特司陸戦参謀(元侍従武官)の今井秋次郎氏と元南東方面艦隊司令官の草鹿任一氏、刈谷市で元二二九連隊本部曹長の大音龍尾氏、蒲郡市で元二二九連隊十二中隊長(父の上官)の荻野円戒氏などを訪ねた。

ガラス戸越しにみえるテレビで「全国ソロモン会の戦友が遺骨収集に行く」というニュースのテロップが流れた。驚いてNHK津支局に電話して、ソロモン会の連絡先を教えてもらった。

・6月前後、全国ソロモン会有志の遺骨収集団に途中まで同行を認められる。そこで、ビザの申請に岐阜県庁へ行った際、「中日新聞」の記者が私の戦地訪問について取材し記事にされる。

また、私が西濃関係遺族を調べて手紙を出したこともあって反響が広がり、父の戦友が訪ねて来られ、大垣の説田好重機君も同行することになる。

※全国ソロモン会：南洋ソロモン群島方面の戦闘から帰還した戦友有志により昭和40年10月結成された(初代事務局長浜崎積三氏、現在崎津寛光氏)。その発足当初から厚生省・日本遺族会と協力して、遺骨収集と親善交流を続けてきた。

※中日新聞の記事と関係遺族への連絡：県庁の玄関

・4月から助教教授に昇任。大世古町の借家へ転居する。

※助教教授に昇任：専任講師の三年間に研究者としても教育者としても何とか続けていける自信がついた。当時の皇學館大学では数少なかった女子学生の中にも熱心な勉強家が出てきた。

たとえば、この三月に卒業した大西(のち高山)孝子さんは、私が研究し始めた宮廷儀式書の一つ『内裏式』に関心をもち、その成立年代を探索して学年トップになった。

※大世古町に転居：狭すぎる長屋の蓬萊荘を出て、国鉄伊勢市駅・近鉄宇治山田駅に近い大世古町の旅館「戸田屋」従業員宿舎(妻入り平屋、畳敷三部屋)を借りて三年間住んだ。

ここは広くて道便利も良いために、平日の放課後、ゼミ生や新聞部などの学生たちがよく訪ねて来るようになり、妻の手料理で夕食を共にした。

この借家へ入った当初は電話がなく、五月早々道向いの煙草屋さんで赤電話をかけていたところ、

で偶然に出会った初対面の小川達郎岐阜支局記者にソロモンへ行く話をしたら、それが詳しく記事にされた。すると、父の最期を知る戦友の長縄高三郎氏が各務原から訪ねて来られた。

また、県庁の厚生援護課および大垣の濃飛護国神社に参上して、英霊の遺族名簿を見せてもらい、ソロモン方面の関係遺族(三百数十名)に私信を出したところ、英霊への手紙と供物などを百名以上から托された。

それのみならず、出発十日前にガダルカナル海戦で父上が戦死されている説田好重機君(29歳)が大垣から来宅して同行を求められた。そのおかげで一緒に出かけることができ、真に心強かった。

・7月21日、説田君と上京し、九段会館でソロモン会の遺骨収集団と合流。翌朝、羽田空港からニューギニアのポートモスピーを経てガダルカナル島のホニアラに着く。そこから二十六日二人でニュージョージア島のムンダへ向かい、そこで近くの島に住む佐

藤行雄氏と現地人の全面協力をえて、26日、午後ムンダの清水台で父の飯盒などを発見。翌27日朝、同地で遺骨の一部も手にして慰霊祭を行う。

※佐藤行雄氏と現地人の全面協力：事前に今井秋次郎氏から紹介されて連絡をとった佐藤行雄氏（34歳）は、現地近くのギゾ島に住むソロモン貿易商社に勤め、数年前から遺骨収集団のボランティアもしておられた。現地人の信頼がきわめて篤く、私共の滞在中も献身的に協力された。

ムンダ到着の26日午後、ジャングルの中で父の遺品と確認できる「所」と刻んだ飯盒などを発見し、翌朝そこで慰霊祭もすることができた。

・8月15日、全国戦没者追悼式に初めて参列する。

※全国戦没者追悼式に参列：ソロモンから父の遺品と遺骨を持ち帰ったことを、岐阜の県庁と遺族会に報告した。すると、8月15日に国立日本武道館

で行われる政府主催の全国戦没者追悼式への案内状を厚生省から頂いた。そこで、説田君と共に参列し、昭和天皇（71歳）の真心こもる「おこぼれ」を初めて肉声で拝聴した。

尚、同夜帰宅したところ、平泉澄先生（77歳）から懇篤な御芳書と共に「忠魂は朽ちずありけり花散りて 年月あまた流れたれども」「父と子のゑにし不思議三千里 八重の潮路を越へて相寄る」という御歌色紙が贈られていた。

昭和48年（一九七三） 32歳

・3月初め、『愛知県教育史』通史編第二巻が刊行される。この前後数年、編纂委員として県内各地を調査した成果を盛り込み執筆する。

※『愛知県教育史』：一昨年春から名古屋大学教育学部の結城陸郎教授に依頼されて愛知県教育委員会の『愛知県教育史』編纂委員を務めた。

※編纂委員として調査執筆：名古屋大学で一年後輩

の高木靖之助手（のち名誉教授）など数名と共に県内の関係史蹟や古文庫などを調べ廻り、まず第二巻に「近世尾三の文庫と出版」を書き、ついで第一巻に「古代・中世の尾三教育」を書いた。

この機会に尾張（名古屋・稲沢・一宮・犬山など）だけでなく、三河の羽田野文庫（豊橋）や岩瀬文庫（西尾）、穂久邇文庫（蒲郡）などで貴重な古写本・古文書を拝見することができた。

・5月吉日、長女が誕生。「久代」と命名する。
6月15日、『伊勢の神宮』の執筆依頼を受ける。

※長女「久代」誕生：待望の第一子が伊勢外宮近くの小原病院で無事誕生した。五歳上の妻（37歳）には結婚して四年目の高齢初産であり、何かと大変だったと思われる。本人も両方の母も大喜び。名前は私の父「久雄」の一字と国歌「君が代」の一字を組み合わせて「久代」に決めた。

※『伊勢の神宮』執筆依頼：新人物往来社の編集長

が、京都女子大学の高取正男教授（妻の恩師の一人）から紹介され、大学に来訪された。いきなり「伊勢神宮と式年遷宮について若い人々にも判り易い本を十月までに書いてほしい」という依頼に面喰ったが、敢て引き受けた。それから準備に明け暮れ、夏休み中に原稿を仕上げた。

その間8月29日、外宮の正殿周辺に敷きつめられる「お白石」を持つて納める「奉献行列」に、大世古町の「神領民」として、生後三ヶ月の娘と妻と母と共に参加させて頂いた。

拙著『伊勢の神宮』は、12月12日付で発行され、初版一万部のうち一千部を各方面へ進呈した。

・10月2日夜、第六十回式年遷宮のうち、内宮遷宮の儀をテレビで拝見。ついで5日夜、外宮遷宮の儀を同僚らと奉拝させて頂く。

※第六十回式年遷宮：伊勢の神宮（内宮Ⅱ皇大神宮と外宮Ⅱ豊受大神宮）における「式年」（一定の決

まった年)の「遷宮」(殿舎を建て直し神宝も御装束も作り直して祭神を新宮へ遷す祭儀)である。

持統天皇朝(七世紀末)から原則21年ごとに行われ、戦国時代に一三〇年ほど中断した後(一六世紀後半)再興されてからは原則20年ごとになり、その第60回遷宮が無事に斎行されたのである。

この遷宮は内宮・外宮の両正宮と十四の別宮をはじめ、摂社・末社まで含めると百所以上にのぼり、その造替を完了するのに十年近くを要する。

※外宮の遷御を奉拝：伊勢の神宮では多くの祭儀が外宮を先にして内宮を後に行われる(天皇・皇族方の親謁もこの順が原則)。しかしながら遷御の儀は、当初から内宮が先、外宮が後に行われてきた。その外宮遷御の儀を、皇學館大学の教員として長時間蓆席に座りながら奉拝することができた。

・12月23日～26日、「皇居勤勞奉仕」に初めて皇學館大学の有志学生と奉仕。東宮御所で拙著を伝献する。

下さったことを、後日お知らせ頂いた。

昭和49年(一九七四) 33歳

・3月9日、小野田寛郎少尉(52歳)がフィリピンのルバング島で発見され、12日帰国の報に感無量。

※小野田寛郎少尉帰国：母(58歳)の日記を引くと、

3月10日「テレビ」小野田さん救出さる”のニュースで持ち切り。『蔭膳の果てとなりけり梅の朝』という句を詠まれ、三十年間、日に三度の蔭膳をされていた母の愛、涙なしに聞けなかった。」3月12日「終始一貫して任務遂行以外何もないと言いつける小野田さん。我が夫も一途に戦い死んで行つたに違いない。……両老父母の態度、まさにこの親にしてこの子あり。」と記す。

・12月11日朝、NHK教育テレビ「伊勢の水銀」放映される(録画)。

28日朝、東海ラジオでソロモン戦蹟慰霊につき話す。

※「皇居勤勞奉仕」に初奉仕：春休みに帰省した際、揖斐の小川三雄氏から皇居勤勞奉仕の話を聴いた。そこで、皇學館大学の国史学科クラス担任学生などに希望者を募り、清水潔助手に副団長を頼み、宮内庁総務課に申請して許可をえた。

その冬休みの12月下旬、約三十名(途中で辞退した数名の代りに東京の学生と入れ替え)の団長として上京。23日(日)より本郷会館に泊り、24日(月)朝から27日(木)昼まで奉仕した。

※東宮御所で拙著伝献：その二日目に吹上御所の前で天皇(61歳)・皇后(59歳)両陛下から御会釈を賜った。ついで三日目に東宮御所の広間において皇太子(39歳)・美智子妃(38歳)両殿下から各団長に対して御言葉を賜った。しかも、冬休み中のおかげで、浩宮(12歳)・礼宮(7歳)・紀宮(3歳)三殿下も一緒にお出ましく下さった。

その際、東宮侍従(皇孫御教育担当)の目賀田八郎氏に勧められ、新刊の拙著『伊勢の神宮』を二冊進呈したところ、一冊を浩宮さまに献上して

※「伊勢の水銀」放映：東北大学名誉教授(当時は

法政大学教授)豊田武博士(64歳)から依頼され、伊勢の丹生(水銀)を使った「伊勢おしろい」が江戸時代の参宮土産として珍重されたことなどにつき、対談させて頂いた。

その現地取材中、博士が戦時中から終戦直後まで文部省の図書監修官として苦勞されたこと、また「所」という苗字は役所(蔵人所など)に仕えていた所衆に関係があることなどを承った。

※ソロモン戦蹟慰霊の話：従兄(父の姉の長男)の竹中徳三氏の勤める十六銀行の役員Y氏が、岐阜の原隊からムンダ戦まで父と苦勞を共にされた縁で、その紹介により東海ラジオで話した録音が朝早く放送された。

昭和50年(一九七五) 34歳

・3月14日、皇學館大学十期生の卒業式と送別会。

- ・ 4月より文部省に教科書調査官として赴任する。
6日、朝霞市の公務員合同宿舎に引越す。

※十期生の卒業式と送別会：皇學館大学在職9年間で最も親しく付き合ってきた十期生たちが、何とか全員卒業の日を迎えて感無量。国文学科十期生（クラス担任西宮一民教授）と合同の送別会において「四月から私も大学より転出するゆえ、同期生として長く付き合っていきたい」と挨拶した。そのあと男子学生らと二次会に出て、飲めない酒を次々受けて、酔い潰れるほど嬉しかった。

※文部省教科書調査官に赴任：文部省に教科書調査官制度のできた当初から社会科担当の主任調査官として尽力された村尾次郎博士が、本年三月末で定年（60歳）退官されるので、後任の主任調査官の時野谷滋博士に若い調査官探しを托された。

しかし、その当時『新日本史』（三省堂）の著者家永三郎博士が提訴していた教科書裁判も抱える

火中の栗を拾うような危い仕事を引き受ける蛮勇の持主は、容易に見当たらなかつたようである。そこで、昨年末近いころ時野谷主任調査官から東大で二年先輩の田中教授が私の説得を頼まれ、結局「暫く東京で武者修行してくるもよいだろう」との託宣を下された。

それには困ったが、思案の末に皇學館大学からの転出を決意した。60歳近い母のことを考えると苦渋の選択ながら、幸い妻が「なるべく東京と岐阜を往き来するから」と後押ししてくれた。

・ 10月、12月、教科書の検定調査審議会（社会科部会）と執筆編集者への意見伝達の終了まで多忙を極める。

※朝霞市の公務員合同宿舎：新宿舎は東武東上線の朝霞駅から徒歩15分程の所に三階建アパートが二棟あり、一階の拙宅は3DKで親子三人住むには十分であった。しかも合同宿舎だから、地方出身で各省庁に勤める若い家族が多く、幼い子のいる近所の方々との付き合いは親密であった。

※就任時の社会科調査官は、時野谷滋主任のもとに、日本史の担当として片桐一男氏（のち青山学院大学名誉教授）と私、世界史と地理・公民の担当が各二名、合計九名いた。

また初等中等教育局長の諸沢正道氏（のち文部事務次官）も、教科書検定課の課長菱村幸彦氏（のち国立教育研究所長）も信念と気骨があつた。

当時の検定制度は、三月までに各教科書会社から「白表紙本」（社名を伏せた原稿本）が提出されると、四月より九月までに各教科の調査官が各々に全冊を精細に調査し、それを各科の会議で丹念に協議を重ねて、A意見（必ず直すべきもの）とB意見（直した方がよいもの）に分ける。

それを各界代表の有識者十数名により構成される「教科書検定審議会」委員の部会（当時の社会科部会長は森克己愛知学院大学教授）において、担当調査官から一々論拠の資料を添えて説明すると、その場で検定意見がA・Bとして判定される。

それを担当調査官から当該本の執筆者と編集者に伝達すると、各社でA・B意見の可否を再検討して報告し、適切に修正されるまでやりとりを繰り返して、最終的に審議会で可否を決定し、文部大臣名で通知告示する、という極めて慎重な運用をしていた（その後再三改訂されている）。

調査官の実務は予想以上に多忙であつた。ただ、毎週一日「宅調」（自宅調査）と称して自由な研究活動を認められていた（大学のような長期の休暇はない）。そこで、宅調日に都内の古文庫や図書館で自分の研究史料を調査することなどもできた。

・ 11月26日、母（59歳）が日本生命の外勤中に転倒し骨折する。折悪しく国鉄のスト中で帰省に苦勞する。

※母が骨折し入院：母は昭和四十一年（一九六六）春から日本生命揖斐川支部の外務員として自転車で走り廻っていたが、25日夕暮に転倒して骨折し、我慢して翌朝になり揖斐病院へ救急入院したとの

電話が近所の方からあった。

ところが、折悪しく当日から一週間、国鉄労組が「スト権スト」に突入し、新幹線も在来線も全く動かない。そこで、郷里の長距離個人運転手Y氏に頼み、北関東へ来るトラックの帰り便に妻子と共に乗せてもらい、途中で荷物の積み降しを手伝いながら、28日昼ようやく病院へ着いた。気丈な母も相当に心細かったようである。

私はスト明け早々に東京へ戻ったが、妻と娘は母が完治する翌年三月末まで世話をしてくれた。

昭和51年（一九七六） 35歳

・1月5日、『神社新報』に拙稿「天皇は君主か否か」が掲載される。それが「赤旗」等で取り上げられ、徹底的な批判の嵐に晒される。

※拙稿「天皇は君主か否か」：前年10月初め、昭和天皇（74歳）と香淳皇后（72歳）が日米親善の長旅から帰国された際、NHKテレビのキャスター

が「これでアメリカの国民は、天皇が……象徴であつて、元首でも君主でもないことを理解した」と述べたことに、著しい違和感を覚えた。

また、同年11月に東大史学会主催の「古代の君主権」シンポジウムを聴いて、古代の大王も現代の天皇も世襲の君主と言っていると確信した。

そこで、神社新報社から依頼された新年号随想に「天皇は君主か否か」と題する小文を書いた。すると、4月早々から日本共産党の『赤旗』で「教科書検定調査官が違憲論文」などと酷評を繰り返され、5月11日には参議院文教委員会で共産党議員の質問に出席を求められた。しかしながら、諸沢初中局長は「すべて自分が矢面に立つから、君は後で控えておれ」と庇って下さった。

・4月17日（土）午後、時野谷滋主任調査官とともに「律令研究会」の月例会に参加する（以後五年間）。

※「律令研究会」に参加：國學院大学法学部教授の

題の原点——（雄山閣出版）の見本が届く。

※拙著『日本の年号』：教科書調査官で書道担当の北川博邦氏（38歳、のち國學院大学教授）から勧められて雄山閣カルチャーブックスとして本書を仕上げた。二年前の皇學館大学の退職記念講演記録『日本の年号』をベースにして、中国・朝鮮と日本の年号史を調べ直したが、各時代の政治文化との関連を盛り込むため、教科書調査官として身につけた通史の知見が頗る役立つた。

また、執筆中に律令研究会の帰途、坂本太郎先生に本書への序文をお願いしたところ、快諾された。それを頂きに御宅へ参上した際、昭和二十五年（一九五〇）「元号廃止・西暦採用」論者の多い参議院文教委員会で「独立国家の文化的シンボルとして、元号制度の存続が必要」と主張するには「勇気がいったね」と笑顔で話された。

これが縁となつて、十年後に先生の平易な史論『日本歴史の特性』（同六十一年、講談社学術文庫）

瀧川政次郎博士が昭和44年から開始された当研究会への参加を勧められ、同大学の日本文化研究所を会場とする月例会に時野谷先生と参加し始めた。

ここでは、毎回まず東大名誉教授の坂本太郎博士が「養老令」本文の正確な読み方を示され、ついで瀧川博士が『令集解』をふまえて自説を説明されると、さらに参加者（十数名）との間で質疑応答・意見交換が行われた。

しかも、その成果を盛り込んだ『訳註 日本律令』が東京堂出版から刊行されることになり、参加者が分担して原稿を準備するよう言われた。

そこで私は、名大院生時代に彌永先生のもとで講読した「継嗣令」などの訳注作成と、瀧川会長

の指名により『令集解』の撰者伝記を引き受けた。この会で世話役の嵐義人研究員（32歳）と親しくなり、また多くの碩学にも出会ふことができた。

昭和52年（一九七七） 36歳

・2月11日、拙著『日本の年号——揺れ動く（元号）問

の編纂を手伝わせて頂いた。

- ・ 4月から毎週水曜日午後、国士館大学文学部へ非常勤出講する。そこへ訪ねて来た若い研究者と「國書逸文研究会」を始める。

※非常勤出講：文化庁主任文化財調査官の山本信吉氏（45歳）が、国士館大学へ出講されていたけれども、本務多忙となられたので、藤木邦彦教授（70歳）からの依頼により「日本古代史」の講義と史料演習を担当することになった（四年間）。

ここで専任教授をはじめ、多彩な非常勤講師の方々とも懇親会において出会うことができた。

※國書逸文研究会：この国士館大学の国史学科出身で駒澤大学大学院生の木本好信氏（のち龍谷大学教授）が、立正大学大学院生の小山田和夫氏（のち立正大学講師）と共に訪ねて来たので、一緒に研究会を始めることになった。

そこで、名大の国史研究室にあつて卒論にも使

った稀覯本の和田英松博士の遺著『國書逸文』を、時野谷滋主任から永久貸与され、それを複写して、毎月講読する「國書逸文研究会」を発足させた。しかも、若い両氏の提案に従って、翌五十三年から講読の成果などを発表する『國書逸文研究』（年二回発行）を創刊した。

この雑誌を、原本『國書逸文』（私家版）の校訂に尽力された森克己・竹内理三両博士に贈呈したところ、大変に喜ばれた。そのみならず、「未延財団」（英米法学者末延三次理事長）の学術奨励に推薦して下さり、三年間も援助金を賜った。

それを活用して翌五十四年に『國書逸文』の研究用複製本を作り、有志に原価で頒布したところ、月例研究会への参加者も『國書逸文研究』への寄稿者も急増した。

- ・ 10月中旬、韓国文教部の教科書編纂官らとの相互交流のため初めて韓国を訪ね、主要な史蹟を見学する。

※韓国の史蹟を見学：韓国の初等中等教科書は国定

制度であり、日本は民間作成の文部省検定による制度であるが、相互の実情を理解するため隔年での訪問する措置が数年前から行われていた。

今年度は時野谷主任と私が先方へ行くことになり、文教部で教科書編纂官と真剣な会議をした後、ソウルの学校・博物館などを訪ね、さらに主任と二人で百済と新羅の主要な史蹟を駆け廻った。

昭和53年（一九七八） 37歳

- ・ 6月、「日本学士院紀要」に、拙稿『撰集秘記』の基礎的研究」が掲載される。

※『撰集秘記』の研究：文部省の「宅調日」に宮内庁書陵部へ隔週参上していた。そこで、京都御所東山御文庫のマイクロフィルム撮影済カードを繰るうちに、未刊の『撰集秘記』古写本（卷子本と冊子本）を見出した。

これは白河院政期の藤原為房が、先行の「数家

秘記」を恒例・臨時の儀式行事ごとに分類引載したものである。その「秘記」が何かは不明とされてきたが、若干の頭注などを手懸りに先行儀式書（逸文を含む）と対比して、「装束記文」「清涼記」「藏人式」「九条年中行事」「西宮記」「北山抄」「拾遺年中行事」の七書だと立証することができた。これは、私にとって稀有な発見であるが、考証多岐にわたり長大な論文となつて、普通の学術雑誌には出し難い。そんなことを律令研究会の帰途、坂本先生に申し上げた。すると、「それならば日本学士院の会合で私が要旨を紹介すると『紀要』に載せられるから、送つて来るように」と即答され、半年後に実現して下さった。

そのおかげで掲載された論文を解説として、御文庫本の影印に校注を書き加えた複製を、同五十五年二月、国書逸文研究会から出版した（のち国書刊行会から補訂再版）。

昭和54年（一九七九） 38歳

・7月20日、「元号法」が成立するまで、二年近く総務庁内部の「元号問題検討会」に参加する。

※「元号問題検討会」：拙著『日本の年号』を出版した昭和五十二年三月当時、「元号法」の制定を要望する民間運動が一段と盛り上っていた。

そこで、**福田越夫**内閣は「元号法」案の提出に向けて当時の総務庁内に元号制度調査室を設け、関係省庁から人材を集めて不定期に「元号問題検討会」（仮称）を始めた。

そこへ私は元号史の研究者および社会科の教科書調査官として参加を求められ、東アジアの漢字文化国における元号の来歴や小中高の社会科教科書における年代の表記などについて説明した。

やがて「元号法案」を政府から国会へ出した際の「想定問答」文案作りにも参加したが、国会では大体それに沿った政府の答弁が行われた。

なお、衆参両院で審議中に参考人招致が行われ、元主任調査官の**村尾次郎**博士が賛成意見を述べら

れるに先立ち、その資料準備も手伝った。

・11月中旬、「無名の人」所都太郎の縁によって、井上光貞博士から招待され懇談する。

※「無名の人」**所都太郎**：前述の**所都太郎**は、幕末に大坂の適塾で蘭学を修め長州で**井上聞多（馨）**の命を救いながら陣中で病死した、ということくらいしか知られていない。

その存在意義を「無名の人」と題するエッセイに纏めたのは作家の**司馬遼太郎**氏である。しかも、それは昭和五十二年度に中学校の国語教科書用に書き下ろされたものであり、白表紙本の原稿を同室の国語調査官から一読するよう求められ、感想を伝えたことがある。

※**井上光貞博士の招待**：この春に東京大学教授を定年退官し国立歴史民俗博物館準備室長（二年後に初代館長）となられた**井上光貞博士**（60歳）は、**井上馨**（大正4年薨）の長女千代子の長男である。

その祖父が元治元年（一八六四）瀕死の重傷を負った際に救った**所都太郎**のことを心にかけておられたのか、霞ヶ関ビル内の霞会館へ来られた機会に「**都太郎**と同郷の**所君**に御礼の食事を差し上げたい」といわれたので、霞会館へ参上して、史学会や歴史博の逸話などを楽しく承った。

昭和55年（一九八〇） 39歳

・お正月休みに帰省中、三日に癌で他界された前隣の**駒月勇**さん（父と同級生、68歳）葬儀のお取り持ちを五日まで務め、ついで六日は一号組の江戸時代から続く「山の講」に参列する。

そして七日の朝、東京へ戻る準備中、母（64歳）が雪風吹の中を庭畑へ出て川へ落ち、大怪我をして掛斐病院へ緊急入院。そのため、妻と娘は家に残り、母の面倒を見てくれたが、同時に妻の就職も決まる。

※**母の入院**：母は貧血症で立ち眩みし、骨粗鬆症のために左手・左足の骨折が三ヶ月も治らなかつた。

その療養中に妻が母の退院後も家で一緒に暮らすことを決断し、娘は四月から地元（私の母校）の小島小学校へ入ることになった。

※**妻の就職**：その矢先、不思議なことながら、岐阜聖徳学園短期大学の**村松繁樹**学長から「急に国文学担当の専任講師が欠員になったので、京子夫人に来てもらえないか」との電話があり、研究を続けてきた妻には願ってもない話なので「史学科出身でも宜しければ」と申し上げて引き受けた。

これは三年前、大阪青山短期大学の**塩川利員**学長が文部省へ学科再編の相談に来られた際「家内が平安時代の斎王関係と歌文学を研究中」と話したことを覚えておられ、短大学長会議で村松学長に妻の話をされたことが縁となった由である。

・4月から単身で朝霞の官舎に留り、文部省で公務に励みながら、宮廷儀式書の研究に熱中する。

※**単身で研究生活**：郷里に帰った妻は岐阜の短大へ

週四日務め、月一回上京してくれた。しかし、他は独身生活のため、官舎で毎朝即席ラーメンを食べ、宅調日と祝休日には儀式書関係の史料調査に没頭した。特に尊経閣文庫では主事の飯田瑞穂氏（中央大学教授）から懇切な御示教を賜った。

丁度そのころ学長会議で上京された田中卓先生から、そろそろ伊勢へ戻ることを勧められた。しかし私は、皇學館大学には優秀な古代史研究者が育っているのです、遠慮したいと申し上げた。

- ・ 4月から警察大学校の「教養歴史」に出講する。

※警察大学校：当時中野駅近くにあった警察大学校（室城庸之校長）の「教養歴史」講義に毎週参上。翌年からは月一回の集中講義を十年間務めた。そこで出会った方々との交流が長く続き、特に和歌山県警の中西隆司氏が、近畿警察学校へ出向中の数年間、同校の講師に招かれ数年出講した。

Ⅲ期 活動 期

昭和56年（一九八一） 40歳

- ・ 4月から京都産業大学に教養部教授として赴任し、自宅と京都の往復生活を三十一年間続ける。

※京都産業大学の教養部教授：文部省の教科書調査官は、小学校・中学校・高等学校の白表紙本調査を三年サイクルで担当することになっている。私は六年間（高・小・中／高・小・中）の担当を終えたら転出してもよい、という諒解をえていた。

そこで、五年目に公募のあった関西の国立大学へ書類を出し、内定寸前まで行きながら、最終的に不可解な横槍が入って潰れた。

そのショックもあり体調もすぐれず気落ちしていたところ、前述の田中卓先生から電話があり、学長会議で京都産業大学の柏祐賢学長に話をしたら、「うちは教養教育と教員養成に力を入れている

- ・ ゴールデンウィークに帰省し、横蔵寺へサイクリング。また夏休み初め上京した娘を連れて富士登山。

※横蔵寺へサイクリング：「美濃の正倉院」とも称される横蔵寺には、江戸後期の（一八一七年）富士山のふもとで一ヶ月断食して入定した妙心法師の即身仏（ミイラ）が安置されている。

そのお詣りも兼ねて、小学一年生の娘を自転車に乗せ、自宅から横蔵寺まで往復した。その坂道で「苦あれば楽ありだよ」と言ったことを、娘は今も忘れていない。

※初めて富士登山：春から一人暮らしの官舎へ妻と娘が来てくれたので、縁起の申年にちなみ、近所のTさん（文部省勤務）と、初めて富士山へ登った。新宿から五合目まで高速バス、そこから八合目まで歩き山小屋に泊って仮眠し、途中で見事な御来迎を拝み、ようやく登頂して感激。下りは須走を滑り降り、御殿場口から電車で帰った。

ので、ぜひ来てほしい」との吉報。ありがたく引き受けることにした。

実は皇學館にいたころから京都産大に注目していた。しかしながら、二年前、同じ平安時代史専攻の井上満郎氏が奈良大学から転任していたので、到底無理だと思い込んでいた。それが意外な巡り合せで赴任することになったのである。

当時の教養部は、百名近い大所帯であり、創立者荒木俊馬総長提唱の雄大な「建学の精神」をふまえれば、何でも自由に行いえた。

そこで、私の講義は、自分の専門に近い「平安貴族の生活と文化」、および神話や民俗などにも広がる「日本の年中行事」を新設し、さらに教職課程の「日本史概説」と「社会科学教育法」も担当することになった。

その講義ノートを基にして纏めたのが、『日本の祝祭日』（昭61、PHP新書）と『京都の三大祭』（平9、角川選書）などである。

※自宅と京都の往復生活：郷里の自宅では妻が母と

娘の世話と近所・親戚付き合いをしながら、岐阜の短大（のち大学）に勤めるため、自動車の免許を取り、毎週揖斐駅まで送り迎えをしてくれた。

一方、京都には妻の母と兄の住む古い家が龍安寺近くにあり、そこに毎週四日泊って、三日帰省するよう努めたが、土日も全国各地への出張が多くなり、そんな生活を定年まで続けた。

尚、郷里の青年クラブ（会長樋口正郎氏）から相談を受け、野中神明神社で元旦互礼会や春秋例祭などに奉仕する「しんし（紳士・親子・神子）会」を応援し、境内に「淡墨桜」の苗木を植えた。

- ・この年度から名城大学の教職課程部にも出講する。

※京都で本務があるため、初め隔週、のち集中講義で対処した（五年間）。しかし、専任を必要とされたので、瀧川政次郎博士の推薦される島善高氏（のち早稲田大学教授）に引き受けてもらった。

の余波が私にまで及び、取材攻勢を受けた。

尚、その後、「家永教科書裁判」で学習指導要領に基づく「教科書検定基準」の適用実態について証言を求められ、時野谷滋主任と共に東京高等裁判所へ三回出廷して詳しく説明した。

昭和58年（一九八三） 42歳

- ・4月から同志社大学でも「國書逸文研究会」の京都月例講読会を開始し、会誌発行所も京都に移す。

※京都でも「國書逸文研究会」：六年前から始めた「國書逸文研究会」の月例講読会を京都でも行いたいと考えた。そこで、発足当初から熱心な会員の竹居明男同志社大学教授に協力を頼み、その研究室棟で毎月第二火曜日の夜実施すると共に、会誌『國書逸文研究』の編集長も竹居教授に引き受けてもらい、発行所は私の京都寓居とした。

- ・11月10日、名著『官職要解』を読み易くした新訂版

昭和57年（一九八二） 41歳

- ・6月下旬から前年度の教科書検定をめぐる「侵略」騒動が起き、マスコミの取材攻勢に遭う。

※教科書「侵略」騒動：四月に昭和五十六年度の高等学校教科書検定結果が文部省から発表された。その際に文部省記者クラブの一人が、「日本は中国を「侵略」したとあつた教科書原稿を、文部省が「進出」に書き換えさせた」というようなレポートを作り、他社も同工異曲の記事を六月二十二日付で一斉に報道した。しかし、これは記者の杜撰な誤報であつたことが、まもなく判明した。

文部省の検定審議会では、昭和三十年代から「侵略」という用語に国際法上の定義が難しいので慎重な扱いをするよう参考意見をつけてきたにすぎず、ほとんどの原稿には「侵攻」とか「進出」と書かれていたのである。

けれども、先の「誤報」がそのまま意図的に増幅され、文部省の検定「非難」が暫く続いた。そ

を、講談社学術文庫として刊行する。

※『官職要解』の新訂版：明治二十八年（一八九五）

から長らく史料編纂掛（現在の東大史料編纂所）に勤めた和田英松博士（慶応元年〜昭和十二年）には、数多く名著がある。その一つ『官職要解』（初版明治三十五年）は、学生時代に求めた古本を辞書がわりに愛用してきたが、教養の講義で学生に勧めても手に入らない。

そこで、これを読み易く校訂して世に出すため、原稿を作り、『近世日本国民史』の文庫化に尽力されていた近藤啓吾金沢工業大学教授（62歳）の紹介により、講談社の学術文庫とすることができた。その縁で本書に続いて、平成元年（一九八九）、和田英松博士著『建武年中行事註解』も、同社の学術文庫から出したのである。

昭和59年（一九八四） 43歳

- ・6月の初めから京都産業大学の法学部に移籍して、

「日本法制史」を担当し、毎年ゼミ文集を作る。

※法学部で「日本法制史」を担当：教養部で四年目が始まって間もなく、法学部の「日本法制史」担当教授が突然転出されたので、その後任として、私に移籍を求められた。個人的には複雑な心境であったが、これも運命と受けとめ応諾した。

私が研究主題としている宮廷儀式は、律令的な王朝社会における法制の一種で、「日本法制史」の一端と認められている。ただ、元来文学部出身であるから、これ以降、専攻分野は「平安時代政治文化史」「日本法制文化史」と称している。

尚、この年度は教養部の二つの講義（受講者合計千人余）を続けたまま、「日本法制史」の講義（受講者二百余人）が加わった。また次年度以降も、教養講義二コマを続けたが、教養部の後任には、文部省教科書調査官の森茂暁氏（のち福岡大学名誉教授）を推薦し、助教授に採用された。

移籍した法学部では、講義と共にゼミ（二年生

けた私は、大学の二次入試を抜けて十七日に病院へ急行したが、すでに昏睡状態であった。

そこで、学園理事長の杉山令肇氏（当時参議院議員）に翌朝電話して、先生の教授昇任を懇請したところ、即座に諒解され「学長に持ち廻り教授会で決定するよう話す」と確約された。そして翌十九日、事務局長により辞令が届けられ、翌日の訃報には「教授」として公表されたのである。

二十一日の御通夜、二十二日の告別式には、各界遠近から百数十名が参列された。その間に汗青会の有志と協力して、まず忌明けまでに各々手書きの「忠誠院釈行道／稲川誠一先生を偲ぶ」を纏めた。また翌年の御命日までに追悼文集『照汗青―稲川先生を想ひ出―』を作り、さらに先生の遺稿を集大成した『日本の歴史と教育』（歴史篇と教育篇の二冊、合計約一二〇〇頁）を刊行した。

その後も、毎年三月二十日前後、汗青会主催により「稲川先生に学ぶ会」を大垣で開いている。

の自由演習、三年生の演習Ⅰ、四年生の演習Ⅱ）を担当し、ⅠⅡ合同のゼミバス旅行、卒業論文の指導、ゼミ卒業文集『出藍』の作成などを通じて交流を深め、多彩な人物を送り出した。

昭和60年（一九八五） 44歳

・3月20日、恩師稲川誠一先生が急逝される。汗青会の有志と共に、追悼文集と遺稿論集『日本の歴史と教育』の編刊に尽力する。

※恩師稲川誠一先生の急逝：大垣北高校以来の恩師稲川誠一先生（59歳）は、昭和五十五年（54歳）から高山短期大学講師を経て聖徳学園岐阜教育大学の助教授となられ、研究と教育に力を入れながら、教育正常化の言論出版活動も続けてこられた。その過労が重なったせいも、三月十四日に自宅で倒れられ、大垣市立病院で検査中「劇症肝炎」により二十日永眠された。

その直前に汗青会の橋本秀雄氏から知らせを受

・7月、護王神社の御鎮座百年祭奉賛会から依頼され、『和氣清麻呂公略伝』を刊行する。

※護王神社の御鎮座百年祭：和氣清麻呂（七三三～七九九）は、幕末の嘉永四年（一八五二）に到り、孝明天皇から「護王大明神」の神号を授けられ、明治七年（一八七四）別格官幣社に列格された。しかも同十九年（一八八六）、洛北の高尾山神護寺にあった廟の神霊が、京都御所の西脇に創建の「護王神社」へ遷幸された。

この護王神社では、戦後長らく月例公開講座を続けてきたが、昭和五十六年（一九八一）京都産大に着任した直後から、その運営に相談を受け、「弘文院セミナー」と名付けて、有志と共に出講を続けてきた。

その奉賛会から昭和六十一年（一九八六）「御鎮座百年祭」を催すため、祭神和氣清麻呂公の略伝執筆を依頼され、小冊子を仕上げた。

その後、平成五年（一九九三）『和氣清麻呂公の

繪像集成』を纏め、また同十八年（二〇〇六）には『和氣清麻呂公と護王神社』を出版した。

昭和61年（一九八六） 45歳

・9月10日、論文集『平安朝儀式書成立史の研究』によって、慶応義塾大学から「法学博士」の学位を授与される。

※「法学博士」の学位：昨年十二月、十数年来の論文を集めて『平安朝儀式書成立史の研究』（A5判九八六頁、国書刊行会、編集担当奥山芳広氏）を出版し、それを学位論文として慶応義塾大学へ提出した。

この論文集を法学研究科の利光三津夫博士（59歳）が主査（文学研究科の村山光一教授と法学研究科の向井健博士が副査）となって速やかに審査され、夏休み中に合格通知を頂いた。そしてこの日、同大学の「三田演説館」において、石川忠雄塾長から学位記を授与された。

共にお詣りした。ついで午後、東大の史料編纂所（当時所長宮地正人教授）の書庫を見学し、その講堂において「國書逸文研究会」創立十周年記念の研究発表会を開き、さらに夕方、学士会館本郷分館で懇親会を催した。

その際、博士と縁の深い碩学たちから会誌に寄せられていた巻頭随筆などを集めて作成した冊子『和田英松博士の学恩』（國書逸文研究会の私家版）を参会の各位に贈呈した。

なお、会誌『國書逸文研究』は、十年間年二回発行してきたが、以後十年間は年一回発行に改め、三〇号（平成9年10月）を出して終了した。

昭和63年（一九八八） 47歳

・4月から昭和六十年記念の特集誌『図説 天皇の即位礼と大嘗祭』の企画編集に主力を注ぐ。

※昭和六十年記念の特集：新人物往来社『歴史読本』の別冊編集担当者（佐藤実氏）から新企画

私は文学部出身であるから、学位も文学研究科へ出すことを考えていた。けれども、当時の法学部長から大学院の後期課程の論文指導には「法学博士」の丸号教授が必要といわれた。

そこで、東京の律令研究会において面識をえた慶大の利光博士に相談したところ、喜んで引き受け、直ちに審査し合格させて下さった。

そのおかげで、翌年度から博士後期課程を担当し、修士課程から近代皇室経済制度史の論文指導をした川田敬一氏（現在金沢工業大学教授）、および清水潔・川北靖之両氏などの学位主査も務めた。

昭和62年（一九八七） 46歳

・8月20日、和田英松博士の五十年祭と「國書逸文研究会」十周年記念の会合を開催する。

※和田英松博士の五十年祭：和田博士は昭和十二年八月二十日、満七十二歳で卒去された。そこで、五十年祭の当日午前、駒込の染井墓地へ御遺族と

の相談を受け、今秋が昭和三年（一九二八）十一月の大礼（即位礼・大嘗祭）から満六十年となる記念にふさわしい特集を提案し、その構成・人選などを一任された。

そこで、そのころ神社本庁の調査部にいた研究者の牟禮仁氏（のち皇學館大学教授）に協力を求め、可能な限り多彩な方々に原稿を依頼して、貴重な絵図資料を収録することに努めた。

その際、大正大礼の大正四年（一八一五）直後に誕生され、戦後「にひなめ研究会」を創設して着実な共同研究を続けてこられた三笠宮崇仁親王殿下（72歳、当時東京藝術大学客員教授）に思い切って御手紙を差し上げた。すると、昭和五十年刊の田中初夫博士著『踐祚大嘗祭』に寄せられた序文の転載（抄録）を認められ、御専門の講義録『古代エジプトの神々』（日本放送出版協会）を贈って下さった。

また、昭和天皇と同学齢の学友で侍従となり、昭和三年（一九二八）の大礼にも参列されている

永積寅彦氏（86歳、もと宮内庁掌典長）に直接お願ひしたところ、長文の新稿「昭和の御大典―奉仕の思ひ出」を寄せられた。しかも、それから再三御宅へ参上した（途中から高橋紘氏も同道）ところ、昭和天皇の実像を幼少期からの日記に基づいて詳しく話して下さったので、その記録を基に同氏著『昭和天皇と私―八十年間お仕えして―』（学研）として出版する手伝いをさせて頂いた。

その上、大正三年（一九一四）から七年間、高輪の「東宮御学問所」で使われた全教科の立派な特製教科書を貸与して下さった（その後、立川の「昭和天皇記念館」に寄贈）。

その中に白鳥庫吉御用掛の書かれた『國史』五冊（全集未収）と清水澄御用掛の書かれた『法制』（未刊）などが含まれている。そこで、御遺族と相談して、平成九年（一九九七）、前者は勉強社から、後者は原書房から、複製出版させて頂いた。

尚、この特集誌は、編集完了間近の九月十九日、昭和天皇（87歳）が大量吐血して昏睡状態に陥ら

れたので、刊行中止も検討した。しかし、何とか症状安定との内報をえて、大札記念の十一月初旬に発売することができた。

昭和64年11平成元年（一九八九） 48歳

・1月7日、昭和天皇の崩御により行われた「平成」改元のNHK特別報道で解説などを務める。

※「平成」改元のNHK特別報道解説：昭和天皇は一昨年（一九八七）九月中旬、内臓の癌により入院手術された。その直後から万一を考えての準備が様々な形で始まり、とりわけ国民生活に影響の大きい改元問題について水面下の取材合戦が始まった。それが一年後の昭和六十三年九月十九日夜の大量吐血からは急に切実となった。

その取材に、一昨年来もつとも熱心なNHKの政治部A記者から、九月二十日以降、急変に備えて東京のホテル常駐を求められ、毎朝御容態を確認してから京都へ授業に行き直ちに引き返す、と

いう日々が、翌年一月七日まで続いた（当時は携帯電話がなくポケベルで連絡をとりあった）。

当日は早朝六時五〇分ころA記者から電話があり、渋谷のNHKに急行した。その控室で午前十時からの踐祚式（剣璽等承継の儀）を視ながら、昨年三月出版した拙著『年号の歴史』と改元関係の最新情報に目を通した。

そして午後一時半から特別報道番組のスタジオに入り、二時半すぎに「新元号は『平成』です」という小淵恵三官房長官の公表がある前後、梶原四郎アナウンサーの司会で解説を務めた。その夕方から深夜まで、民放や新聞各社からの取材を受けながら、テレビで追悼番組を視聴した。

尚、この縁で二月二十四日の御大喪にも、NHK特別報道番組の解説（司会橋本大二郎キャスター）などを手伝った。

・10月12日、日本歴史学協会の企画したシンポジウム「天皇家代わり問題」に、神道史学会からの特別委員

として基調報告を行う。

※日本歴史学協会のシンポジウム：日本歴史学協会（略称「日歴協」）は、昭和二十五年創立の歴史関係学会の連合団体である。その活動に熱心な方の勧めによって神道史学会も参加することになり、昭和五十七年（一九八二）度から代表者（谷省吾 皇學館大学教授）より委任され、特別委員として年数回の会合に出ている。

その日歴協が来秋予定の即位礼と大嘗祭をめぐるシンポジウムを企画して早稲田大学で開いた際、古来（とりわけ明治以降）の大札史について基調報告を行った。そこでは大札自体に批判的な発言が多かったけれども、立場の異なる人々との学問的な意見交換の有用なことに気付いた。

平成2年（一九九〇） 49歳

・11月12日・22日、平成の即位礼・大嘗祭に関連して、前年から研究に努め、当日テレビで解説に尽力する。

※平成の即位礼と大嘗祭：一年間の諒闇（服喪）が

明けた一月中旬から政府・宮内庁などで本格的な準備の進められた「平成大礼」に関連して、論壇などで賛否両論が盛んになった。

そこで私は、宮廷儀式研究の一環として関係史資料の調査紹介（『登極令大要』『登極令義解』の翻刻）や『礼儀類典』の研究に努めてマイクロフィルム出版すると共に、テレビや新聞の取材や特集企画（別冊歴史読本『古絵図に見る皇位継承儀式宝典』、共同通信社主催『即位儀礼にみる宮廷文化展』など）に、可能な限り協力した。

とくに十一月十二日の即位礼は、NHKの特別報道番組で午前中の「正殿の儀」を中心に、松平定知アナウンサーの司会により、風俗博物館長の井筒與兵衛氏と協力して解説を務めた。

ただ、二十二日の大嘗祭は、NHKが反対陣営に配慮したのか、特番をしなかったので、KBS京都で悠紀殿・主基殿の儀の解説にあたった。

が抜けて突き出る恐れのあることが判った。

それにも拘らず、高齢者のため再手術しても同様の状態になる危険が高いから、このまま固定するのを待つほうがよいと説得され、翌四年七月まで寝たきり情態が続いた。しかし、その間に段々足腰が弱ることを心配した妻が、「何とか家で面倒をみましょう」と言い出し、結局それに従った。

そのころ妻は、岐阜の短大に勤めながら、毎年夏休みに下呂の県立看護専門学校へ集中講義に出かける一方、論文集『斎王和歌文学の史的研究』（国書刊行会）を村山修一博士のお勧めで愛知学院大学へ学位論文として提出し、口述試問の準備中だった（翌春「博士（文学）」を授与される）。

しかし、何より母のことを大事にしたいと考え、退院後も寝たきり状態であった母のために、毎日朝夕の調理を工夫して、自分で食べられるように励まし、近くのトイレも両手を曳き歩いて通わせた。そうするうちに、母は自力で台所にもトイレにも行き来できるようになった。

平成3年（一九九一） 50歳

・11月12日（火）、母（75歳）が郷里の自宅玄關脇で倒れて骨折し、手術ミスのために八ヶ月入院したが、その後、自宅で妻が面倒を見続けてくれる。

※母の骨折手術：母は低血圧で目まいの持病があり、この日も正午ころ玄關脇の郵便受前で倒れ、大腿骨を折った。しかし、家には愛犬コロしかおらず、近所の人も気付かない位置のため、独力で三時間近くかけて家の中へ這いずり込んだという。

そこへ妻（当時岐阜聖徳学園短期大学教授）が、三時限の授業を終えて夕方帰宅し、気を失った母に気付いた。そして程なく大垣の高校から帰宅した娘も付き添い、救急車で揖斐病院へ入った。そこで直ちに全身麻酔して金具（ボルト）三本を入れる二時間半の手術をうけた。

ところが、それから二週間後、激しい痛みを訴えるのでレントゲンを撮ってみると、ボルト一本

それから三年後、妻は岐阜聖徳学園大学へ移籍したが、同十四年（二〇〇二）定年前に早期退職し（名誉教授となる）、同十九年に母（91歳）が長逝するまで、身辺の世話に専念してくれた。

ちなみに、京都で私が平日同居し世話になっていた妻の母菊池春野は平成二年（一九九〇）二月、また伯父菊池和夫は同十年十月、二人とも九十歳過ぎてから安らかに長逝した。

・12月12日、満五十歳（知命）の節目に、評論隨筆集『歴史に学ぶ』を出版する。

※『歴史に学ぶ』の出版：孔子のいう「五十にして天命を知る」（『論語』為政篇）には到底及ばないが、満三十歳で戦死した父より二十年、身心とも元気に生きて来られたことに感謝し、できればあと二、三十年、何とか活躍したいとの願いをこめて、一般向けに書いた拙文を精選した『歴史に学ぶ―日本文化の再発見―』を、新人物往来社から

自費出版し、知友などに差し上げた。

それが二年後（平成五年）旧著『伊勢の神宮』を『伊勢神宮』と改題して講談社学術文庫化する際の編集者から勧められ、平成十年、『日本歴史再考』と題して同文庫に加えられた。

平成4年（一九九二） 51歳

・6月、神道大系編纂会より『北山抄』の校訂本、ついで翌5年6月、『西宮記』の校訂本が出版される。

※神道大系編纂会：神道大系は戦前からあった宮地直一博士の構想を、國學院大学の西田長男博士が松下幸之助氏に相談し、有志の援助をえて実現に着手された神道関係の一大史料集成である。

その実務を担当された松下電器重役の小川鍛氏が、昭和五十年（一九七五）五月、文部省へ訪ねて来られ、意見を求められたことがある。

この大事業が、大野健雄氏のもとで古典研究者の眞壁俊信氏や秋山一実氏らの尽力により、昭和

五十二年から平成十九年（二〇〇七）まで三十年かけて、正篇一二〇巻だけでなく続篇五十巻まで刊行された意義は大きい。

※『北山抄』と『西宮記』の校訂本：この神道大系に関しては、京都産大へ移ってから京大名誉教授柴田實博士から「神社篇 宮中・京中・山城国」の編纂校訂を依頼されて、準備を始めていた。

けれども、昭和六十年（一九八五）末に出版した『平安朝儀式書成立史の研究』を東大名誉教授土田直鎮先生に献呈したところ、翌年早々、先生担当の「朝儀祭祀篇」のうち『西宮記』と『北山抄』の校訂を全面的に手伝うよう依頼された。

これは先生から御指導を受けられる願ってもない機会と考えて引き受け、「神社篇」の方は京都国学院講師の出雲路敬直氏に替ってもらった。

ところが、土田先生は二代目（井上博士の後任）館長の御仕事に多忙となられ、まもなく過労で入院される際、「すべてを任せるから宜しく頼む」との御葉書を寄せられた。しかも、同編纂会の大野

理事から、「先生の病状は樂觀できないので、なるべく早く仕上げしてほしい」の御電話があり、以後事務局の担当者から猛烈な催促が続いた。

そのため、一方で上述のような御代初めの用務に追われながら、他方で一任された両書の校訂本を仕上げるため、文字どおり一所懸命に毎日深夜まで励んだ。

具体的な校訂作業は、古写本の構成自体が複雑な『西宮記』よりも、本文に異同の少い『北山抄』の方が早く進められると思ひ、前田育徳会尊経閣文庫所蔵本（三条西家旧蔵の永正本）を底本として取り組み始めた。その際、従来の版本・刊本にない句点と読点の区別、全文の返点を加えることにして手間どったが、何とか平成四年（一九九二）六月、土田先生の存命中に刊行できた。

一方でその校正ゲラを校正しながら、他方で進めた『西宮記』の校訂作業は、同じく尊経閣文庫本（三条西家旧蔵の大永本）を底本とした。しかし、他の写本との間に本文の文字異同だけでなく

動物の出入が夥しい。しかも、既刊本を参考にし、全文に句読点・返点などを加えることに時間を要し、校訂本が刊行されたのは、土田先生の他界から半年後（平成五年六月）である。

このような事情と私の力不足により、誤植や不備の少ないものしか作れなかった（その再校訂本作りは、野木邦夫氏がデータ化を進めている）。

・7月20日～31日、「日中国交正常化二十周年記念」の「日中合同歴史研究大会」で研究発表のため、初めて中国の古都・新都を訪ねる。

※中国訪問：近世日中交流史の研究によって日本学士院賞を受賞された大庭脩関西大学教授（65歳）が中国歴史学会と企画された日中共催の歴史研究大会への参加を学友の田中卓先生（68歳）などに呼びかけられた。その田中先生から同門の数名に對してお誘いがあった。

私は前述の如く『北山抄』に続いて『西宮記』

の校訂本作成中であつたが、またとない好機と考えて参加することにした。ところが、同行研究者（皇學館大学出身の渡辺寛・川北靖之・清水潔・岡田登四氏）より年長のために研究発表するよう言われ、「日本宮廷における唐風儀式の成立」について北京大学で発表した（通訳高潤生氏）。

それに先立ち、上海から杭州（南宋の首都）を経て、西安（周・秦・漢・唐の首都）の主要な史蹟・陵墓と博物館などを訪ね、さらに北京（元・明・清の首都）へ入ってから万里の長城も紫禁城・頤和園・天壇なども駆け足で廻った。そのうち発表に関係の深い釈奠の孔子廟と古代の王宮跡などを比較して、日中の異同を考えさせられた。

尚、台湾の台北市主催「孔子祭」は、平成十年九月二十八日に拝観し、孔子直系七十七代孔徳成氏（78歳）の講話も拝聴した。

・10月14日、順徳天皇七百五十年祭にちなみ、藝林会の主催により京都で学術講演会を開催、

平成5年（一九九三） 52歳

・4月から「靈山歴史館」の運営指導委員を務める。

※靈山歴史館の指導委員：京都東山には幕末・維新に貢献した志士たちの墓地が数多くあり、その近くに「明治百年」の記念事業として、昭和四十五年（一九七〇）「靈山歴史館」が開設された（初代館長松下幸之助氏）。それを運営する靈山顕彰会で企画の「日本を創る青年会議」合宿研修の指導を依頼された私は、京都大学の安藤仁介教授（国際法学者）と二人で二十年近く協力してきた。

それが平成の初めに終了すると、明治維新ミュージアム「靈山歴史館」の展示企画などについて助言する運営指導委員を委嘱され、定年後の平成二十五年（二〇一三）まで二十年務めた。

その委員会は岩倉具忠京大名誉教授（具視の五代孫）や木村幸比古同館学芸課長など維新の関係者・研究者などから貴重な話を聴くことができた。

また11月15日、佐渡で記念講演会を開催する。

※順徳天皇七百五十年祭：承久三年（一二二二）、父帝後鳥羽上皇（42歳）と共に「道ある世」の回復を目指し、倒幕の兵を挙げて敗北された順徳上皇（25歳）は、佐渡へ流されてから二十一年後の仁治三年（一二四二）四十七歳で崩御された。

それより七百五十年後の本年、藝林会で二つの事業を行い、その企画実現に尽力した。

※講演会と成果の出版：開催行事は、京都の靈山歴史館で谷省吾皇學館大学学長と樋口芳麻呂愛知淑徳大学教授の講演会を開き、それと拙稿などを加えて会誌「藝林」に掲載し、それを『順徳天皇とその周辺』と題して臨川書店から出版した。

また佐渡では地元有志（倉田藤五郎・柴田勝両氏など）の協力により、真野町公民館において当地出身の嵐義人文部省教科書調査官と私が講演を行い、その記録に資料を加え『順徳天皇を仰ぐ』と題して新人物往来社から出版した。

私は門外漢ながら、所郁太郎を慕って長州まで行を共にした義従弟の長屋丁輔の子孫が京都に居られることを知り、彼の持ち帰った郁太郎と丁輔の遺品を保存し活用するために少し手伝った（現在は丁輔の郷里の大野町に寄託）。尚、そのことから靈山顕彰会岐阜県支部の顧問を務めている。

・6月9日、皇太子殿下御成婚の儀に関して、NHKで特別報道番組の解説を手伝う。

※皇太子殿下御成婚：皇太子徳仁親王殿下（33歳）と小和田雅子さま（29歳）の御成婚当日、賢所大前の儀と宮殿正殿の儀をNHKテレビで特別報道番組として放映するにあたり、御二方の親友男女各三名と評論家の草柳大蔵氏を交えて懇談した。

また、その警護などにあたった皇宮警察本部の主催する教養講演会などで、御成婚儀式の来歴について講述した。

・10月2日、伊勢の神宮の第六十一回式年遷宮を迎え、内宮遷御の儀を奉拝する。

※第六十一回式年遷宮を奉拝：前回（昭和四十八年）

から二十年後の式年遷宮は、そのころ皇學館大学（文学部国文学科）の学生だった娘（20歳）の保護者会役員として、八月初め「お白石持」行事に妻と共に参加させて頂き、見事に造替の成った内宮正殿を間近に拝することができた。

しかも、十月二日の内宮（皇大神宮）遷御の儀は、神宮司庁から特別に招待されたドナルド・キーン博士（71歳）の接待役を依頼され、午後四時から席敷の奉拝席において遷御の始まる八時まで、いろいろなことを話しあうことができた。

その多くは「新潮45」に連載中の「明治天皇」に関するお尋ねで、不十分ながら知りえていたこと（昭和天皇御学友の永積寅彦氏などから承った逸話など）を申し上げた。

さらに浄閣の中で厳肅に西の古殿地から東の新

殿地へ遷られる絹垣の御列を奉拝した後、宇治橋の入口脇でNHKテレビの企画により、直前まで庭燎奉仕をされてきた指揮者の岩城宏之氏（61歳）を交えてキーン博士との鼎談に加わり、それぞれの感銘を語りあった。

平成6年（一九九五） 53歳

・1月、『真清田神社史』本編（通史編）が刊行される。

※『真清田神社史』：尾張一宮の真清田神社から平

成の初め、田中卓博士に社史編纂の依頼があった。そこで田中委員長の指名された編纂委員（私と白山芳太郎・井後政晏・田辺裕の各氏）が、関係史蹟の調査成果などを毎月公開講座で発表し通史編をまとめた。私は上代と現代の一部をしたが、資料編（翌七年一月刊）にも一番尽力したのは田辺裕氏（名大の一年後輩、県立高校教諭）である。

・10月22日、「平安建都千二百年」記念行事に先立ち、

関連の研究と企画に尽力する。

※平安建都千二百年の記念：桓武天皇が延暦十三年

（七九四）十月二十二日に現在の京都へ長岡より遷られ、「平安」の宮都を建てられてより千二百年を迎える本年、まず歴史研究会の京都大会で市内の史蹟案内と記念講演を担当した。

また、延暦二十五年（八〇六）三月十七日に崩御された桓武天皇（70歳）の「柏原陵」について、所在の来歴を考証した。さらに百年近い前の明治二十八年（一八九五）創建された「平安神宮」の成立前史を解明した。

このほかに古代学研究所長（古代学協会理事長）の角田文衛博士（81歳）が長らく推進してこられた『平安時代史事典』（上下二巻と索引）は、同年四月に角川書店から刊行された。

その古代学研究所文献課非常勤講師を昭和五十六年（一九八一）から委嘱され、十年余り平安博物館へ毎週一回出向き、編纂実務を手伝ってきた。

その出版祝賀会において挨拶を交わした編集部
の宮山多可志氏に勧められ、教養の講義ノートを
基にして『京都の三大祭』（角川選書、のち角川ソ
フィア文庫）を出して頂いた。

平成7年（一九九五） 54歳

・2月20日、國書逸文研究会編の研究成果『新訂増補
國書逸文』を刊行する。

※『新訂増補 國書逸文』を刊行：國書逸文研究会

の会員が三十数名で『國書逸文』の全面的な新訂
増補を分担執筆し、学術振興会の出版助成をえて
国書刊行会から出版した（全一一七二頁）。

この困難な実務にも、八年前から会誌編集長の
竹居明男同志社大学教授と編集委員（細谷勤資大
阪青山短大講師など）に積極的な協力をえた。

・4月から京都産業大学に新設された日本文化研究所
の初代所長と一般教育研究センターのセンター長に

任命され兼務する。

※日本文化研究所：昭和四十年（一九六五）四月に創立された京都産業大学の二十周年記念事業として「日本文化研究所」が新設された。そこへ、急に法学部から移籍して初代所長を引き受けるよう柏祐賢学長より申し渡され、九年間務めた。

この日文研（略称）では、専任研究員として私と塩田博子・林隆・村上二三三教授および各学部からの兼任研究員六名によりスタートした。

その共同研究テーマは、A「京都賀茂の伝統文化」とB「日本文化の国際交流」の二つを決めた。そして毎月一回（火曜夜）見晴らしの良い新築の第三研究室棟会議室で月例会を開き、また夏休みに学外（妙心寺・高野山・本願寺会館・私学会館など）で一泊二日の合宿見学会を企画して、専任・兼任の全員が順番に研究発表を行った。

このうち、Aについては「宮廷社会と賀茂大社の交流に関する共同研究」に絞り、日本学術振興

会などの研究助成をえて数年続けた。またBについては、研究所員・学内教員および国内の研究者だけでなく、海外研究者も研究会・講演会に招いた。外来講師の主要例は、ピーター・マサイアス氏（オックスフォード大学教授、皇孫浩宮殿下留学中の研究指導者）、ドナルド・キーン氏（コロンビア大学教授、後述）、ロバート・ボーゲン教授（カリフォルニア大学教授、菅原道真の研究者）、フランシス・エライユ教授（パリ大学教授、『御堂関白記』仏訳者）など。

さらに、その成果を所報「あふひ（AOI）」（九月）と『日本文化研究所紀要』（三月）に盛り込み、それを国内外の研究機関などへ送った。

このような運営方法は、昭和五十八年（一九八三）から兼任した本学の「世界問題研究所」（所長大島康正教授→佐藤吉昭教授）における在り方経験を見習ったものである。

この所長職は三期九年間務め、分野の異なる学内外の研究者からいろいろ学ぶことができた。

※一般教育研究センター：四月から一層多忙を極めたのは、大所帯の旧教養部を一般・語学・体育の三センターに分割して改組した一つの「一般教育研究センター」を運営する実務であった。

この甚だ困難な職務は、原田守光事務長などのサポートをえて六年務めた。三年目に入るころから全員の協力をえて、学生の基礎的な作文・発表の能力を高めるため、「日本語表現」や「教養ゼミ」などを新設することもできた。

平成8年（一九九六） 55歳

・3月18日、娘が皇學館大学卒業式で「大宮司賞」を頂き、二年後に結婚する。

※娘の卒業と結婚：一人娘の久代は、皇學館大学に進み、二年間女子寮生活を送り、三・四年次は大学の近くに下宿した。

その間に国文学科で中高の教員免許と博物館の学芸員資格をとったが、両親のような研究者を目

指す気持はなく、クラブ活動などに力を入れた。それでも卒業論文には精一杯努力したらしく、卒業式で「大宮司賞」を授与された。それから二年後、同じ大学出身の濱島功君との結婚式を椿山荘で挙げた。さらに三年後、彼の転勤により小田原へ移り住み、元気な二子を授かっている。

平成9年（一九九七） 56歳

・1月14日、「新年宮中歌会始」の陪聴に招かれる。

※新年宮中歌会始の陪聴：毎年正月月中旬に催される宮中歌会始では、前年公表される「御題」の一字を読み込み、九月末までに一般国民（海外在住者も）から詠進された和歌の中から選ばれる「預選歌」十首などが、天皇・皇后両陛下の御前において雅な朗詠で披講（読み上げ）される。

その際には、成年男女皇族と選者・召人および預選（入選）歌の作者だけでなく、各界から選ば

れた「陪聴者」数十名も招かれる。

その歌会に、私は昭和四十四年（一九六九）春の結婚以来、妻と共に毎年詠進してきた。もちろん一度も入選したことはないが、前年に刊行した拙著『皇室の伝統と日本文化』（広池学園出版部）を、文部省在職中から面識のある宮中歌会始披講会の坊城俊周氏などに献本したことも一因となったのか、陪聴者としてお招き頂ける旨を、年末に宮内庁式部職より知らせて頂いた。

当日早朝、靖国神社へ参拝したところ、神社から宮司の車を出して下さった。参内して長和殿の控間で待つ間、D・キーン博士などに挨拶し、やがて正殿松の間の、正面に向つて左側に着席した。それから一時間近い全容は、毎年NHKテレビでも中継されるとおりであるが、まさしく現代に伝わる皇室文化の神髄を体感することができた。

- ・4月から大学で弓道部の顧問を務める。

方が10時間早い。

そんな関係から急に頼まれたことがある。それは文藝春秋社の新しい企画「文春新書」の第一号を『皇位継承』と決め、その執筆を高橋氏に依頼していた。

そこで高橋氏は、昭和天皇の結婚・即位以降、とりわけ戦後の新皇室典範に伴う諸問題を書けばよいと思っていたようである。しかし、それ以前の来歴の説明も不可欠と考えつき、その前半部分を執筆してくれと電話して来た。このテーマには、私も前から関心があったので、直ちに快諾し、急いで書き上げたのである。

平成11年（一九九九） 58歳

- ・5月5日、京都フォーラム事務局長の矢崎勝彦氏に勧められて、ワシントンDCで世界銀行主催の国際シンポジウムにおいて基調報告を行う。この機会に近辺の名所を歴訪する。

※弓道部の顧問：昨秋新学長に選任された新田政則

教授と、ゼミ生でもあった部員たちの推挙により弓道部の顧問を引き受け、退職まで十五年務めた。私は武道の心得がないけれども、弓道には憧れを懐いていたので、この機会に暫くクラブの道場へ通い、学生から特訓を受けた。また年数回のコンパには必ず参加して、礼儀正しい師範と部員から多くのことを教えられた。

平成10年（一九九八） 57歳

- ・10月10日、高橋紘氏との共著『皇位継承』（文春新書）が出版される。

※高橋紘氏との共著：高橋紘氏は共同通信に勤め、昭和四十年代から宮内記者会に籍を置きながら、「現代天皇家」の研究と著作を続けてきた。

その一冊『象徴天皇』（昭和62年、岩波新書）を読み、私信を交わしてから、いわば兄弟のように親しくなった（私と生年月日が全く一緒で、彼の

※京都フォーラム：通販フェリシモ会長の矢崎勝彦

氏（私と同学齢）が平成元年11月3日に創立された将来世代を思索する「京都フォーラム」に参加を求められ、可能な限り協力してきた。

その一つとして、前年（平成十年）十月、京都で開催された世界文化遺産総会の記念講演に招かれたイシエマル・セラデルディン博士（エジプト出身）の希望によって、矢崎氏から「伊勢の神宮を存分に案内してほしい」と頼まれ、一泊二日同道したことがある。

※世界銀行主催のシンポジウム：それを同博士が大変に喜ばれ、来年ワシントンDCの世界銀行本部で開催する「世界の歴史的な都市と宗教的な聖地の建物に関する国際シンポジウム」で、伊勢神宮の式年遷宮に関する基調報告をしてほしいと要請された。

英語の不得意な私は、とても無理だと思ったが、三〇分のスピーチ原稿を京都産業大学外国語学部の専門家に英訳してもらい、それを完璧なほど諳

誦した。その結果、5月5日のシンポジウムでは何とか大役を務めることができた。

※近辺の名所を歴訪…このシンポジウム前後、単身で行動し、ワシントン滞在中、アーリントン国立墓地、リンカーン記念堂、国立アメリカ歴史博物館、大統領官邸、国会議事堂、国立公文書館など、またニューヨークに移動後、メトロポリタン美術館、ユダヤ教・カトリック・プロテスタントの主要な教会、エンパイーステートビルなど、さらに少し戻ってフィラデルフィアの独立記念館、「自由の鐘」展示館、市庁舎、フランクリン研究所など、およびニュージャーシーの州立ラトガース大学のアレキサンダー図書館（グリフィス文庫）、その郊外の日本人墓地などを駆けめぐった。

・6月11日に上程された「国旗・国歌法案」に関して、7月16日に衆議院の内閣委員会、ついで8月4日に参議院特別委員会の名古屋公聴会に招かれ、賛成の意見を公述する。

に関連して、まず六月から当時の自由党と自民党などの勉強会に出講した。

ついで七月十六日、衆議院の内閣委員会で阿部正路氏・吹浦忠正氏と共に賛成意見を公述した。さらに八月四日、参議院特別委員会の名古屋公聴会で中山清治氏・山本春樹氏と共に賛成意見を公述した。その後、衆参両院で審議を尽くし、記名投票の結果、七割以上の賛成によって、法案は成立したのである（拙著『国旗・国歌と日本の教育』（平成12年、モラロジー研究所）参照）。

平成12年（二〇〇〇） 59歳

・4月から「葵祭行列保存会」の評議員を務める。

※「葵祭行列保存会」の評議員…嵯峨天皇朝から齋王と勅使の参向する賀茂大社の例大祭（旧暦四月、新暦五月）では、京都御所から下社を経て上社に至る行列（路頭の儀）が注目を浴びる。

それに府や市から補助をえるため、昭和二十六

※「国旗・国歌法案」…明治以来「日の丸」「君が代」が日本の国旗・国歌であることは、大半の日本人にも諸外国においても自明の認識であった。

しかし、敗戦後、それには明文上の法的根拠がないから掲揚・斉唱に「絶対反対」と叫ぶ一部の政党や団体のラジカルな運動がエスカレートし、悲惨な事件まで起きていた。

そこで、小渕恵三内閣の野中広務官房長官（京都出身）が中心となって、法案を作り国会に上程した。その趣旨説明に先立ち、内閣官房から拙著『国旗・国歌の常識』改訂版（平成5年、東京堂出版）を参考資料として全面的に利用したい旨の諒解を求められた。

それをふまえられたのか、法案の趣旨説明では、「君が代の君は国家・国民統合の象徴である憲法上の天皇を指す」と明言され、この見解が衆参両院の与野党大多数に共通理解をえられた。

※衆参両院の委員会で賛成意見公述…この法案審議

年に「葵祭行列協賛金」が作られ、さらに必要な衣装や牛馬および行列奉仕者・補助者などを確保するため、平成十二年から「葵祭行列保存会」が設けられた（会長猪熊兼勝京都橘大学名誉教授）。

私は京都産大に着任以来、教養の講義「日本の年中行事」で毎年「葵祭」の話をするだけでなく、行列奉仕の補助学生数十名を募り事前指導などの手伝いなどを続けてきた。

そのためか、この保存会の評議員を依頼され、定年まで務めた。その年から責任の重い齋王代（よらぎ）の興丁八名を産大に一任され、今も続いている。

・4月から靖国神社の崇敬者総代に就任し、また公式ガイドブック『ようこそ靖国神社へ』を出版する。

※靖国神社崇敬者総代…靖国神社では、平成十一年（一九九九）の創立百三十年記念事業の一つとして、数年前から遊就館を増改築するため検討委員会を設けられた。その委員を委嘱され、やがて同十四

年から面目一新の遊就館がオープンした。

その途中の本年四月、文部省在職中の文部事務次官であった井内慶次郎氏の後任として崇敬者総代を委嘱された。それを十八年間（平成30年）まで務め、徳川康久宮司の辞任直後に退任した。

※『ようこそ靖国神社へ』の出版：靖国神社では、「御創立百三十年記念」の事業として『やすくの祈り―目で見る明治・大正・昭和・平成―』と題する大判の立派なカラー写真集を刊行された。

しかも、それとは別に、より判りやすい「オプショナルガイドブック」を作ってほしいとの依頼をうけ、湯澤貞宮司・花田忠正権宮司などの全面的な協力をえて、本年四月『ようこそ靖国神社へ』（近代出版社）を完成した。

また関係評論をまとめて、同十四年七月『靖国の祈り遥かに』（神社新報社）を新書判で出版した。

・6月、東映「千年の恋」の脚色に意見を求められる。

の希望される修学院離宮へ向った。

ただ、当日は、日曜日のため原則見学できないことが事前に判ったので、京都の親友に相談したところ、意外な形で可能になった。

江戸初期に後水尾上皇の御意向により造営された修学院は、上・中・下の御茶屋などから成り、その前方に稲田が広がる。その耕作に奉仕している篤志家が、「もし落穂拾いを手伝ってくれたら、休憩に中へ入れるかもしれない」と言われた。

そこで昼ころ、博士も私も長靴を履いて、実際に一時間余り落穂を拾い、その道具を小屋に納めるため木戸から入り、紅葉の絶景を眺望することができた。これには博士も感動され、その後お会いするたびに「あれは本当に楽しかったね。宮廷文化の奥深さがよく判った」などと言われた。

平成13年（二〇〇一） 60歳

・3月、京都産大の日本文化研究所で二年前から開催している「後桜町女帝宸記研究会」の解説成果を

※「千年の恋」脚色：『源氏物語』成立千年にちなむ東映制作『千年の恋』の監督助手（京産大卒業生）から宮廷儀式行事の脚色に協力を求められた。その機会に太秦の撮影所を訪ね、天海祐希（光源氏）・竹中直人（明石入道）両氏らと懇談した。

・11月16日、京都産大でD・キーン博士の講演会を開催し、翌日、修学院離宮で紅葉を観る。

※D・キーン博士の講演会：京都産大の「日本文化研究所創立五周年記念事業」として、前年春からD・キーン博士に記念講演を依頼し快諾された。テーマは「明治天皇と日本文化」、流暢な日本語で「ムツヒト大帝」の神髄をエピソードも交えて明快に語られ、会場「神山ホール」を埋め尽くした七百余名に多大な感銘を与えられた。

※修学院離宮で紅葉を観る：その夜（土）は貴船の和風旅館に泊ってもらい、翌朝（日）快晴のもと、紅葉の見事な貴船神社などに参拝してから、博士

『紀要』に連載し始める。

※「後桜町女帝宸記研究会」：日本文化研究所の共同研究は、前記の主題に即して行うと共に、平成十一年度から京都御所東山御文庫所蔵の『後桜町天皇日記』を解説し考注する研究会を立ち上げた。

これは私自身、日本史上の女帝に関心があって未刊の同御記（全四十余冊）もマイクロフィルムで入手したが、流麗な仮名書きは簡単に読み解けない。そこで、学内外の研究者たちに協力を求めて月例研究会を開くことにしたのである。

その幹事役を引き受けられたのは、東北大学出身で近世史専攻の若松正志氏（のち文化学部長）である。また慶応大学出身で和歌文学専攻の小林一彦氏（のち日本文化研究所長）の力添えも大きい。さらに学外から優秀な研究者も参加された。

とりわけ『紀要』掲載原稿を今江廣道先生（もと宮内庁書陵部編修課主任研究官）に校閲して頂き、その他界後は宍戸忠男氏（國學院大学兼任講

師)に引き継いでもらった。

尚、本年(平成13年)12月1日、皇太子殿下の長女として皇女の敬宮愛子内親王が誕生された際、小学館文庫から依頼されて『天皇の人生儀礼』を急いで書き(翌年1月刊)、また資料紹介をまとめて『近現代の「女性天皇」論』を展転社から出した。さらに奉祝記念として野中神明神社に幟建てのステンレスポール二対を奉納した。

・三年前から「伊勢神宮崇敬会」の研修会に連続出講し、この4月から「神宮評議員」を務める。

※伊勢神宮崇敬会：戦後の被占領下で宗教法人となつた伊勢の「神宮」を応援するため、講和独立後の昭和二十八年(一九五三)四月設立されたのが「神宮奉賛会」であり、同四十年に「伊勢神宮崇敬会」と改称された。

その研修活動として神宮会館および全国支部での非常勤講師を、平成十年(一九九八)幡掛正浩

会長(前少宮司)から依頼され手伝ってきた。

※神宮評議員：正称「神宮」(通称「伊勢神宮」)は、元皇族を「祭主」として奉戴し、大宮司以下の職員により運営されている。その神宮を「本宗」と仰ぐ神社本庁の統理をはじめ、経済界や全国の神社界などに参与・理事・評議員を委嘱している。その評議員に加えられるに至っている。具体的な活動は何もできていないが、広報季刊誌『瑞垣』などを活用して、神宮の意義を内外の人々に伝えようと心がけている。

・11月31日(木)、秋の園遊会に妻同伴で招かれる。

※秋の園遊会：春と秋の園遊会は、三権の関係者約千人と各界の功労者約千人が各省庁の推薦によって選ばれ、天皇陛下により招かれる。

そのどちらでもない私がお招きにあずかったのは、前年度から皇宮警察学校の学外非常勤講師(皇室文化史)を引き受けたからであろうか。

当日は快晴に恵まれ、午前中早目に会場の赤坂御苑へ参ったところ、高校・大学同期(大名会)の日比治男氏(岐阜県教育長)夫妻と出合い、一緒に苑内を散策した。まもなく天皇・皇后両陛下および成年皇族のお出ましを迎え、我々は池の端でご巡回を待っていた。

すると、全く意外なことながら、私の名札を御覧になられた天皇陛下が、立ち止まられて短い御言葉を賜わり、続いて皇后陛下も、拙著に関する御感想を述べられた。さらに皇太子殿下が、私の研究について親しくお尋ね下さったが、恐縮の余り、まともにお答えできなかった。

さらに、三笠宮家の寛仁親王(当日九州行啓)の長女彬子女王(20歳)が、私共の前で立ち止られ、妻が研究テーマとしてきた伊勢と賀茂の斎王に関心をもっていると言われて驚いた。

それから間もない12月24日、あのお元気な若々しいスポーツマンの高円宮憲仁親王が、心不全で突然薨去されたことに、悲痛な衝撃を覚えた。

・12月12日で満六十歳となり、この還暦を機に、第二論文集を刊行する。また國書逸文研究会編『國書・逸文の研究』を出版する。

※第二論文集を刊行：昭和六十年(一九八五)刊行の第一論文集『平安朝儀式書成立史の研究』前後から十数年間に書いてきたものを補訂し第二論文集『宮廷儀式書成立史の再検討』として本年二月に、同じく国書刊行会から出した。

すると、親しい知友からこの出版と還暦の祝賀会を申し出られたが、それは辞退して、代りに國書逸文研究会の有志により論文集『國書・逸文の研究』を編纂することにし、十二月の誕生日までに完成した(自費出版、臨川書店で委託販売)。

それに付載した「自歴年譜」と「著作目録」の入力校正に尽力されたのは「三代御記研究会」の学友古藤真平氏(古代学協会研究員)である。

平成14年(二〇〇二) 61歳

- ・2月25日、菅公千百年忌に小論集『菅原道真の実像』を出版し、天神信仰の研究にも関心を深める。

※『菅原道真の実像』を出版：延喜三年(九〇三)

二月二十五日に大宰府で薨去された菅原道真公(59歳)の千百年忌を迎えた機会に、関係論考を集成した『菅原道真の実像』(臨川書店選書)を出版し、全国の主要な関係神社(約二五〇社)に献本させて頂いた。

これは当代の史料に基づき実像を解明したものであるが、さらに「天満天神」として広汎に信仰されたことの真相も検討する必要があると考え、この前後に数篇の論考を発表した。四月には大阪の文楽劇場で「菅原伝授手習鑑」も観た。

- ・8月18・19日、NHK「ラジオ深夜便」で「ソロモンへの想い」放送される。

ただ、半年余り経つと、一般読者に興味をもたれるようなネタが少くなり、青息吐息で年を越した。しかも、藤原委員から好評なので、さらに一年続けてほしいと言われ、結局同十六年三月まで九十六回分掲載された。それに他誌の拙稿を加えて、十二月にモラロジー研究所から『あの道この径一〇〇話』と題して出版し、自宅療養中の母に米寿祝として贈ることができた。

平成16年(二〇〇四) 63歳

- ・1月19日から一週間、南洋のソロモン諸島を再訪。また2月19日から三日間、沖縄本島南部の遺骨収集ボランティアに参加する。

※ソロモン諸島を再訪：前述のごとく私は昭和四十

七年(一九七二)七月、初めて個人的に父の戦地を訪ねた。それから三十一年後の昨年八月、広島護国神社へ出講の際、厚生省からの委託事業として、日本遺族会の世話により、遺児であれば関係

※ラジオ深夜便：平成の初めに始まり、深夜の一時

から五時まで放送されている、当番組は、高齢者に受聴者が多く、私も母に勧められて時々聴いていた。その担当者U氏が岐阜の拙宅へ来て録音された「ソロモンへの想い」が二晩に分けて放送されると、全国の数十人から感動の反響があった。

平成15年(二〇〇三) 62歳

- ・昨年四月から「産経新聞」(西日本版)夕刊に毎週(火曜)随筆「あの道この径」を連載する。

※随筆「あの道この径」を連載：産経新聞大阪本社
の藤原義則編集委員から「昨年春休み、同社企画の「新日本学講座」への出講を要請され、「マツリ文化の再発見」について話した(同紙7月4日朝刊に要旨掲載)。

その機会に、来春から一年間、夕刊の文化欄に毎週随筆の寄稿を依頼され、毎回一〇〇〇字余り位なら何とか書けると思い、引き受けた。

戦地へ慰霊友好訪問団に参加できると聞いた。

そこで、岐阜県遺族会を通じて申し込み、全国各地の五十名近い遺児と共に、ソロモン諸島を再訪した。今回は、ガダルカナルのホニアラまで全員一緒に行き、そこから三つの班に分かれ、C班の私共はセスナ機でムンダへ飛び、モーターボートでコロンバラ島へ渡った。

そのムンダで父の遺品・遺骨の見つかった台地は「トコロ・ヒル」と呼ばれ、マロニー・ベア氏(64歳)が墓標を守り続けていることに感服した。

※沖縄本島南部の遺骨収集：伊勢の青々塾で寝食を共にした坂本大生氏(修養団社会教育部長)が、昭和六十一年(一九八六)から有志と共に続けてきた「沖縄遺骨収集シルバー・ボランティア」に初めて参加し、南部(糸満市)の洞窟に入った。

すると、泥土の中からW夫人が掘り出した万年筆を受け取り擦ったところ「土井工」と刻まれていた。それが間もなく北海道赤平市出身の工兵であることまで判り、遺族に手渡されている。

その後も二度参加して、平成十九年（二〇〇七）から沖縄県護国神社の宮司を務めている伊藤陽夫氏や現地の方々などから多くのことを学んだ。

・4月から法学部・法学研究科の専任に戻り「日本法制史」の指導に励む。学外学生との交流もふえる。

※「日本法制史」の指導：前述のごとく昭和五十九年（一九八四）に法学部へ移って、「日本法制史」の講義、また翌六十年から学部生の三ゼミ、さらに翌六十一年度から法学研究科の特殊講義および論文指導を担当してきた。

それが十一年後の平成七年（一九九五）から九年間、日本文化研究所への移籍により大学院のみの兼任となっていた（一般教育の二科目は統講）。しかし、今春から元通りとなり、八年後（同二十四年三月）の定年退職まで続いた。その間に再び多くのゼミ生・大学院生と出会い、「日本法制史」の指導に励むことができた。

新皇室典範（法律）の施行以来六十年以上経つ間に、制度と実態の間で齟齬・矛盾が深刻になった。とりわけ皇太子・同妃殿下が、御結婚から八年後（平成十二年）に皇女敬宮愛子内親王を儲けられても、男子でなければ皇位を継承できない。また天皇・皇后両陛下を身近で支えて来られた紀宮清子内親王（昭和44年4月18日生れ）が、黒田慶樹氏（昭和40年生れ）と婚約されたことにより、皇族の身分を離れなければならないという事態に直面して、皇室典範の規定見直しが必要になった。

そこで、小泉純一郎首相（63歳）は内閣官房に「皇室典範改正準備室」を設けて、有識者会議を立ち上げた。座長は吉川弘之元東京大学総長、座長代理は園部逸夫元最高裁判所判事が務め、委員は緒方貞子国際協力機構理事長など八名から成り、一年余り十七回熱心に協議を重ねた。

その都度、会議の概要報告に付載された事務局作成の参考資料は、極めて良く調べられている。

※学外学生との交流：京都市内の大学間で単位互換を可能とする「大学コンソーシアム京都」に発足当初から協力して、産大へ来る市内十数校の学生を受け入れ、熱心な学生とランチゼミも続けた。その一人が岩田享氏（社会人学生、現在モラロジ―城陽事務所で奉仕活動）であり、研究職や教職などに進んだ人も少くない。

また京都駅隣のキャンパスプラザに毎週二コマ出講し、市内史蹟案内なども行った。
尚、日本文化研究所（井上満郎所長）が京都商工会議所の要請によって「京都検定一級合格者」の希望者を毎年十数名受け入れるようになり、その研究テーマにより指導を引き受けた。

平成17年（二〇〇五） 64歳

・6月8日、「皇室典範に関する有識者会議」のヒアリングで初めて管見を公述する。

※「皇室典範に関する有識者会議」：新憲法と共に

※ヒアリングで管見を公述：この有識者会議において「学識者からのヒアリング」が5月31日と6月4日に行われた。前者に四名、後者に四名招かれ、後者の一人として私も管見を述べた（その全容と資料は今も首相官邸ホームページに掲載）。

それらをふまえて11月24日答申された「報告書」は、当時の実状を克服する妥当な結論とみられる。この機会に、関係の拙稿を纏めて『皇位継承のあり方―女性・母系天皇は可能か―』（PHP新書）を出版した。

しかしながら、それを可能にするために必要な皇室典範改正案は、翌十八年二月、政府から国会へ出される直前、秋篠宮妃殿下ご懐妊の報により中止され、やがて九月六日、悠仁親王の御誕生により棚上げとなってしまった。

尚、その最中に、三笠宮家の長男寛仁親王殿下（49歳）が、皇位も宮家も男系男子による継承・相続の厳守論を、同人誌だけでなく一般誌にまで公表された。それを拝読して違和感を覚えた私は、

急いで管見をまとめて公表する前に、殿下の御諒解を求めるため拙稿を宮邸へ送った。

すると、殿下から議論したいから来邸するよう伝言があり、早速参上したところ、管見を聴いた上で堂々と反論され、お互いに理解できるけれども同調はできないことが判明した。

その帰り際に、どこでも呼ばれたら行くよ、といわれた。そこで、産大の関係者と慎重に協議して御来学賜わった。その特別講義では、父君**崇仁親王**殿下がオリエント学会名誉総裁として支援されるトルコのアナトリア遺跡（発掘団長は**大村幸弘**アナトリア考古学研究所長）の文明的意義と、自ら長らく尽力してこられた身体障害者スポーツの社会的意義を明快に話された。

・この頃から読売テレビの討論番組「たかじんそのまま」で言って委員会」に出演する。

※読売テレビの討論番組：大阪の読売テレビで平成

十五年（二〇〇三）からレギュラー番組となった「たかじんのそこまで言って委員会」に、皇室問題をテーマとする回などに出演を求められ、都合の付く限り協力した。

この番組で過激な論客たちと出会い、私には勉強になった。ただ、平成二十六年（二〇一四）に**家鋪隆仁氏**（64歳）が他界し、名司会の**辛坊治郎氏**も辞めたので、出演を遠慮することにした。

尚、この前後から、**安岡正篤氏**（明治三十一年（昭和五十八年）が戦後に結成された「全国師友協会」の教えを継ぐ「関西師友」の研修会への出講も多くなつた。また、その流れを汲む「神戸木鶏クラブ」（代表者**仁出川清一氏**）に依頼され、毎年正月、湊川神社で「講義始め」を続けてきたが、両方とも平成の終わりで辞退した。

平成18年（二〇〇六） 65歳

・4月から公益財団法人「国民会館」の理事に就任。また同志社大学に非常勤出講する。

※「国民会館」の理事：国民会館は大阪城の大手前に聳える住友生命ビル最上階に現存する。元来は

戦前の実業界・言論界などで活躍した**武藤山治氏**（岐阜県出身、慶応三年（昭和九年）が、昭和七年（一九三二）に設立した一般国民に正確な認識を広める「政治教育の殿堂」である。

ここで多彩な公開講座が、毎月すでに千回以上励行されてきた。そこに私も平成元年（一九八九）ころから十数回出講してきたが、さらに今春から**田中卓先生**（83歳）の後任として理事を引き受け、今に至っている。

その理事会では、現理事長の**武藤治太氏**（初代嫡孫）をはじめ、数名の理事から学ぶことが多い。**同志社大学に非常勤出講：竹居明男教授**の紹介により大学院文学研究科で「古代文化史」の特殊講義と史料講義を担当した（八年間）。

優秀な受講生が多く、その一人の**久禮巨雄氏**は、京都大学大学院の法学研究科へ進み、私の産大退

職後、一般教育の非常勤講師などを経て平成三十年から産大法学部准教授。また**坂田桂一氏**は、大宝元年（七〇一）から明治元年（一八六八）までの『公卿補任図解総覧』を作成したので、詳細な人名索引を加えて平成二十六年（二〇一四）勉強出版から刊行した。

・5月3日、時野谷滋博士の逝去により、「藝林会」の代表（会長）を引き継ぐ。

※時野谷滋博士の逝去：博士は平泉澄教授の東大における最後の門弟であり、私の恩師**稲川誠一先生**の親友でもあつて、文部省在職中（六年間）、主任教科書調査官として直接ご指導を賜った。

博士は、本務に誰よりも精励されながら、家永教科書裁判に国側証人としても尽力された（裁判は全て主任が引き受けるから、若い調査官は本務に専念せよ、との態度を貫かれた）。

※「藝林会」の編集長：博士は文部省を定年退職後、

関東学園大学教授・関東短大学長を務められ、さらに「藝林会」の代表（会長）を引き受け、編集長の私より熱心に内容の向上をはかられた。しかし、晩年に癌を患い亡くなられた（82歳）ので、その遺志を継いで代表を引き受け、編集長も兼ね平成三十一年〓令和元年（二〇一九）まで務めた（後任会長平泉隆房金沢工業大学教授）。その間に毎秋、学術研究大会と見学会を行うなど、学会と会誌の充実に努めてきた。

平成19年（二〇〇七） 66歳

・7月10日、母が満九十一歳寸前で「老衰」によって安らかに永眠する。

※母の永眠：母は平成三年（一九九一）に骨折で入院後、自宅で療養を続けてきたが、本年三月から自力で箸を持てなくなった。そのため、母の里に近い池田町の新生病院へ仮入院し、五月から隣接の特別養護老人ホーム「サン・ビレッジ」に入った

して「賢所御神楽の儀」の庭燎奉仕を手伝う。

※モラロジー研究所の講師：廣池千九郎博士により

大正15年〓昭和元年（一九二六）創立された道徳科学（モラロジー）の研究教育団体である。

この研究所との縁は、昭和五十二年（一九七七）、文部省の教科書調査官として、片桐一男氏の後任を、名古屋大学の先輩で当研究所の美和信夫氏（江戸幕政史研究者）に依頼してからである。それ以来、研修会の講演に招かれたり出版部で拙著を出してもらうなど、交流を深めてきた。

その創立者を偲ぶ「伝統の日」（本年六月）に出講した際、研究所内でも特別な人々しかできない奉仕活動に、自分も加えてもらいたいと思ひ、研究所の社会教育臨時講師を引き受けた。

※「賢所御神楽の儀」の庭燎奉仕：平安中期から、

宮中の賢所で祀られる天照大神に一年間の御加護を感謝して、十二月十五日夕方六時から深夜十二時まで、楽部の方々が御神楽を奉納する祭儀が行

たが、七月初めから著しく衰弱した。

そこで、妻が娘を小田原から呼び、その久代が手を握り見守るうちに眠ることく息を引きとった。私は授業のため早朝京都へ出かけたが、四時限に特別講義の宮崎哲弥客員教授を紹介し終えた直後、緊急連絡を受けて、携帯のテレビ電話で安らかな顔の母に別れを告げた。

母は療養中も短歌や俳句・川柳・替え歌などを詠んできた。それを拾い集め精選して、平成十六年（二〇〇四）『米寿雑詠抄―一人百首―』を編んだ。また、八月の五十日祭に家族で『母を偲ぶ』文集を作つて供えた（共に妻が清書）。

尚、母が私を受取人にかけていた生命保険金の全てを靖国神社へ奉納した。また父久雄の遺品（刻名の飯盒など）と、偶然入手した橋本景岳が獄中から母堂に送った絶筆書翰を遊就館へ寄贈した。

平成20年（二〇〇八） 67歳

・12月15日、モラロジー研究所の社会教育臨時講師と

われてきた。その六時間は、すべての灯を消し浄闇の中で続けられるため、楽人・舞人の出入りに庭燎を必要とする。

それを担当するのは掌典職の方々であるが、その傍らで手伝う奉仕は、戦後民間有志団体により行われてきた。その役割を平成に入ってからモラロジー研究所の有志が引き継いだのである。

その補佐奉仕者は、早くから特別講習を受け、前日に準備作業、奉仕の翌日にも片付けしたあと、吹上御所の玄關脇で両陛下から御言葉を賜る。

尚、このような庭燎奉仕補佐は、他の宮中祭祀（元旦四方拝や新嘗祭など）でも、他の民間有志団体により長らく誠実に行われている。

平成21年（二〇〇九） 68歳

・5月初め、共編の『皇室事典』が刊行される。

※『皇室事典』の刊行：新しい『皇室事典』を編纂したい夢は、文部省在職中、前述の美和信夫調査

官（麗澤大学教授）との間で生まれたが、平成二年（一九九〇）同氏の病歿により一たん消えた。

しかし、同十七年の皇室典範有識者会議ヒアリング直後、その夢を前述の高橋紘氏に話し、また元書陵部編修課長・正倉院事務所長の米田雄介氏に共編者を頼んだところ、幸い快諾された。

そこで、私が基本構想を練り、既刊本のような用語を五十音順に引くのではなく、大・中・小の内容項目に大多数の用語を盛り込んだ「読む事典」を作ることにした。また出版社は、『京都の三大祭』を出した角川書店（角川学芸出版）の宮山多可志氏に相談し引き受けてもらった。

その上で、高橋氏から小田部雄次氏（静岡福祉大学教授）、米田氏から西川誠氏（川村学園女子大学教授）、私から竹居明男氏（同志社大学教授）と五島邦治氏（現在京造形藝術大学教授）に編集委員を頼み、橋本富太郎氏に協力をえた。

尚、十年後（令和元年）初版を全面的に修訂改善した「令和版」も出すことができた。

臣に下賜して渙発された「教育に関する勅語」は、戦後被占領下の昭和二十三年（一九四八）、国会決議により公教育から排除された。

しかし、皇學館大学で助手三年目の昭和四十三年（一九六八）、田中卓教授の提案によって論文集の『教育勅語を仰ぐ』を新設の同大学出版部から出すことになり、その実務一切を手伝った。

また平成二年（一九九〇）「教育勅語」の渙発百年に、あらためて関係資料を調べ直した。そのうち、とくに大正三年（一九一四）東宮御学問所で杉浦重剛御用掛が皇太子裕仁親王（13歳）のために御進講された全容を、『倫理御進講草案』（初版昭和十年）付載分により読み感銘を受けた。

そこで、平成十二年（二〇〇〇）十月、それを『昭和天皇の学ばれた教育勅語』と題して、また白鳥庫吉御用掛の著『國史』も『昭和天皇の教科書 日本歴史（上・下）』と題し、共に勉誠出版から文庫版として出した。

すると、それを読まれた明治神宮崇敬会理事長

平成22年（二〇一〇） 69歳

・5月16日、京都産業大学で「賀茂齋王―千二百年の歴史と文学」シンポジウムを開催する。

※「賀茂齋王」シンポジウム：弘仁元年（八一〇）、賀茂齋王が創設され、嵯峨天皇の皇女有智子内親王を初代齋王に定められた。それから千二百年にちなみ、日本文化研究所の主催により研究発表と相互討論を行った（榎村寛之・後藤祥子・小林一彦・若松正志の四氏と私）。その際、十数年前から大学で収集してきた賀茂関係貴重資料も特別展示した。

・10月30日の「教育勅語」渙発から百三十年にちなみ「関係資料（抄）」を作成する。

※「教育勅語の関係資料（抄）」を作成：明治二十三年（一八九〇）十月三十日に明治天皇から文部大

（のち宮司）の中島精太郎氏から『教育勅語』の趣旨を思い切り判り易くした冊子を作ってほしいとの依頼を受け、同十五年三月、同会編で出したのが『たいせつなこと』（十二の徳目「たいせつなこと」）を日常的な会話文にして、イラスト入りの日英両文により表記したものである。

このような過程で収集した主要な資料を『教育勅語』関係資料（抄）と題して、本年十月に同崇敬会から出し、のち拙著『皇室に学ぶ徳育』（平成24年3月、モラロジー研究所）に付載した。

平成23年（二〇一一） 70歳

・3月11日（金）、「東日本大震災」に衝撃を受ける。

※「東日本大震災」：平成七年（一九九五）一月十七日朝の「阪神淡路大震災」では、京都産大の学生や職員および阪神在住の知友も多数被災された。

しかし、「東日本大震災」は、それより遥かに酷く、特に福島の原子力発電所爆発という不測の事

故による大惨害は、我々に深刻な反省を迫った。

ただ、今の私に出来ることは、せいぜい歴史の中から何かを学びとる位しかない。そう思っただけで知りえたことを、文章にして紙誌などに出すだけでなく、より早く広く発信する方法を考えたい。

その思いを形にした一つが、震災から二年後（定年退職の翌年）から従弟の橋本秀雄氏の協力をえて始めたホームページ「かんせいPLAZA」(Tokoroisao.jp)である。

なお、京都の府と市では昨年発足した「京都の未来を考える懇談会」で、政治経済中心の東京と文化観光中心の両方で首都機能を発揮する「双京構想」が具体的な課題となった。その矢先この大震災が発生し、万一に備えて東京の皇室関係者を京都で受け入れ可能か検討することになり、翌年以降今日まで、その実現に向けた会合や講座に協力してきた。

・12月、来年三月の定年退職に先立ち、同志社大学の

「報徳」思想である。

そのうち、推譲（他者を推し立て自身を譲り与えること）は容易に実践できなかったが、古希の機会に郷里の野中区と神明神社・菩提寺などへ若干の寄付をさせて頂いた。

また翌年三月に大学から退職金を頂いたので、その大半を京都産業大学とモラロジー研究所へ寄付した。すると、関係者が検討を重ねられ、前者では「日本文化研究」奨励のため、また後者では「皇室関係資料」収集に役立てられている。

尚、二宮尊徳（金次郎）に関しては、平成十四年（二〇〇二）八月、京都産業大学で開催された「国際二宮尊徳思想学会」（会長並松和久教授）の研究発表を行った。また、小田原市へ移住後、市内外のゆかりの史蹟を訪ねている。

さらに、「盛和塾」元代表世話人の島山兼一郎氏や有志たちと共に、新しい二宮金次郎像（再生プラスチック製）の創作普及を協議している。

文化史学会、および京都産業大学の日本文化研究所と法学部で公開の記念講演と講義を行う。

※退職記念の講演と講義：竹居明男教授の依頼によ

り、12月4日、同志社大学文化史学会で大会記念講演「年号文化の成立と展開」を行った。

また京都産業大学では、12月21日、日本文化研究所（宮川康子所長）と法学部（岩本誠一法学部長）の共催により、一般市民にも公開の最終記念講義を企画されたので、『元号法』の成立と『平成』の改元』について講述した。

・12月12日、満七十歳となり、地元で若干の寄付をする。

※若干の寄付：私は高校時代に内村鑑三著『代表的日本人』（岩波文庫）で知った二宮尊徳の生き方・考え方に感銘を覚えた。その要点は、至誠を尽くして勤勉に働き、分度を弁えて儉約に努め、余財を活用するため他者に譲る（勤・儉・譲）という

平成24年(二〇一二) 71歳

・3月末で京都産業大学を定年退職する。この機会に『歴史研究』連載の「古希随想」を出版する。

※京都産業大学を定年退職：昭和五十六年(40歳)春から通計三十一年間勤続した京都産業大学を、満七十歳で定年退職した。その際、『産大法学』で退職記念の特集号を出して下さり、また大学から「名誉教授」の称を授けられた。

※『歴史研究』：新人物往来社で月刊『歴史読本』編集長を長らく務めてきた吉成勇氏が、歴史愛好者のために会員制の月刊『歴史研究』の主幹を長らく続けてきた。ただ令和三年(二〇二二)五月、同氏(80歳)の他界により、同誌の編集も別の出版社へ移管されている。

※『古希随想―歴史と共に七十年―』：この吉成氏

子に従う」ことになったのである。

ここは、JR国府津駅の近くで、前に太平洋が広がり、後に富士山を仰ぐことのできる快適な住処であり、首都圏などへ出かけやすい。

※モラロジー研究所の教授：大学を定年後も可能な限り研究を続けたいと思っていたところ、数年前から親交を深めた橋本富太郎氏の勤めているモラロジー研究所の廣池幹堂理事長から招請され、専任の教授(研究主幹)として着任することになった(既に同二十一年度から研究所の客員教授として、講演会や研究会に出講していた)。

専任の間、毎週三日か四日、東海道線と常磐線を乗り継ぎ、南柏の研究所へ通った(往復四時間半余り)。併せて廣池学園の麗澤大学客員教授にも任じられ、全国各地への出講など多忙を極めた。

(令和二年度からは客員となって、原則出勤せず、研究会・会議にはオンラインで参加。)

また京都産業大学では、文化学部のリレー講義「京都の伝統文化」を担当し、日本文化研究所の客

とは昭和五十年代から親交を重ねてきた。その誼みで『歴史研究』に昨春から九回「古希随想」を連載し、それをまとめて略年譜などを加え、定年退職記念として自費出版し、お世話になってきた知友などに差し上げた。

・4月初めから小田原市に移住し、モラロジー研究所の教授に就任する。

※小田原市に移住：定年を機に郷里で晩年を暮らし、少しでも地元に戻りたいと考えていた。そのためにも、生まれ育ったふるさとに役立てばと思いい、『野中の歩みと社寺の営み』を纏め、隣家の若い草野靖彦氏に協力してもらい、全戸(七十五軒)に差し上げた。

しかし、自動車を運転できない私は、免許を返納する妻と共に、西濃の山里で生活していくことが難しい。そこで小田原市に住む娘夫婦の助言によって、二階建ての簡素な家を建てた。「老いては

員研究員として研究会に可能な限り参加してきた。さらに皇學館大学では、特別招聘教授に任じられ、不定期の企画に出講することを続けてきた。

・6月に論文集『皇室典範と女性宮家』を出版する。7月5日「皇室制度に関する有識者会議」に招かれヒアリングで管見を公述する。

※『皇室典範と女性宮家』を出版：平成十九年(二〇〇七)六月まで十年余り侍従長を務めた渡辺允氏は、その三年後に出版された『天皇家の執事』(文藝春秋)を、二年後の同二十三年(二〇一一)十二月、文春文庫として再販された。その後書き「皇室の将来を考える」の中で、次のように訴えておられることを知り驚いた。

「天皇陛下は、十年以上にわたって、この(皇位継承をめぐる)問題で深刻に悩み続けられました。……そのお悩みによって、陛下は夜お寝みになれないこともありまして。……現

在、それとは別の問題として、急いで検討しなければならぬ問題があります。内親王さまが結婚されても、新しい宮家を立てて皇室に残られることが可能になるように、皇室典範の手直しをする必要がある……これは一日も早く解決すべき話題ではないでしょうか」

これは当時まだ「宮内庁参与」（天皇陛下下の相談役）の渡辺允氏（75歳）が、天皇陛下（78歳）の御内意を汲んで代弁されたものと直感した。

それは私も十数年前から痛感していたことであるから、直ちに関係拙稿を集成して、『皇室典範と女性宮家』（勉誠出版）を刊行したのである。

※「皇室制度に関する有識者会議」のヒアリング：

当時の宮内庁長官羽毛田信吾氏（70歳）は、渡辺允参与と同様の意向を、同二十三年九月に首相となった野田佳彦氏（55歳）に伝えた。

すると野田首相も、これを「緊急の課題」と受けとめ、直ちに「皇室典範改正準備室」を再編成して「皇室制度に関する有識者会議」を立ち上げ

た。そこで七年前と同じく「学識者ヒアリング」が二月二十九日から六回行われ、最後の七月五日、私も管見を公述した（その全文は現在も官邸ホームページに掲載されている）。

平成25年（二〇一三） 72歳

・5月1日、出雲大社で六十年ぶりの「大遷宮」を奉拝する。また10月2日、伊勢神宮の第六十二回式年遷宮（内宮遷御の儀）を奉拝する。

※出雲大社の「大遷宮」を奉拝：出雲大社の本殿は、

記紀神話によれば、大和朝廷の宮殿に似せて造られたと伝えられる。この大社では、伊勢のような式年（一定の年数）と異なり、必要に応じて修理を加える遷宮が繰り返されてきた。それが今回、昭和二十八年（一九五三）から六十年ぶりの大修理による「大遷宮」として行われた。

その主要な実景などをモノクロ撮影して来られた著名な写真家増浦行仁氏の仲介により「大阪盛

和塾」（稲盛和夫東京セラ会長の教えを学ぶ会）代表の畠山兼一郎氏から勧められ、大遷宮祭を本殿の脇で奉拝させて頂いた。

しかも今年は、伊勢の神宮で二十年ごとの第六十二回式年遷宮が行われた。それに先立つ「お白石持」行事には、八月四日、モラロジー研究所の奉仕団グループとして、娘婿もその両親（柏市在住）も一緒に参加することができた。

なお、この機会に橋本富太郎氏などの協力をえて書き上げたのが『お伊勢さんの式年遷宮と廣池千九郎』（モラロジー研究所ブックレット）である。

そして十月二日の内宮遷御は、神宮評議員として奉拝させて頂いた。そこに「キーン・ドナルド」（鬼怒鳴門）先生（91歳）も来られ、「今回は日本人となつてから初めてのお詣り」と喜ばれていた。

・6月25日、青森県三沢の航空自衛隊基地で教養講演に出張途中、宮城県石巻市の大地震災遺蹟を訪ねる。

※一昨年の東日本大震災には何もできなかったが、せめて現地で実情の一端を知りたいと思い、東北モラロジアンに石巻市の大川小学校など数ヶ所を案内して頂き、いろいろ学ぶことができた。

平成26年（二〇一四） 73歳

・正月早々、編著『日本年号史大事典』を出版する。

※編著『日本年号史大事典』：かつて昭和五十二年（一九七七）『日本の年号』を出した時の雄山閣芳賀章内編集長から、いずれ総合的な年号（元号）の大事典を作ってほしいといわれていた。

そこで、五年前に『皇室事典』を共編した後、その編集実務を手伝った橋本富太郎氏と、京都の研究会で親交のあった久禮旦雄・五島邦治・吉野健一の三氏に分担執筆を頼み、予期以上に充実したものを仕上げる事ができた。

その後、今上陛下の高齡讓位が確定した平成三十年に『元号―年号を読み解く日本史―』（文春新

書）および「令和」改元直後に『元号読本』（創元社）も、久禮・吉野両氏との共著で出版した。

- ・ 6月早々、宮内庁編『昭和天皇実録』が完成して、8月21日、天皇・皇后両陛下に奉呈されたが、それまでに、その全容データを通覧し所感を述べる。

※宮内庁編『昭和天皇実録』：昭和天皇の御生涯（明治三十四年（一九〇一）～昭和六十四年（一九八九））を正確な史資料に基づく編年体の実録編纂は、平成二年（一九九〇）から宮内庁書陵部によって進められ、二十五年足らずで仕上げられた。

その全容は、六十一冊一万二千頁余にのぼるが、両陛下への奉呈に先立ち、報道準備のため、PDFとして各社内々に渡された。それを私も数社の宮内記者から送られ、二ヶ月少々で通読して、各社内の検討会に参加し所見を求められた。

これを機に不得意なパソコンだけでなく、タブレットも使い、情報検索などをしやすくなった。

章」として収録させて頂いた（その後、この歌稿メモは学習院大学の史料館に寄贈されている）。

- ・ 6月21日、富岡製糸場などを急いで見学する。

※明治五年（一八七二）開業の「富岡製糸場」と「絹産業遺産群」がユネスコの「世界文化遺産」に登録されたと聞き、直ちに現地へ向かって場内を見学し、駅で自転車を借り関係の数ヶ所も廻った。

- ・ 7月14日、京都産業大学において「後桜町天皇二百年記念シンポジウム」を開催する。

※後桜町天皇二百年記念シンポジウム：かねて同女帝の宸筆御記を解読してきた「日本文化研究所」の主催で「女帝の歴史と文学」についての研究報告と相互討論を実施した（宍戸忠男・橋本富太郎・藤本孝一・盛田帝子・飯塚ひろみおよび小林一彦・若松正志の七氏と私）。

※『昭和天皇の大御歌』を出版：この『実録』所収の御製（和歌）を関係記事と共に抄出して、月刊の『歴史研究』に連載した。

その連載を終えて、平成三十年（二〇一八）早々、月刊誌『短歌』などを出している角川書店の編集者に相談したところ、快く引き受けられたので、翌年の御代替りまでに完成の準備をしていた。

すると不思議なことに、同三十年秋すぎ、朝日新聞社の宮内記者Nさんが、「昭和天皇ご自筆の歌稿メモらしいものを、長らく近侍された方（内舎人M氏）から託されたので、調査解読に協力してほしい」と頼まれ、年末までそれに没頭した。

その内容は、昭和六十年（85歳）十月から同六十二年八月までの御歌下書きであり、既発表の御歌八七二首中に未収の二二八首も含まれることを確認した。その注目すべき部分は朝日新聞のスクープとして元日一面と七日特集に紹介された。

しかも、その全歌稿を世に出す必要があると考えて、進行中の編著『昭和天皇の大御歌』に「補

尚、そこへ来聴された宮内庁書陵部編修課長の詫間直樹氏を介して、数年前から後桜町天皇の詳細な年譜を作成していた妻の京子に、十二月二十四日の二百年式年祭に先立ち、女性の研究者として、女帝の御事績を、天皇皇后両陛下と皇太子同妃両殿下に御進講するよう御依頼を承った。

そこで、吹上の御所で名譽な大役を果たせるよう、半年近く有志の協力もえて準備に努めた。

- ・ 10月下旬、「大切なことを学ぶ会」の向井征会長に勧められ、初めて済州島を歴訪する。

※「大切なことを学ぶ会」：和歌山（紀の川市）の向井征氏（昭和12年～平成29年）の有志勉強会。同氏は、日本学協会の主催で行われてきた五月の楠公祭（大阪の住吉大社）および十一月の崎門祭（京都の八坂神社）に数年前から家族づれで参列されるのみならず、地元でも有志の月例勉強会を励行してこられた。

その会の名付け親として、年次総会で一般公開の講演会への出講を求められ、同氏が癌により急逝されるまで参上した。

※**済州島を歴訪**：向井氏は若いころ日本青年会議所やロータリークラブなどで積極的な活動を始め、日韓友好にも努めてこられた。とくに済州島の外国人名誉市民第一号に選ばれており、今秋同島を親善訪問する際に同行するよう強く勧められた。私の役目は十月二十一日、済州スカウト会館で日本文化について基調講演することであったが、その前後に同島文化財委員などの案内で「三賢殿」「三姓穴」や道立済州高校と国立済州大学校をはじめ、主要な観光地を案内して頂いた。

平成27年（二〇一五） 74歳

・8月上旬、熊本菊池神社などを歴訪する。

※**菊池神社など**：熊本県モラロジー協議会主催の教育者講演会に出講前後、妻（旧姓菊池）と共に、

そこで、これも取り入れながら、松陰から妹達（特に千代）あての書翰を判り易くし、萩の松陰神社（上田俊成宮司）や吉田基子さん（庫三氏孫）などより提供して頂いた貴重な直筆などを入れて、勉強出版から刊行した。

・10月5日、賀茂別雷神社で式年遷御の儀をインターネット中継する企画を手伝う。

※**賀茂別雷神社の式年遷御**：洛北の「神山」に降臨されたという「賀茂別雷大神」を祀る上賀茂神社では、その祖神「賀茂御祖大神」を祀る下鴨神社と共に、本来「二十一年」ごとであった遷宮を、中世から数十年ごとに行ってきた。

それが昭和四十八年（一九七三）から本来の式年に復元され、平成六年（一九九四）に続き、本年（二〇一五）第四十二回正遷宮が行われた。

その遷御の儀は、伊勢や出雲などと同じく淨間の夜分に斎行され、特別に招かれた人々しか奉拝

まず**菊池武時**を祀る菊池神社、ついで加藤清正を祀る加藤神社、さらに翌日、萩市立博物館と松陰神社の至誠館および松陰の生家などを訪ねた。

・8月末日、NHKテレビ大河ドラマ『花燃ゆ』にちなみ、編著『松陰から妹達への遺訓』を出版する。

※『**松陰から妹達への遺訓**』を出版：ドラマ『花燃ゆ』（脚本大島里美さんなど女性四名）は、吉田松陰の妹（文、演者井上真央さん）をヒロインとして幕末維新の家族関係を描き出した。

かねて松陰とその家族に関心のあった私は、この機会に松陰の全集を読み直した。松陰には兄と弟および三人の妹があり、齢の近い兄の**杉梅太郎**と長妹の**千代**にあてた手紙が多い。その千代の長男**庫三氏**（慶応三年（一八六七）〜大正十一年（一九二二））が、のちに吉田家を継ぎ、松陰五十年祭の明治四十二年（一九〇九）、遺稿『松陰先生女訓』などを編刊している。

できない。しかし今回は、神社の格別な配慮により「平成プロジェクト」の企画でインターネット中継されることになり、その解説を頼まれた。

とはいえ、厳粛な神事であるから、言葉を慎み声を抑えて、司会のWさんからの問いに答える形で三時間の本番を務めた（その要約が翌日KBS京都で放映されている）。

平成28年（二〇一六） 75歳

・4月下旬・5月上旬、阿波（徳島県）と土佐（高知県）の土御門天皇遺跡を歴訪。

※**土御門上皇遺蹟歴訪**：承久の変に敗れて、後鳥羽上皇が流された隠岐は平成元年、また順徳上皇が流された佐渡には平成3年に遺蹟を歴訪した。

さらに今年、政変に直接関与されなくても父帝と弟君に心を寄せた**土御門上皇**が遷られた土佐と阿波の遺蹟を歴訪することができた。共にモラロジー研究所の研修会に出講するため、四月二十三

日前後に徳島へ、また五月八日前後、高知へ参上し、関係者に詳しく案内して頂いた。

- ・ 9月10日から洛南において「近世京都の宮廷文化」展覧会を開催する。

※「近世京都の宮廷文化」展覧会：昨年は大正四年（一九一五）の大札から満百年の節目をとらえて、それが東京でなく京都で行われた意義を広く多くの人々に再認識してもらうため、その記念展覧会を考え、京都の有志に相談した。

すると、平成二年（一九九〇）の即位礼NHK特番で解説と一緒に手伝った井筒與兵衛氏の後継当主が、全面的に協力を約束され、「井筒企画」の山本信之社長と協議して構想を具体化した。

すなわち、計画を三期（三年）に分けて、まず本年の九月・十月に洛南の京セラ美術館と城南宮（鳥羽重宏宮司）の斎館を会場にして「近世京都の宮廷文化」展覧会を開き、光雲寺（田中寛洲禅師）

の東福門院像や伝統文化保存協会（今井賢参与）・NPO法人「都草」（坂本孝志代表）などの特別な協力もえた。

ついで来年の九月から翌年一月まで、東京の明治神宮文化館を会場にして「近代御大札と宮廷文化」展覧会を催す。さらに再来年の八月と九月には、洛東の細見美術館と京都市美術館別館（もと大正饗宴場）の両会場で「京都の御大札」特別展覧会を開催することになったのである。

この三年間に多くの方々から様々の協力をえて、大札の持つ文化的な意義を学ぶことができた。

- ・ 8月8日、天皇陛下（83歳）が「讓位」の意向を表明される。それに応じて政府の設けた有識者会議の第一次ヒアリング（11月7日）で管見を公述する。

※天皇陛下が「讓位」の意向を表明：今上陛下は既に平成二十四年（二〇一二）七月の宮内庁参与会議において、翌年十二月の満八十歳ごろまでに

「讓位」したい意向と理由を示されたという。

しかし、それに政府が耳を傾けないまま四年も推移したところ、本年八月八日、陛下（83歳）みずから「象徴天皇のお務め」についてのご説明とそれを切れ目なく若い世代に受け継いでほしい、というご意向を穩かに表明された。

当日、それをNHKの特別番組に出て拝聴し、共鳴の所感を述べた。すると、直後にベスト新書の編集者から「象徴天皇 “高齡讓位”の真相」について執筆を頼まれ、大急ぎで書き上げた。

さらに、ご意向に応じて政府の設けた「天皇の公務負担軽減等（実は「退位」の是非）に関する有識者会議」が設けられた（座長今井敬経団連名誉会長、座長代理御厨貴東大名誉教授、他に委員四名）。そこで四回開かれた「学識者ヒアリング」の第一次分（11月7日）に招かれ管見を述べた。

- ・ 11月中旬、九州出講について対馬を歴訪する。

※対馬歴訪：11日、福岡モラロジ―女性クラブで「吉田松陰の家庭教育論」について講演の後、12日から数日、対馬を訪ねた。対馬藩主子孫の宗中正氏（モラロジ―研究所教授）が毎年この時期に営まれる小茂田浜神社（蒙古襲来で戦死した守護代宗助国などを祀る）の慰霊祭に列席されると聞き、随行させて頂いたのである。

その前後に郷土史に詳しい方々の案内で、宗家の菩提寺万松院をはじめ対馬市歴史民俗資料館、住吉ツツノオ大神ゆかりの豆まめ殿の天道法師墓塔、豊玉町の和多都美神社岩倉、上対馬町の日露戦争ロシア将兵慰霊碑から和珥津（神功皇后出航伝承地）などを巡ることができた。

- ・ 12月11日～14日、三度目の皇居勤勞奉仕に参加する。

※三度目の皇居勤勞奉仕：三泊四日の皇居勤勞奉仕には、満七十五歳までしか申し込めない。そこで大阪・京都などの有志六十名（団長辻田光司氏・

副団長野崎真夫氏）奉仕団「日本文化に学ぶ会」の顧問を依頼されて参加し、幸い天皇・皇后両陛下と皇太子殿下から御会釈を賜わり、思いがけない御言葉を賜って恐縮した。

平成29年（二〇一七） 76歳

・年の初めから、二百年前に譲位された光格天皇関係の絵図集成を作るための準備に取り組む。

※光格天皇関係の絵図集成を作る：今上陛下が数年前から調べられたと伝えられている光格天皇が、文化十四年（一一八一七）数え四十七歳で譲位された時の『桜町殿行幸図』（彩色）を、国立公文書館公開のデジタルアーカイブで知った。

そこで、光格天皇の元服から上皇としての修学院御幸に至る多彩な絵図と主要な宸筆を精査し、各々に解説を加えて出版する準備を始めた。それには橋本富太郎・久禮且雄・吉野健一・後藤真生の四氏らの協力をえた。しかし相当に手間取り、

A4判三九〇頁の大冊を国書刊行会から出せたのは、令和二年三月である（全額自費負担）。

平成30年（二〇一八） 77歳

・2月中旬、大正天皇の大嘗祭ゆかりの香川県綾川町と徳島県美馬市を訪ねる。

※香川県綾川町：大正四年（一九一五）の大嘗祭には、悠紀地方として愛知県岡崎市六ツ美地区、主基地方として香川県綾歌郡綾川地区が選ばれた。その遺蹟が大切に保存され資料館も作られている。

そこで、前者は平成二十七年六月「お田植祭」を見学し、このたび「建国記念の日」奉祝大会に出講の後、後者の遺蹟と資料館を見学して、両方とも関係者の御努力に感服した。

※徳島県美馬市：ついで二月十二日、徳島県美馬市出身の日本画家藤島博文氏の依頼により、同市の「NPO法人あらたえ」主催の会で「阿波忌部の荒妙貢進」について講演した後、阿波忌部の後裔で

大正大嘗祭に荒妙貢進を数百年ぶりに復活された阿波忌部の当主三木信夫氏（木屋平貢）を訪ね、貴重な御話を承り史資料を見せて頂いた。

・6月28日、大覚寺の研修会で「弘仁戊戌御写経」について講述する。

※「弘仁戊戌御写経」：嵯峨天皇が譲位後に離宮とされた後の大覚寺には、弘仁九年戊戌（八一八）に書写された宸筆「般若心経」が「心経殿」に宝蔵され、六十年ごとに特別開封されてきた。

それが満千二百年目の今年十月一日から公開された。

それに先立ち、大覚寺奉賛関係者の研修会が開かれ、「嵯峨天皇『弘仁戊戌御写経』の歴史的意義」について講述した。

十一月二十一日、その古写経の特別開封を拝観し、宝物館で後奈良天皇から光格天皇に至る五方の宸筆「般若心経」も拝観することができた。

・9月『近代大札関係の基本史料集成』を、また12月『五箇条の御誓文』関係資料集成』を出版する。

※『近代大札関係の基本史料集成』：来年の御代替りに先立ち、明治・大正・昭和の大札（御即位・大嘗祭・大饗および改元など）に関する基本的な史料（平成の初めころから翻刻・解説してきたものが多い）を集成して、国書刊行会から出版した（A5判六八二頁）。

※『五箇条の御誓文』関係資料集成』：今年は慶応四年（明治元年（一一八六八）三月十四日に「五箇条の御誓文」が出されてから満百五十年にあたる。そこで、これまで発掘し紹介してきた関係資料を集成して写真も多数加え、原書房の「明治百年史叢書」の一冊として出版した（A5判二五二頁）。本書の原稿入力には、後藤真生氏（京都産業大学卒、モラロジー研究所研究助手）の協力をえた。

・8月上旬、娘夫妻の車で福島などを訪ねる。

※福島歴訪：娘夫妻の発案により車で一泊二日の旅をした。まず妻の先祖の出身地である福島県棚倉町の蓮家寺（江戸初期に蓮池主水と糟家弥兵衛が創建）で小法要と墓参、ついで磐梯山の麓に泊り、翌朝「野口英世記念館」などを見学。さらに娘婿の千葉にある生家の菩提寺に詣ることもできた。しかも、娘と婿は、私の生家（野中）にも毎年お盆参りなどを続けてくれている。

・10月12日、高崎市の「上野三碑」を見学する。

※群馬県神社関係者大会に出講の際、県教委に勤めていた神保侑史氏（皇大出身）の案内で、昨年ユネスコの「世界記憶遺産」に登録された「上野三碑」（山上碑・金井沢碑・多胡碑）を駆け巡った。

・12月1日、京都の岡崎神社で「三善清行千百年祭」

と記念講演を行い、その境内に記念碑を建て、また『三善清行の遺文集成』を出版する。

※「三善清行千百年祭」：延喜十八年（九一八）の十二月七日、七十二歳で薨去した参議三善清行の千百年祭と記念講演を、清行の邸趾と伝えられる平安神宮に近い岡崎神社で行った。またこの境内に「三善清行卿邸趾」の石碑を寄進した。さらに現存する清行の全遺文を書き下し文にした『三善清行の遺文集成』（全文野木邦夫氏入力、A5判二二四頁）を方丈堂出版から刊行した。

平成31年Ⅱ令和元年（二〇一九） 78歳

・4月1日、新元号「令和」が政令で公布され、また4月30日、平成の天皇陛下が「退位の礼正殿の儀」に臨まれる。さらに5月1日、令和の新天皇陛下が「剣璽等承継の儀」を行われる。その際、各々のテレビ特番解説を手伝い、新聞社等の取材に応ずる。

※「令和」改元：昭和五十四年（一九七九）制定の「元号法」に基づき、「元号は政令により定める」ため、政府（安倍晋三首相）は、早くから新元号

文字の考案を碩学数名に委嘱し、各人提出案の中から「令和」が選ばれた。

その出典は、「平成」までのような漢籍でなく、初めて国書の『万葉集』が用いられ、考案者は万葉学者の中西進博士（90歳）とみなされている。

ただ、典拠の章句は、大宰帥大伴旅人の催す梅花を賞する宴で参会者たちの詠んだ和歌集に加えた漢文序から「令」と「和」の文字を採り組み合わせたものであり、「令（凜）」とし美しく和か（平穏）な「新時代への理想を表現したものと考えられる。

この元号は「皇位の継承があった場合に限り改める」と「元号法」に定められている。そこで、新元号は「平成」と同じく公布後直ちに施行すべきところ、今回は移行（書き換え）準備を考慮して、一ヶ月前の四月一日に公布し（平成の天皇が政令に署名）、五月一日から施行となった。

しかし、新元号は新天皇が政令に署名されてから公布し即日に行うことが望ましいと思われる。

※「退位の礼正殿の儀」：平成二十九年（二〇一七）制定の特例法に基づいて「高齢」を理由とする「退位」（譲位）が可能となり、それを実施する際「即位の礼」に対応する「退位の礼」が四月三十日午後五時に宮殿の正殿で簡素に行われた。

この新例が将来の先例となるかもしれない。とすれば、もう少し盛大な形を考え、また退位（譲位）される天皇に一般国民も感謝できる場（パレードなど）を設けてほしい、と考えている。

※「剣璽等承継の儀」：戦後の「皇室典範」には「踐祚」（宝祚を踐むⅡ皇位に即く）の語がなく、「即位の礼を行う」として記されていない。そのため、前回と同じく今回も、旧「登極令」の「踐祚の儀」を「剣璽等承継の儀」と名づけて新天皇の国事行為とされた。

これは今なお「三種の神器」と称されるうちの「剣」と「璽」を「皇室経済法」に定める「皇位と

共に伝わるべき由緒ある物」（神器ではない）として、公印の「天皇御璽」「大日本国璽」と共に、新天皇への承継儀式として行われたのである。

※改元・讓位・踐祚の際にテレビの特番解説：一年程前からNHKと民放数社から、御代替り関係の特別番組に出演を求められた。しかし、一人では対処しえないため、数年前から一緒に仕事をしてきた京都産業大准教授久禮旦雄氏に協力を求め、先方で二人の日程を調整してもらった。

その結果、まず改元については、三月三十一日、テレビ朝日「日曜スクープ」で「歴史から紐解く元号の変遷」、四月一日の改元特別報道番組は、午前中NHK、午後から夕方まで日本テレビ、夜のニュースZERO、翌二日夜のNHK「クローズアップ現代」などの解説を担当した。

ついで四月三十日の退位・讓位の儀は、日本テレビなど三局、さらに五月一日の踐祚の儀は、午前中NHK、午後から夕方まで日本テレビなどの解説を手伝った。その合間に、国内外の新聞社・

通信社などの電話取材に可能な限り対応した。

尚、今年も九月二十二日、郷里で三十八年前から続けてきた「広木忠信を学ぶ会」を開いた。その際に、平成二十七年（二〇一五）十月十一日、岐阜県揖斐川町谷汲で「全国育樹祭」が行われた時、皇太子殿下がお立ち寄り賜った「揖斐川歴史民俗資料館」の前庭に「今上陛下御大札記念」の石碑（御影石高さ2 m余、地元の書家坪井進氏揮毫）を寄進させて頂いた。

・9月21日、明治神宮の参集殿において「近現代のユキ・スキゆかりサミット」を開催する。

※「ユキ・スキゆかりサミット」を開催：十一月の「令和大嘗祭」に先立ち、五月初め、「亀卜」により悠紀地方（東日本代表）は栃木県高根沢町、主基地方（西日本代表）は京都府南丹市が選ばれた。その来歴を再認識するため、明治／大正／昭和／平成四代の悠紀地方（山梨県の甲府市／愛知県の

岡崎市／滋賀県の野洲市／秋田県の五城目町）と、

主基地方（千葉県の鴨川市／香川県の綾川町／福岡県の福岡市／大分県の玖珠町）ゆかりの人々に集まって頂き、明治神宮の神宮会館でシンポジウムとアトラクション（お田植踊と創作バレエ）を開催することができた。

・10月初めに上皇職を介して、上皇后陛下の「英訳詩歌」収録の御高著と御言葉集を賜る。

※上皇后陛下の御高著：上皇后陛下（85歳）は、一月に御自身の御歌と永瀬清子さんなどの詩歌（合計三十五首）の見事な英詩朗読（CD）を収めた宮内庁侍従職監修『降りつむ』を毎日新聞出版から刊行された。また三月に平成十七年刊行された宮内庁侍従職『皇后陛下のお言葉集 あゆみ』の「改訂増補版」を、同じ海竜社から出版された。その二冊を思いがけないことながら十月一日に上皇職を通じて御恵贈賜った。まことにありがたく無

上の光栄と申すほかない。

・10月22日昼、「即位礼正殿の儀」が挙行される。また11月14日夜半、「大嘗祭大嘗宮の儀」が齋行される。その際にテレビ特番の解説を手伝う。

※「即位礼正殿の儀」と「大嘗祭大嘗宮の儀」：新天皇陛下（59歳）の即位礼は十月二十二日、正午ころ「正殿の儀」、午後には「朝見の儀」、夜分にも「饗宴」が、各々に執り行われた。

朝から雨天のため、正殿の前庭に並び立つ奉仕者らの晴姿は見られなかった。しかし天皇・皇后両陛下が高御座・御帳台に登られる正午ころ、急に雨が止み上空に虹が懸り、「即位のおことば」が一段とおごそかに感じられた。

ついで、前回（平成二年）より間隔を空けて十一月十四日の夜半、皇居東御苑の大嘗宮において、「悠紀殿の儀」と「主基殿の儀」が執り行われた。これを今回は、NHKも民放も特別番組で採り

上げ、大嘗宮に入御し出御される御様子を鮮明に写し出したが、それを批判するような声が殆ど出なかったことは、世相の大きな変化といえよう。

この御即位と大嘗祭のテレビ特番には、四月・五月と対応を逆にして、私が民放（主に日本テレビ）を優先し、久禮旦雄氏がNHKと民放教社をカバーしてくれた。

また、京都産大の日本文化研究所やモラロジール研究所の「皇室関係資料文庫」研究会において一緒に学んだ若い研究者数名も、陰に陽に活躍できる機会に恵まれたことは、将来のために心強い。

・11月23日、「日本学基金」から第七回「日本学賞」を授与される。

※日本学基金の「日本学賞」：一般財団法人「日本学基金」は、平成二十五年（二〇一三）十一月に文化勲章を受章された中西進博士を理事長として「日本学の各分野における、選考時点での最高の業

績を顕彰」する目的で設立されて、同年から毎年一回に「日本学賞」を授与してきた。

私はその存在自体を知らなかった。しかし、選考委員の磯田道史国際日本文化研究センター准教授が、拙著『平安朝儀式書成立史の研究』（昭和六十年）から編著『近代大札関係の基本史料集成』（平成三十年）まで御覧になり、「日本の伝統的な儀式制度に関する深甚な研究」成果として推挙された由、11月23日の授賞式で説明を受けた。

その授賞式は、神田の学士会館において行われ、「令和」元号の考案者といわれる中西進理事長から、表彰状と過分な副賞を授与された。

尚、五年前（平成二十六年十一月）京都新聞社大賞の「教育功労賞」を授与されたこともありがたいが、長年の研究成果を「日本学」として評価されたことは、何より嬉しい。

令和2年（二〇二〇） 79歳

・年初から妻のリハビリ・サポーターを務めながら、

『未刊論考デジタル集成』の準備を始める。

※妻のリハビリ・サポーター：一昨年（平成三十一年）の四月四日「金婚式」を楽しみにしていた矢先、一月七日の朝食後、妻が左脳梗塞を発症して緊急入院、しかも加療中に大腸癌の手術をしてストーマを付けることになった。

それでも四月・五月の改元・讓位・踐祚や十月・十一月の即位礼・大嘗祭などは、娘夫妻などの協力をえて何とか乗り切ることができた。

しかし、娘夫妻には各々仕事があり、孫姉妹の就職・進学とも重なる時期であったから、まもなく退院した妻のことは、できるだけ私自身がサポートしたいと考え、今年に入ってから昼も夜も一緒にいることにした。

そんな折に昨年の二月から新型コロナウイルスの感染が日本国内でも広がり始め、三月から否応なく在宅自粛するほかなくなった。

※『未刊論考デジタル集成』の計画：しかも、モラ

ロジール研究所は昨年四月から客員教授となったので、研究会以外出勤自由の身分である。

そこで、毎日さまざまな家事をこなす合間に、学生時代から最近まで書いてきた論考で既刊拙著に未収の雑稿を寄せ集め、『未刊論考デジタル集成』として後世に残す計画を立てた。

もちろん、この編集計画は自分一人の手に負えないので、研究所の「伝統文化研究室」で一緒に仕事をしてきた麗澤大学准教授の橋本富太郎氏と京都産業大学准教授の久禮旦雄氏を中心にして、数名の学友（清水潔皇學館大学名誉教授・野口剛帝京大学教授・吉野健一宮廷文化研究所研究員・堀井純二日本文化大学名誉教授・橋本秀雄汗青会幹事・川田敬一金沢工業大学教授・川北靖之京都産業大学名誉教授および野木邦夫日本学協会研究員）に協力を求め、研究助手の後藤真生氏（今春まで）に編集実務を担当してもらった。

そのおかげで、約一年かけて全十七冊のうち第一期三冊分を準備しえた。今後も半年ごとの配本

とするため、刊行開始は来年十二月とした。

- ・5月10日、随筆集『日本学ひろば88話』を出版する。

※『日本学ひろば88話』の出版：前述のごとく、私は平成二十五年（二〇一三）春からホームページ「かんせいPLAZA」を開設し、「日本学広場」という欄に随想雑感を載せてきた。

すると、それを視たコミニケ出版『月刊朝礼』の編集者が、翌二十六年四月から同誌（A5判）で二ページの連載を依頼して来られた。しかも、それより五年後の今年三月で六〇回となる機会に、単行本化を勧められた。

そこで、同誌に未載の「かんせいPLAZA」拙稿と、歴史研究会の月刊『歴史研究』に吉成勇主幹より求められて、同三十年（二〇一六）四月から連載を始めた「巻頭随想」などを寄せ集め、全体に少し手を加えたのが『日本学ひろば88話』（コミニケ出版、編集担当橋本直樹氏）である。

これは同二十四年（二〇一二）刊『古希随想』

に続く数えの傘寿随想である。それに敢て八十八話を収めたのは、米寿を目指す願いによる。

その表紙デザインに、葛飾北斎の秀作「富嶽三十六景」（天保五年（一八三四）75歳に版行）中、もつとも著名な「神奈川沖浪裏」を用いた。これは木更津の沖合から小田原方面に富士山を望み描いたものとみられている。大浪に木船が揉まれてもたじろがない人々の力強さと、晩年まで創作し続けた北斎の生きざまに勇気づけられる。

令和3年（二〇二一） 80歳

- ・2月中旬、大垣北高関東同窓会の企画で、在校生のために様々な録画データを作り、母校に寄贈する。

※大垣北高関東同窓会：母校の岐阜県立大垣北高校には、関東支部同窓会がある。その年次総会・懇親会もコロナ禍により開けなくなった昨年、大石アケミ支部会長（一年先輩）に提案して、母校の

在校生たちが視聴可能なビデオを贈ることにした。そのパイロット版を各界で活躍中の同窓有志に作ってもらい、その一つとして私も「内村鑑三の『代表的日本人』に学ぶ」と題する拙話を録画した。

その背景は、文部科学省が令和元年末に公表した「GIGA（Global and Innovation Gateway for AI）スクール構想」により、同三年度から全国の小・中学校で全生徒がパソコンやタブレットを活用できるようにするという。

しかも、それに先立って、同二年度から岐阜県教育委員会のスーパードグローバルハイスクールに選ばれた大垣北高校で構想実施に取り組み始めたことを知り、それに卒業生として僅かでも役立てばと思いついたからである。

- ・3月11日、大垣北校の在校生に対して「北高で学びえたこと」と題するオンライン対話を行う。

※オンライン対話：昨年は昭和三十五年（一九六〇）

三月北高卒業後六十年の節目にて、母校に若干の寄付をしたところ、増田俊彦校長のもとで検討を重ねられ、生徒たちの自由なグループワークに役立つ多目的教室と地歴科教室を創られた。

しかも、その名称を生徒に公募して「commons」と決められ、その贈呈式と在校生への講話を企画された。それはコロナ禍のため、オンラインで行われることになったが、あえて東日本大震災満十年当日の三月十一日、ライブ実施され、生徒たちと質疑応答することもできた。

- ・3月21日、名古屋大学同窓会の依頼により、ウェビナー講演を行う。

※名古屋大学同窓会：母校の名古屋大学にも関東支部同窓会がある（同期世話人は大野馳君など）。その年次総会と懇親会が神田の学士会館で行われる。そこに一昨年初めて出た際、松尾清一総長から、来年度より名大と岐阜大学の連携による「東海国

立大学機構」を発足させるので、名大を支援する基金の充実に協力してほしいとの御話を承った。

そこで、昨年四月、これまた名大入学六十周年節目にちなみ、若干の寄付をした。私は六十年前に北高から名大へ進みえたからこそ今の自分がある、という思いが強く、この機会に少しでも恩返しをしたいと考えたからである。

※ウェブナー (Web Seminar) 講演会：昨春以来、社会的にはコロナ禍自粛のため、個人的には妻をサポートするため、ほとんどの講演依頼を断った。ただ、モラロジ研究所の定例会議と研究発表などはオンラインで参加が出来るようになった。

そこで、九月の揖斐川町民会館における「広木忠信に学ぶ会」も、十二月の岐阜県文化財保護協会記念講演「日本書紀から美濃古代史の謎を解く」も、主催者と相談してオンラインで実施した。

さらに昨年から計画されていた名古屋大学同窓会と学士会館共催の講演会「宮廷文化の再発見」も、三月二十一日（「稲川先生に学ぶ会」の翌日）、

ウェブナーで実施された。共にライブで主催者と質疑応答もできたのは、新しい試みとして面白い。

・4月21日、「皇室典範特例法の付帯決議に関する有識者会議」の「学識者ヒアリング」で管見を述べる。

※「皇室典範付帯決議に関する有識者会議」：平成二十九年六月成立した「皇室典範特例法」の付帯帯決議に対応するため、ようやく四年近く経った今春、政府（菅義偉首相）が「有識者会議」を立ち上げた（座長清家篤慶応義塾前塾長はじめ委員男女六名）。その第二回ヒアリングに招かれ、今谷明国際日本文化研究センター名誉教授・古川隆久日本大学文理学部教授・本郷恵子東京大学史料編纂所長の三氏と共に管見を公述した（その全容と参考資料は官邸ホームページに掲載）。

・6月初めから『禁秘抄』全訳注の執筆に取り組む。

※『禁秘抄』全訳注：今年「承久の変」（一二二一年）から満八百年にあたる。そこで、この政変を起こし配流された後鳥羽上皇（41歳）と順徳上皇（25歳）の事績を調べ直し、前者については「後鳥羽上皇『大嘗祭神膳秘記』覚書」を『藝林』の次号（十月発行）に掲載した。

一方、後者については、譲位の時までに纏められた『禁秘抄』の全訳注を思い立ち、六月から取り組んでいる。ただ、大まかな訳注は、すでに明治三十四年（一九〇一）初版・大正十四年（一九二五）補訂の関根正直博士（東大古典講習科出身、安政七年〜昭和七年）著『禁秘抄講義』が出ている。これを参考にしながら古写本の翻刻に訳解と新注を加えた拙稿を野木邦夫氏に入手してもらい、順次『藝林』などに連載する。

・8月29日、泉涌寺教学講習会の講話をオンラインで行う。

※泉涌寺の講話：「皇室の御寺」と称される泉涌寺の教学講習会（三日間）への出講は、昨年コロナ禍で延期されたが、渡辺恭秀教学部長の御尽力によりオンラインで実施された。その初日「光格天皇に学ぶ皇室の在り方」について話し、質疑応答もできた。

尚、仁和寺の教学講習会も、昨秋の計画が延期され、今年十二月十四日の予定となっている。その講話「仁和」改元と仁和寺の創建」は、コロナ禍が鎮まれば上洛する。

・9月20日、今日から「幸せの種拾い日録」を書く。

※「幸せの種拾い日録」：昭和四十三年（一九六八）当時九月十五日の「敬老の日」に京子と出会ってから五十二年。その間の主な足跡を手帳メモなどに基づき「わが八十年の歩み」として纏めたが、今日からノート一頁分か半頁分に日々感じた「幸せの種」を拾って記すことにした。

尚、妻が毎日朝夕作る食事は、研究所顧問の伊東俊太郎博士も言われる通り「世界一うまい」。それを一昨年秋から描いている絵葉書と共に、毎日タブレットで写真に撮り、娘と孫に送信している。

- ・10月26日、b s T B S 19・30に出演して「眞子さまの結婚と皇室の在り方」につき鼎談する。

※三年前に内定会見のあった眞子内親王の婚約が、相手の金銭トラブルにより延期の上、婚儀も一時金もない異例の形で強行された。

それに関して今後の皇室の在り方を議論するというので、熟慮のすえ一年半ぶりに東京へ出た。名大後輩の河西秀哉准教授や作家の工藤美代子さんと、かなり立ち入った話し合いができた。

- ・10月29日、中津廣池千九郎研究講座「孝は百行の本」(オンライン開催)で初日の特別講話①②を行うため、久しぶりに研究所へ出る。

V期 終 活 期 (追記)

令和4年(二〇二二) 81歳

- ・正月12日、道徳科学研究センターに出勤し共同研究『皇室野史』の再発見」の初回報告を行う。

※『皇室野史』の再発見：27歳の廣池千九郎博士が京都で「史学普及雑誌」を発行する傍ら明治26年(一八九三)出版された『皇室野史』は、武家時代(中世近世)における皇室と国民の関係を説明しようとした鋭い着眼の労作である。その引証史料再検証するため、橋本・久禮両氏と三年計画を立て共同研究を始めたが、私としては道科研で最後の研究発表となった。

※寄贈展覧の展示：その午前、井出副理事長から感謝状を頂き、記念館で展示品を解説した。

- ・2月9日、渡辺允元侍従長(85歳)の訃報に驚く。

※中津講座：早くから周到な準備を重ねてきた橋本富太郎氏と江島顕一氏や中津関係者の尽力により、三日間、頗る充実した内容となった。

- ・12月1日、道徳科学研究所の月例会で「皇室経済法の成立史と問題点」について研究発表する。この際、個人蔵の近世天皇宸翰類を研究所へ寄贈する。

※研究発表：「皇室典範」と並ぶ「皇室経済法」の成立経緯と改善試案を発表した。

※宸翰類を寄贈：個人的に京都の古書店などから収集した後水尾天皇・明正女帝・後桜町女帝の宸翰と光格天皇の琵琶図を一括寄贈した。

- ・12月12日、幸い元気に満八十歳を迎える。本日付で『未刊論考デジタル集成』DVDROM版①②③を京都の方丈堂出版(光本稔社長)から出し始めた。

※渡辺允元侍従長を悼む：平成10年(一九九八)高橋紘氏との共著『皇位継承』(文春新書)を出す前後から何度も招かれ教示を賜った同氏は、退職後の同23年(74歳)『天皇家の執事』文春文庫版の後書きに、天皇陛下の御心痛を直叙し、皇族女子が結婚後も皇室に留まれる法改正の必要性を明記された。それが実現すれば、満20歳とられた敬宮愛子内親王(3月17日見事な記者会見)の宮家創立も可能になろう。なお、毎日新聞N記者の配慮により追悼記事を寄せた(3月21日朝刊掲載)。

- ・3月19日、大垣北高の多機能教室寄贈記念式典に出席。午後、汗青会公開セミナーで講演。

※寄贈記念式典：昨年度寄贈した多機能教室を見学し、紺綬褒章と感謝状を頂く記念式典に出席した。

※汗青会セミナー：大垣市サイトピアセンターで第11回セミナーを開き、「梁川星巖と紅蘭 おしどり夫婦の功績」について講述した。